

学内広報

for communication across today



- 特集：
- 平成24年度役員等の紹介
 - 平成23年度卒業式・学位記授与式
 - 平成24年度入学式・大学院入学式
 - 平成23年度第2回「東京大学総長賞」
授与式の挙行及び「総長大賞」受賞者決定
 - 東京大学の英文呼称

平成24年度役員等を以下のとおり、紹介します。

総長

濱田 純一

(任期) 平成21年4月1日～平成27年3月31日

理事・副学長

清水 孝雄

(担当) 学術企画 病院

(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

理事・副学長

佐藤 慎一

(担当) 教育 入試 評価

(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

理事・副学長

松本 洋一郎

(担当) 研究 産学連携 情報システム

(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

理事・副学長

前田 正史

(担当) 財務 施設 資産管理 国際

(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

理事・副学長

武藤 芳照

(担当) 学生 総務 コンプライアンス 危機管理

(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

理事

江川 雅子

(担当) 広報 社会連携 経営管理

(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

理事

磯田 文雄

(担当) 人事労務 法務 事務組織 監査

(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

監事

有信 睦弘

(任期) 平成24年4月1日～平成26年3月31日

監事

梶田 淳二

(任期) 平成24年4月1日～平成26年3月31日

副学長

石井 洋二郎

(担当) 教養教育 懲戒

(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

副学長

北森 武彦

(担当) 理系人材育成国際

(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

副学長

五神 真

(担当) 学術研究システム改革

(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

副学長

西村 幸夫

(担当) キャンパス計画室長

(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

副学長

羽田 正

(担当) 国際本部長

(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

副学長

吉見 俊哉

(担当) 教育企画室長 大学総合教育研究センター長

(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

総長顧問

小宮山 宏
根岸 英一

副理事

尾越 和博
(担当) 業務改革 最先端研究支援プログラム
(業務改革推進室長)
(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

副理事

鈴木 敏之
(担当) 経営企画・教育制度 (経営支援担当部長)
(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

副理事

苔米地 令
(担当) 人事制度企画 (人事部長)
(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

副理事

中塚 数夫
(担当) 経理・調達
(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

副理事

平井 明成
(担当) キャンパス整備 資産管理
(資産管理部長、施設部長)
(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

副理事

宮川 光雄
(担当) 柏地区事務機構 (柏地区事務機構長)
(任期) 平成24年4月1日～平成25年3月31日

総長特任補佐

加藤 道夫
(担当) キャンパス計画

総長特任補佐

中井 祐
(担当) 復興支援 国際宿舎

総長特任補佐

難波 成任
(担当) EMP

総長特任補佐

光田 好孝
(担当) 財務戦略

新副学長等の略歴および就任の挨拶

新副学長、新副理事の略歴、および、就任に当たっての挨拶を以下のとおり、掲載します。



副学長
石井 洋二郎

昭和50年3月 東京大学法学部卒業
昭和55年3月 同大学院人文科学研究科
仏語仏文学専攻修士課程修了
昭和57年10月 京都大学教養部助教授
昭和62年4月 東京大学教養学部助教授
平成6年4月 同教養学部教授
平成8年4月 同大学院総合文化研究科教授
平成21年4月 学術博士（東京大学）
平成22年4月 同大学院総合文化研究科
副研究科長・教養学部副学部長
平成24年4月 同副学長

専門分野：フランス文学、フランス地域文化研究
研究内容：

- 1) 石井洋二郎『ルートレアモン 越境と創造』
筑摩書房、2008年
- 2) 石井洋二郎『科学から空想へーよみがえる
フリーエ』藤原書店、2009年
- 3) 石井洋二郎『フランス的思考ー野生の
思考者たちの系譜』中公新書、2010年

教養教育の再構築に向けて

新年度より、教養教育と懲戒担当の副学長に就任することになりました。副学長の職掌に「教養教育」が加わったのは、おそらく初めてのことだと思います。私はいわゆる「駒場」の教員ですが、今回のご指名は、この問題が本郷も柏も含めて、東京大学全体が取り組むべき最重要課題のひとつであるという、濱田総長の力強いメッセージと受け止めております。

本学の学生はもとより、教職員の皆さんの中にも、今なお「教養教育は駒場、専門教育は本郷」と思っている方が少なくないのではないのでしょうか。しかし「教養」と「専門」は、そもそも対立概念ではありません。両者が車の両輪のように協働してはじめて、学問には生命が宿るはずで。

したがってまず確認しておきたいのは、東京大学における教養教育は「教養学部前期課程の教育」をその一部として含んではいても、決してこれと同義ではないということ、つまり最初の2年間で「修了する」ものでも「通過する」ものでもなく、後期課程になっても、さらに大学院に進学しても継続すべきものであるということです。言葉を換えていえば、教養教育は前期課程だけで完結する「閉じたシステム」ではなく、全教育課程を貫いて有機的に連動する「開かれたシステム」でなければなりません。

これに関連して、私が喫緊の課題と考えているのは、本来の職掌からは若干外れるかもしれませんが、いわゆる「進学振分け」の問題です。前期課程の成績平均点を一律に用いる現行方式が、「教養」と「専門」を実質的に分離し、両者の円滑な相互浸透を妨げていることは否めません。厳しい先生の授業は点数が稼げないからやめておこう、留学なんかしていると進学に不利になるからしたくない、といったネガティブな志向を学生たちに植え付けてしまう現在の仕組みを抜本的に変えない限り、真の教養と国際感覚を身に着けた「タフでグローバルな人材」の育成という本学の目標はいつまでたっても実現できないでしょう。

毎年駒場に入学してくる新入生たちの目は、期待と希望に輝いています。教育者としての私たちの責任は、その新鮮な輝きを失わせないこと、いやそれだけでなく、彼らに学問の喜びを伝え、若い知的好奇心を刺激し、一層彼らの目を輝かせることでなければなりません。そうした目標に一步でも近づくべく、任期中は全力で「教養教育の再構築」というテーマに取り組む所存です。



副学長
北森 武彦

昭和55年3月 東京大学教養学部基礎科学科卒業
平成元年2月 工学博士（東京大学）
平成3年11月 同工学部助教授
平成10年7月 同大学院工学系研究科教授
平成22年4月 同大学院工学系研究科長・工学部長
平成24年4月 同副学長

専門分野：応用分光分析、レーザー分光化学、
マイクロ・ナノデバイス化学

研究内容：

- 1) T. Kitamori et al., "Extended-nano fluidic systems for chemistry and biotechnology", Imperial college press, 2012
- 2) T. Kitamori et al., "Integrated Extended-nano Chemical Systems on a Chip", Chemical Society Reviews, 39(2010):1000-1013.
- 3) T. Kitamori et al., "Enhancement of Proton Mobility in Extended-Nanospace Channels", Angew. Chem. Int. Ed. (in press), DOI: 10.1002/anie.201200576

理系人材育成国際

工学系研究科長・工学部長に続き副学長を拝命することとなりました。どうぞよろしくお願いたします。総長濱田先生とのご相談の結果、所掌として「理系人材育成国際」を頂くこととなりました。「理系」は言わずもがな、「人材育成」はタフネスなどのコンピテンシーも含んだ学生教育、産学接続など博士キャリアパス、研究を通じた若手育成、世界的な人材獲得、そうしたことに関連する制度やシステム改革など。したがって、「国際」は国際人材の育成でもなければ人材の国際育成でもなく、人材育成を進める上で必要な国際環境整備などの国際的視野を表すため、あえて最後に取って付けることに落ち着きました。

科学技術立国は人が資源です。科学技術を共創する人材、製品に結びつける人材、市場を創る人材、産業と経済を司る人材、科学技術立国には研究だけでなくありとあらゆるところに優秀な人材が必要です。優秀な人材を魅了して惹きつけてやまない輝ける研究は研究型大学として最も強力な人材求心力であることは間違いなく、高度に優れた研究を如何に支援し維持向上するかは大学運営の基本です。しかし、科学技術立国に必要な分厚いリーディング人材層を輩出していくためには、研究にとどまらず将来を見据えた人材育成システムと環境がますます重要となるでしょう。なぜなら、少子高齢化が進み中等教育から本学への国内人材供給が陰り、一方で世界トップ大学間の国際人材獲得合戦が激しさを増し、国内からの供給難と海外からの導入難が重なれば、入試ランキングの国内ヒエラルキーと研究の国際競争力のみでは、学生も若い研究者もビッグネームも、質・量ともに思うようには獲得できなくなる心配があるからです。

この国と世界を先導する大学として人材育成はどうあるべきか。我が国の科学技術立国を支える人材を質・量ともにどのように世界から集めて育成して輩出していくのか。工学部・工学系研究科の人材育成でも分野により背景や状況は異なり考え方も千差万別でしたが、理系ともなるとそのスペクトルはさらに広がることでしょう。多くのご意見に謙虚に耳を傾け、しっかりしたグランド・デザインのもとに、今必要な手立てを判断し講じることができればと思います。誠に微力ですが、総長濱田先生をお支えし少しでも本学に貢献できるよう努力して参りますので、皆さまのご指導とご助言を頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。



副学長
五神 真

昭和55年3月 東京大学理学部物理学科卒業
昭和58年6月 同理学部助手
昭和60年4月 理学博士（東京大学）
平成10年8月 同工学系研究科教授
平成17年4月 総長特任補佐
平成13年4月～現在 同工学系研究科附属
量子科学研究センター長兼任
平成22年10月 同理学系研究科物理学専攻教授
平成24年4月 同副学長

専門分野：光物理学、光物性、量子光学

研究内容：

- 1) M. Kuwata-Gonokami, "High-Density Excitons in Semiconductors", In: Bhattacharya P, Fornari R, Kamimura H, Comprehensive Semiconductor Science and Technology 2, Elsevier (2011) 213-225
- 2) K. Yoshioka, E. Chae, and M. Kuwata-Gonokami, "Transition to a Bose-Einstein condensate and relaxation explosion of excitons at sub-Kelvin temperatures", Nature Communications 2, 328 (2011)

就任にあたって

東日本大震災では自然の猛威によって多くの尊い命が奪われ、同時に発生した原発事故は人類の活動が地球そのものに不可逆な影響を及ぼしうることを見せつけました。これが科学技術力を誇る日本で起こったことは、科学技術の限界を際立たせることになりました。未曾有の事象を前に、本質を見抜き解決への道筋を自ら見いだす力をしっかり鍛えることの大切さを痛感しています。東京大学はまさにその知力を鍛える場であり、その研究教育の在り方について大きな関心が寄せられています。このような中で、この度、副学長として濱田総長のもとで東京大学の学術研究システム改革を担当することになりました。

私の専門は物理学で、特に光科学の研究を進めています。長年、工学系研究科物理工学専攻を活動の拠点としてきましたが、一昨年古巣の理学系研究科に異動したところです。理と工での活動の中で、学術研究の両輪は、新しい発見によって人類の知の領域を拡大することと、それを活用する道筋を見いだすことであると実感しています。

本部での活動は、濱田総長が理事・副学長の時に、小宮山前総長のもとで特任補佐を務めて以来5年ぶりです。当時、国立大学法人化2年目で、新たに担うことになった経営責任を果たしつつ、与えられた自由度を活かして大学を活性化する仕組みを作ることが課題でした。その法人化もキャンパス整備が進むなど一定の成果があがっています。しかし一方で、教育や学術研究の基盤が不安定になってしまったと感じることもあります。特に若手ポストの不足は、これから学問に取り組む者の意欲を削ぐ深刻な問題です。

日本が今後も世界の中で輝き続けるためには、その源泉となる人材を輩出しつづけないければなりません。本学には優秀で意欲的な学生が大勢集まって来ており、その育成についての責任は重大です。学生諸君の野心を駆り立て、その才能を最大限に引き出すためには、東京大学が擁する最高度の学術研究活動をいっそう活性化し、その興奮と魅力を伝えていくべきです。このためには、改善すべき課題が沢山あります。解決の鍵は、構成員の相互理解と信頼のもとに、シナジー効果を引き出し、東京大学のスケールメリットを最大限に活かすことであると考えています。東京大学が次代を担う若者の夢を育む場となるよう、努力していきたいと思っています。皆様のご指導ご協力をよろしくお願い致します。



副学長
羽田 正

昭和51年3月 京都大学文学部卒業
昭和53年3月 同大学院文学研究科
東洋史学専攻修士課程修了
パリ第3大学第3期博士 (Ph.D.)
昭和58年6月 京都橘女子大学文学部助教授
昭和61年4月 京都大学東洋文化研究所助教授
平成元年4月 同教授
平成9年9月 同教授
平成21年4月 同所長（平成24年3月まで）
平成24年4月 同副学長

専門分野：歴史学

研究内容：

- 1) 羽田正『新しい世界史へ』岩波書店、2011年
- 2) 羽田正『東インド会社とアジアの海』講談社、2007年
- 3) 羽田正『イスラーム世界の創造』東京大学出版会、2005年

目立たない国際本部を目指して、いまは目立つ！

新年度から、副学長・国際本部長を務めることになりました。教職員や学生が国籍や言語に関係なく、創造的な知的活動を自由に展開できる場が「グローバル・キャンパス」だとすれば、そこでは国際本部の活動はほとんど目立たなくなるはずですが、国の内か外かを問わず、他の大学や研究機関とのつきあいは総合企画部や研究推進部が、学生に関わることは教育・学生支援部が担当することになるからです。大学の教育研究とそれに関わる業務を国内と国外に区分し、国外にかかわることはすべて国際本部が担当するという発想は、ある意味で二十世紀的です。私たちは、目立たない国際本部を目指すべきです。

と言っても、ことはそう簡単ではありません。当面は国際本部が頑張っただけで、国際化を進めねばなりません。すでに田中明彦前国際本部長のもとで、『東京大学国際化推進長期構想（提言）』がまとめられ、昨年度には2名の総長補佐による中間評価もなされています。これらの資料に基づいて、着実に諸事業の進展に取り組みたいと思います。その際、私が特に重視したいことが二つあります。一つは、国際的な学生交流の推進、もう一つは、グローバル化の中での多様性の確保です。

本学の学生を一定期間海外に送り出すことは、「タフな東大生」を育てるためにきわめて重要です。関係理事や部局と緊密に連絡を取りながら、そのための環境整備に力を入れたいと思います。他方、外国人学生の受け入れもこれに劣らず重要です。「留学生」として彼らを区別することは、「グローバル・キャンパス」にふさわしくありません。外国人学生が普通の「学生」として勉学に励めるように手厚く効果的な支援を行い、より多くの外国人学生を惹きつける大学を目指したいと思います。

学術世界の共通言語としての地位を固めつつある英語での教育を重視し、引き続きその充実と拡大に努めねばなりません。これは待ったなしです。しかし、それと同時に、とりわけ文系の教育研究においては、日本語や中国語などアジアの諸言語によってこれまでに生み出されてきた膨大な知の体系を積極的に活用する方策を考えたいと思います。これらこそが英語オンリーの英米の大学にはない本学の特徴であり、本学の教育研究に厚みと興行を与える可能性を持っているからです。

課題は山積していますが、元気を出して一つ一つ丁寧にクリアしてゆきたいと思っています。ご指導、ご協力をよろしく申し上げます。



副理事
苦米地 令

昭和56年1月 東京大学採用
 平成9年4月 群馬大学人事課長
 平成13年11月 東京大学人事課長
 平成17年4月 文部科学省大臣官房人事課
 総務班主査
 平成19年4月 同 計画調整班主査
 平成21年1月 同 科学技術・学術政策局
 評価推進室長
 平成23年4月 東京大学人事部長
 同 7月 同 副理事(兼)人事部長

プロフェッショナルとしての職員の養成を目指して

人事制度企画担当の副理事と人事部長を拝命しております苦米地令です。昨年4月から6年ぶりに東京大学で勤務をさせていただいております。

本学の大学運営の基本原則となる「行動シナリオ FOREST 2015」では、「行動ビジョン」の一つとして「高い能力と専門性を持つ職員」が掲げられており、「重点テーマ別行動シナリオ」でも「プロフェッショナルとしての職員の養成」が掲げられております。

その目標としては、①能力・適性を有する職員が、幅広い経験を通して管理・企画能力を磨き、大学経営に一層深く参入する。併せて管理運営に携わる教員の力量を高め、教職協働により大学運営を担う。②職員がチームワークによって教員を支援し、世界最高水準の教育研究活動が柔軟かつ機動的に展開できるようにする。③職員全体の専門性や技能を高め、高度な資格・学位を有する職員の割合を大幅に増やす。④全ての職員が実力本位で評価・処遇され、活躍の場や機会が柔軟に提供されるようにする。⑤全ての職員が大学の公共性を自覚して職責を遂行すると共に、無駄を省き業務を効率化・合理化する工夫を凝らす。ということが掲げられております。

これらを実現すべく、「職員へのキャリアパスの提示」「研修、人事交流の充実」また、「高い専門性を持って教育研究を支援できる職種の確立」「職員の企画力の向上」等に努め、職員が能力を主体的に発揮して職務を遂行し、組織や業務の改革に意欲的に取り組むことができるよう、何より楽しくやりがいをもって仕事ができるように取り組んでまいりたいと思っております。また、幹部職員の資質向上は人材育成の観点からも非常に重要ですので、幹部職員への研修を重点的に取り組んでまいりたいと思っております。

国立大学法人を取り巻く現状は、基盤的経費である運営交付金の削減、総人件費改革等様々な厳しい状況にあります。そのような中、課題を少しでも解決できるよう、新たな人事制度の構築などに取り組んでまいりたいと思っております。

世界に伍して研究成果をあげつつ、我が国の社会における有益な人材を育てていくことを使命としている東京大学が、その使命を果たすとともに、社会や国民の期待に応え信頼を高めていくという社会的責任を果たせるよう、微力ではありますが全力を尽くしてまいりたいと思っております。今後とも皆様のご支援、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



副理事
平井 明成

昭和61年4月 文部省入省
 平成10年4月 信州大学施設部企画課長
 平成15年4月 北陸先端科学技術大学院大学
 先端科学技術研究調査センター教授
 平成20年7月 文部科学省大臣官房
 文教施設企画部参事官
 平成21年10月 東京大学本部統括長(施設・資産系)
 平成22年4月 同 施設部長(兼)資産管理部長
 平成24年4月 同 副理事

物言わぬ建物に気配りを欠かさずに

このたび、4月1日付けで副理事に就任しました平井明成です。引き続き、主に、施設整備と土地建物の資産管理を担当いたします。

既に、平成21年10月から2年半、施設部長・資産管理部長として、東京大学の施設・資産に携わってまいりました。以来、時間を追うごとに、代々の先人たちが築いてこられた我が国では唯一ともいえる歴史的趣のあるキャンパスや建物に、深い畏敬の念が自然と積み重なっていく思いを抱いております。また同時に、最先端の研究を支える施設整備が求められ、常に成長するキャンパスの側面を持っており、この胎動にも似た活力に添えていかなければという思いに急かされるところもあります。

俗に、「何とかと畳は新しい方が良い」などと言われることがあります。建物は新しい時は美しく香りも良い、ですが、古くなるに従って、見た目もそうですが、何より言うことを聞かなくなります。そこで、つい新しいものに交換へと気が行ってしまうところから来るようです。建物が自らどうして欲しいとすることはありませんが、多少なりとも日々気にかけて手を掛けておけば、末長く心地よいものになって行くこともままあります。この点、うちの奥さんに通じるものがないのが多少残念です。

東京大学のキャンパスの中心は、年を重ね、しかし、気品と風格のある貴婦人のような建物群で構成されています。それらに手が加えられるとき、しばしば言いようのない緊張感にとらわれます。また、最先端の才色兼備的な建物も増え続けています。キャンパスの中でお互いが気まずい関係にならないように、それぞれに日常の気配りは欠かせません。気を抜いて機嫌を損ねてしまうと、その関係修復には大きな負担を負うこととなります。嫁と姑が仲良く暮らす奇跡のバランスを求めて、精いっぱい研鑽、努力してまいりたいと思っております。

どうぞ、諸先生方、職員の皆さま方、引き続き、ご指導ご鞭撻賜りますようよろしくお願い申し上げます。

副学長、副理事退任の挨拶

このたび退任された副学長、副理事の退任に当たっての挨拶を以下のとおり、掲載します。

副学長退任の挨拶

前副学長 田中 明彦

昨年4月、理事退任の挨拶を書かせていただきましたが、その後1年間、副学長として国際本部長を務めさせていただき、この度、副学長を退任することになりました。「秋入学」の提案にも見られるとおり、東京大学にとってグローバル・キャンパスの形成とともに世界第一級の研究と教育を維持すること、つまり広い意味の「国際化」は、待ったなしの課題です。私自身は、2008年の夏、国際連携本部長に就任させていただきましたので、本部の一員として国際化の推進に携わって3年半以上がたちました。その後、国際連携本部を改組して、国際本部をたちあげ、本部としての国際化のための体制作りに取り組んで参りました。また、英語で学位のとれるコースを数多く発足させるグローバル30の事業にもかかわらせていただき、より多様な留学生が東京大学で学ぶ環境を作

るために努力してきました。東大生の海外派遣をさらに促進するため、交換留学の仕組みや海外派遣支援策の改善を進めてきたつもりです。いずれの面においても、まだまだ課題が多く、さらなる努力が必要です。また、さまざまな局面で関係者の皆様にご迷惑をおかけしたことも多々あったように思います。しかし、3年半前とくらべると、東京大学の国際化の水準は着実に上昇してきたのではないかと考えています。関係者の皆様に感謝申し上げます。秋入学の議論は、それ自体が東京大学の国際化と密接不可分です。今後、さらに議論を深化させていただくとともに、具体的な措置が展開するにつれ、さらなる国際化が進展していくものと期待しています。

退任にあたって

前副理事 杉山 健一

2007年7月、ご縁があつて東京大学基金「東大130キャンペーン」のお手伝いをするになりました。1971年、工学部化学工学科（修士）を卒業してから石油精製専門の会社に入り、工場のエンジニアリングやオペレーションおよびマネジメント業務に携わってきた私にとって、ファンドレイジングの仕事は未知のものであり、正直不安がありました。

その頃出会ったジョン・D・ロックフェラー・ジュニアの言葉は私を勇気づけ、やる気にさせました。「価値ある大義への寄附をお願いする際は、相手に謝る必要があると決して考えてはならない。それは、あたかも有利な投資に参加する機会を彼もしくは彼女に提供していることに等しい。相手が寄附する義務は、あなたに寄附をお願いする義務と同じ程度である。」

『東大130キャンペーン』では、お陰さまで130億円の目

標を達成することができました。以来、一年毎に契約を更新しながら渉外本部の活動さらには卒業生室の活動に関わってきました。当初の想定をはるかに超えて、本年3月末まで5年近くも、お世話になりました。渉外本部では職場のみなさんをはじめ学内外の多くの方々のご協力を得て伊藤国際学術研究センター、Life in Green、東大球場・芝基金など多くの価値ある寄附プロジェクトに関与させて頂き、卒業生室ではイェール大学卒業生との交流会や地域同窓会との交流、ホームカミングデイの企画・実行など楽しい時間を持つことができました。

何よりも、学内外を問わず本当に多くの方々とお会いしお話できたことは、私にとって大切な財産となりました。引き続き総長室顧問として、微力ながら東京大学に貢献したいと気持ちを新たにしております。

平成23年度卒業式が、3月23日(金)に、安田講堂において挙行された。

式は、第一部(9時開式)文系・教養学部、第二部(11時開式)理系学部の2回に分けて行われ、約2,700名の卒業生(卒業生数3,161名)が出席した。

開式に先立ち、総長をはじめ、理事・副学長、理事、各学部の学部長及び代表教員、並びにご来賓(経営協議会学外委員、各学部の同窓会等代表者)の方々がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となった。

はじめに、音楽部管弦楽団による「ヘンデル作曲『水上の音楽』より『アラホーンパイプ』」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、濱田純一総長から、各学部卒業生代表に、順次、学位記が授与された。

続いて、濱田総長から卒業生に告辞が述べられた後、卒業生総代(第一部 教育学部 小原亮さん、第二部 医学部 松井甫雄さん)から答辞が述べられた。

その後、音楽部コーラルアカデミーによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了した。

なお、本学の卒業式では、壇上において手話通訳を行った。卒業生のご家族会場(御殿下記念館ジムナジウム)では、スクリーンに大講堂での式典の模様(手話通訳の映像と字幕も表示)を放映し、ご家族など約2,900名が出席した。また、2回の式ともインターネットによるライブ中継を行った。

2回目の式終了後13時から14時まで、卒業生及びご家族などに安田講堂を一般開放した。

平成23年度東京大学卒業式 総長告辞



東京大学総長
濱田 純一

皆さん、ご卒業おめでとうございます。東京大学の教員・職員を代表して、お祝いを申し上げます。また、この晴れの日をともにお迎えになっていらっしゃるご家族の皆様にも、心よりお祝いを申し上げたいと思います。

振り返ってみれば、おそらくあつと言う間の大学生活だったような気がするのではないかと思います。この間に、皆さんの知識の量や論理の力、実験の技など、大きく成長したはずです。また多くの友人を得るなど、皆さんの生活の幅は随分と広がったことでしょう。このたび学部を卒業する学生の数は、合計で3,161名になります。うち留学生は61名です。

つい1年前には東日本大震災が発生して、すさまじい惨禍をもたらしました。こうした事態に対応して、昨年度の卒業式は、各学部卒業生の代表の皆さんだけが出席するという異例の形で実施しました。この大震災がもたらした悲惨な事態について、皆さんもさまざまな思いを持ったことと思います。また救援活動や復興支援活動には、少なからぬ学生の皆さんがボランティアとして参加してくれました。こうした大きな社会的出来ごとの中で真剣に考え、あるいは行動することを通じて、皆さんは、日々勉強を重ねてきたことによる学問的な成長にくわえて、社会的な成長も遂げたことと思います。今日そのような経験も経て卒業の日を迎えている皆さんの姿を見ると、実に頼もしく感じます。

もともと、いまの日本社会が置かれている多難な状況を考えて、この場でただお祝いの言葉だけを述べて皆さんを送り出すというのは、教育に携わる者としてはいささか無責任であるという思いに駆られます。幸い、皆さんには、この東京大学での勉学と経験を通じて、大きな困難にも立ち向かっていける基本となる力は付いているはず。であればこそむしろ、私が持っている、これからの日本社会の見通しについての危機感を、



率直にお話ししておきたいと思います。そして、皆さんのように国立大学で、とりわけ東京大学というとても恵まれた環境で学んだ人間が、これから社会でどのような責務を担うことになるのか、改めて思いを強くしてもらいたいと思います。

皆さんもよく見聞きしているように、いまの日本の財政はきわめて厳しい状況にあります。いわゆる赤字国債への予算依存度の増大や国債残高の累積、これからの社会保障関係費の増加などを考えると、果たしてどのような形での財政再建がこの国で可能なのか、なかなか見通しがつき難いところもあります。いずれにしても、財政赤字が大きく膨らんでいること、また年金負担増と労働人口の減少をもたらすであろう少子高齢化現象が急速に進んでいるということは、よく知られている事実です。産業構造の面でも、地方の空洞化にとどまらず、円高などの影響を受けた企業の生産現場の海外移転によって、日本全体の産業空洞化が進む傾向が危惧されます。また、貿易収支についても、なかなか予断を許さない状況が今後も続いていきそうです。

ただ、こうした危機の構造の多くは、すでにだいぶ以前から語られていたことです。にもかかわらず、必ずしも有効な対応がなされないままに、今日に至った感があります。危機はどうやら、私たち自身の中にもあります。例えば戦争といったような大変動に比べれば、危機的な状況へのいまの変化の動きは緩やかです。企業の中には素早く状況に対応しているところも多いのですが、日本社会全体としては、少し手直しすれば何とかなる、明日には少しは良くなるのではないかという、必ずしも根拠の十分でない希望にすぎりながら、ただ年月が過ぎてきたような気がします。「失われた10年」が「失われた20年」になり、さらにはいま、「失われた30年」に足を踏み入れ始めているのかもしれない。

たしかに、日本では高度経済成長を経て、かなりの程度の生活水準が一般的に確保されるようになってきました。こういう時には、人は、近づく危機の足音を聞いても、いままで何とかなってきたしこれからも何とかなるだろう、と考えがちです。物事が急に変化する時には人びとは慌てて対応に走りますが、物事がほどほどに動いて緩慢に社会が縮んでいく時には、人はなかなか行動できないものです。

こうした大きな問題の解決を日本という範囲の中だけで考えようとすると、どうしても限界があります。いま日本が抱えている課題には、アジアあるいは世界という大きな枠組みの中で取組んでいかなければ解決が見通せない事柄も、少なくありません。このような時代状況の中で、私は

東京大学を卒業していく学生は、これまでよりはるかに、国際的な場面で仕事をする機会が多くなるものと想定しています。そして、そこでは当然、海外の大学を出た優秀な人びとと、能力を競い合うことになると思います。おそらく国内においても、競争は高まるでしょう。国内の雇用機会が減少する可能性にくわえて、近い将来には、これまでよりももっと多く、海外の優れた人びとが日本の社会で活躍する時代になるでしょう。今日卒業式を迎えた皆さんの多くは、この場にいる数少ない留学生の皆さんがまさしくすでにそうであるように、国境を越えた、国籍を問わない環境の中で、能力を競い合うことになるはずで

こうした厳しい状況を乗り越えていくだけの十分な力を、この東京大学が皆さんに育んでもらうことが出来たかと問われると、率直に言って、まだ満足できる状態ではありません。高い学問水準を誇る事が出来るなどの面もありますが、国際性や多様性に満ちた環境の中で学生の力を錬磨する仕組みなどの面については、なお強化していくことが必要です。ただ、東京大学の中でしっかりと学生生活を送ったのであれば、自分の力をさらに鍛えるために競争の中に飛び込んでいくに足るだけの基本的な能力は、すでに皆さんの身に付いているはずで

また、皆さんはこれで学部を卒業しますが、さらに大学院に進んで勉強を続ける人も多いと思いますし、一度社会に出てもまたこの大学で学ぶ機会を得る人も少なくないはずで

そうした皆さんのためにも、東京大学の教育力と研究力をさらに、そしてすみやかに、強めていかなければならないと思っています。

東京大学の研究の競争力、また卒業生の競争力は、これまで、東京大学の歴史的な蓄積や東京大学を取巻く社会経済環境にも支えられて、高い水準を保つてくることができました。ただ、それは、東京大学の創立以来、この日本社会が、部分的にはともかく全体としては、国際社会と同じ平面上で競争することにさらされてこなかったからこそ可能であった面もあります。これからも東京大学は、日本国内においてトップ大学であり続けることは間違いないと信じていますが、人、物、サービスが世界を自由に行き交うグローバル化の大きな流れの中で、それが「お山の大将」のようなものになってしまっ

ては困ります。

「世界大学ランキング」というものがあります。そこで

の東京大学の順位は、年々、じりじりと後退しています。そこで使われている指標や指標のウェイト付けが適切かという批判はいくらでも出来ますし、また教育研究の絶対的な水準で言えば、東京大学の総合力はかつてより高くなってきていると思います。ただ、他大学との相対比較という

視点で見ると、私は、東京大学の順位の低下が続く可能性はあながち否定できないと感じています。それはつまり、東京大学の力が伸びる以上に、諸外国の大学の力が急速に伸びてきているということです。

東京大学が思い切り力を出せない背景には、予算削減のために国際化など教育研究の基盤的な部分に力を入れる余裕が乏しいこと、多くの教員が教育研究にあてることの出る時間が少なくなっていること、柔軟な人事や財務運営に制度的な制約があることなど、いくつかの深刻な事情があります。他方、高等教育機関への公財政支出や科学技術関係予算の増加などを背景に、中国をはじめとするアジアの諸大学が、いま、非常に力をつけてきています。分野によっては東京大学よりもすぐれた大学も出てきています。こうした傾向は、今後さらに強まるでしょう。また、これまでやや「内向き」とも見えていたドイツやフランスなどの大学についても、それぞれの政府が国際的な競争力を意識しながら大学の統合や重点投資を強めています。さらにアメリカの有力大学でも、国内だけでなく国際戦略を積極的に展開する動きが見られます。

念のために言っておきますが、私はランキングの順位そのものを気にしているわけではありません。そうではなくランキングに少なくとも傾向としては反映されるような大学の総合力の相対的な低下が、東京大学が送り出す卒業生の皆さんの競争力—国内だけではなく国際的な競争力—の低下の兆候、さらに日本の基盤を支える研究の競争力の低下の兆候を示しているのではないかと、いうことを懸念しているのです。しかも、このような大学をめぐる国際的な競争環境の変化のスピードは、非常に速いものです。

こうした状況を見据えながら、東京大学では、国際化や教育力の強化をはじめとして、さまざまな改革を進めています。東京大学はとても大きな組織です。また、明治期以降の「成功体験」を持っています。今まで通りやっていたら国内でトップの地位は揺るがないと考えるのは自然です。しかし、少なくとも、先ほど申し上げたように、大学を取巻く国際的な環境は、これまでとは大きく様相を異にしています。「今まで通り」でよいのかどうか、真剣に問い直さなければなりません。また、問い直す時には、今まで当たり前だと思ってきた考え方や社会的な仕組みが本当に当たり前なものなのか、ということも考えなければなりません。そうした根本的な問い掛けをすることは、学問というものに携わる人や組織が当然とるべき立場であるはずですし、育てる学生たちの10年後、20年後をも見通すべき教育に携わる者の責任でもあるはずで

社会の在り方を考えるにせよ、大学の在り方を考えるにせよ、私たちの思考や発想は、どうしても、いま出来上がっている制度や仕組みに拘束されがちです。いま現にあるシステムを前提として、その一部を改善することで何とかできればと考えるのは、よくあることです。私たちはしばしば、あるものがほどほどに動いていれば、それで満足して本質的な改革のチャンスを失います。しかし、日本社会をめぐる状況が内外ともに、これほど激しく変動している時代にあつては、現状の仕組みや私たちの思考方法を根本から疑う視点も持たなければ、あっという間に流れに取り残されていきます。これからの時代を作っていく主役となる皆さんには、決してそうであつて欲しくないと思います。いま私が、「秋季入学」という構想について学内で議論してもらっているのも、そうした強い危機感を持っているからです。

東京大学の総長が、困難な社会状況の中に卒業生を送り出していかなければならない、それでも卒業生たちの若い知性と徳性に未来をかけよう、という思いをしたことは、この大学の歴史の中で何度もありました。とりわけ、第二次世界大戦が終了した年に総長に就任した南原繁総長の卒業式における演述には、そうした思いが満ち溢れています。当時のような、焦土から国家を再建していくことが求められた時代に比べれば、まだいまの日本の社会にも経済にも力があり、また大学でしっかり学ぶ機会を得た皆さんの、新しい時代を作る知的な力と人間的な力を信じる事が出来ます。だからこそ、今日、私は、日本社会のこれからの厳しい見通しを語りつつも、なお、皆さんを明るい気持ちで送り出していくことが出来ます。

先ほども言いましたように、社会や組織が緩やかに衰退しつつあることに気付いていても、ほどほどにうまく行っていると思うと、多くの人はなかなか動くことが出来ません。そうした時に、あえて一歩も二歩も前に出て、新しい時代の基礎を作るのが東京大学の役割であり、東京大学の卒業生の役割です。この卒業式を機会に、困難な時代に立ち向かっていく皆さんと、困難な時代に立ち向かっていく大学との、新たなコラボレーションが始まるということをお願いながら、告辞を終えることとします。皆さんのこれからの活躍をお祈りします。

<平成二十四（2012）年三月二十三日>

第一部 答辞

卒業生総代 教育学部 小原 亮

本日は私たち卒業生のためにこのような盛大な式典を催して頂き、誠にありがとうございます。ご多忙のなか、教職員の皆様・御来賓の方々のご臨席を賜り、卒業生一同より御礼申し上げます。また東日本大震災で被災された方々に、この場をお借りして心よりお見舞い申し上げます。

卒業という節目を迎える今、私たち卒業生の胸にはここまで自らが置かれていた境遇、待ち受ける未来への想いが過ぎります。私たち卒業生の多くは昭和の末、若しくは平成の始めに生まれ、両親・祖父母が築き上げた物質的に不自由を強いられることのない時代を謳歌してきました。

このような恵まれた時流のなかで東京大学に入学した私たちは、意識的に様々な自己鍛錬の場を求めました。

私の所属した教育学部では、人がいかに思考し成長し、またいかに他者と関わるかという、社会形成の根幹に係る領域を扱っています。その研究は社会に還元されるべき内容であると同時に、自らに適用して思考することが直接的に個人の価値観形成の糧となるものでした。卒業論文では、「人が如何に錯覚を知覚するか」という、自らの好奇心に沿った研究テーマを主体的に設定させていただき、多大なるご支援を頂きながら執筆できたことを深く感謝しております。

課外活動としては運動会での部活動に心血を注ぎ、多くの仲間と共に、チームへの誇りを抱きながら目標に向かって努力を重ねるなかで多くの教訓を得ました。絶えず目の前の現実に関わり取り組む経験は他では得難いものであったと感じています。

昨今、日本の社会・経済は世界の国々との関係性が密になる一方で、国際的競争力や活力を徐々に失いつつあると言われていています。また東日本大震災を通じて、人々が互いに助け合い社会全体が共存していく必要性を強く実感することになりました。このような難題に直面したことで、従来の政治・社会構造はもはや通用せず、個々人や地域のつながりを重視するなど、新たな価値観の形成が求められる時代に入りました。転換期にはモデルとなる国は存在せず、私たちは現実社会の競争に向き合いながら、同時に新たな社会規範を模索することを迫られています。

このような時代の転換点の中でいかなる心構えで社会に臨むべきか思いを巡らすと、ただ知識の収集に専念するに留まらず、実際の行動を以て他者に働きかけていくことが必要であると感じています。新たな価値観を形成する上で、他者と衝突する恐怖に流されず、時には闘志を前面に表してでも、その発言・態度・行動が本質的に物事を進める上で妥当であるか、追求し続ける覚悟が重要となります。

東京大学という贅沢な環境のなかで切磋琢磨してきた私たち卒業生は、今後各々の進む専門分野において日々邁進し、またどこかで再会して再び刺激を与え合い、社会に優れた指針を提示できるよう努力して参ります。

最後になりますが、未熟な私たちをご指導くださいました先生方、学生生活を支えてくださった職員の皆様、あらゆる場面で惜しみない支援をしてくれた家族、友人に改めて御礼申し上げるとともに、東京大学の輝かしい発展を祈念いたしまして、答辞とさせていただきます。



第二部 答辞

卒業生総代 医学部 松井 甫雄

On behalf of the graduating students, I would like to thank our distinguished guests, our faculty, and our families for holding such a brilliant ceremony for all of us here today. It is a great honor to make a valedictorian speech, and I thank my classmates for allowing me to do this.

Last year, I was very fortunate to study overseas, at the Johns Hopkins Hospital, through an exchange program between the Johns Hopkins School of Medicine and the University of Tokyo. It was rewarding to take part in a rigorous clinical clerkship in a different language, a different culture, and a different healthcare system. At the same time, it was encouraging to hear the names of University of Tokyo professors mentioned in the world's most highly regarded medical institution, which gave me a sense that in the future it will be possible for us, too, to play a leadership role in medicine internationally.

Last year, after the catastrophe that struck our country, we saw both the threat and the promise of science and technology. I believe that this is a good time to consider our

mission as graduates of the University of Tokyo.

Sir William Osler, the father of modern medicine, said in one commencement-day speech, "Gentlemen, I have a confession to make. Half of what we have taught you is in error, and furthermore, we cannot tell you which half it is." I believe that what he wanted to say is that those who would lead the next generation should not just believe blindly in what we were taught in school but challenge existing concepts. Errors may merely result from a misinterpretation of observed natural phenomena, or from a mistaken notion that a certain disease is incurable, despite our potential ability to create a novel therapy. It is our mission as graduates of the University of Tokyo to correct those errors and to give hope to people who suffer, by bringing science, technology, and medicine forward.

To conclude, I would like to express my gratitude to the faculty, to our families, to my friends, and last but not least to the generous hospital patients who taught us about their diseases throughout our clinical clerkships. Thank you.

第二部 答辞(日本語訳)

本日はお忙しい中、ご来賓の方々をはじめ、多くの皆様に臨席を賜り、私たちのために、素晴らしい式典を催して下さったことにお礼を申し上げます。また、答辞を述べるという名誉をいただいたことに感謝いたします。

6年間の学生生活のうち、私にとっては昨年、東京大学医学部と大学間交流協定のあるジョンス・ホプキンス大学医学部でアメリカの臨床実習を体験したことが大きな経験となっております。言語、文化、医療制度が異なる中で、毎朝6時から回診にはじまり、一日に何件もある手術、外来診察、当直と、学生にとっては挑戦続きの毎日でありました。そうした中で励みとなったのは、世界屈指と言われる医療機関でも東京大学の先生がたのお名前が知られていたことです。これは学生として大変に誇らしく、将来的には私達自身が日本のみならず、世界の医学および医療をリードしていくことは決して不可能ではないと感じました。

近代医学の父であるSir William Oslerはある年の卒業式でのスピーチで次のように述べています。"Gentlemen, I have a confession to make. Half of what we have taught you is in error, and furthermore we cannot tell you

which half it is." つまり、卒業後は大学で学んだことを鵜呑みにせず、それらを批判的に吟味し、誤りがあれば、これを修正していかなければいけないということだと思えます。

その誤りというのは単にある事象の間違った解釈から生じたものかもしれません。あるいは、新たな治療法を確立することで、ある疾患が不治の病であるという概念を誤りにできるかもしれません。どのようなものであっても、こうした誤りを改めていくことが東京大学の卒業生となる私たちのミッションであると感じます。

様々な国難に直面する今日であるからこそ、国内のみを見て行動するのではなく、各国の優秀な人材と競い合うなかで、それぞれの専門分野をさらに前に進め、世界に発信することで今苦しんでいる方をはじめ、多くの方々に希望をもたらすこともできると思えます。

最後になりましたが、今日までご指導下さった先生がた、ともに学生生活を過ごした友たち、支えてくれた家族、そして何より、私達医学生に親切にご自身の疾患を教えてくださいました患者の皆様へ感謝申し上げます、答辞といたします。

平成23年度学位記授与式が、3月22日(木)に、安田講堂において挙行された。

式は、第一部(9時開式)理学系研究科、工学系研究科、農学生命科学研究科、医学系研究科、薬学系研究科、数理学研究科及び情報理工学系研究科、第二部(11時15分開式)人文社会系研究科、教育学研究科、法学政治学研究科、経済学研究科、総合文化研究科、新領域創成科学研究科、学際情報学府及び公共政策学教育部の2回に分けて行われた。

式には、約2,600名の修了生(修了者数4,095名(修士課程2,859名、博士課程861名、専門職学位課程375名))が出席した。

開式に先立ち、総長をはじめ、理事・副学長、理事、各研究科長及び各研究所長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となった。

はじめに、音楽部管弦楽団による「ヘンデル作曲『水上の音楽』より『アラホーンパイプ』」が演奏され、壇上列席者の紹介

があった後、濱田純一総長から各研究科・課程の修了生代表に、順次、学位記が授与された。

続いて、濱田総長から修了生に告辞が述べられた後、修了生総代(第一部 薬学系研究科博士課程 石井健一さん、第二部 総合文化研究科博士課程 河井博紀さん)から答辞が述べられた。

その後、音楽部コールアカデミーによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了した。

なお、本学の学位記授与式では、壇上において手話通訳を行い、修了生のご家族会場(御殿下記念館ジムナジウム)では、スクリーンに大講堂での式典の様相(手話通訳の映像と字幕も表示)を放映し、ご家族など約2,900名が出席した。また、2回の式ともインターネットによるライブ中継を行った。

2回目の式終了後13時から14時まで、修了生及びご家族などに大講堂(安田講堂)を一般開放した。

平成23年度学位記授与式 総長告辞



東京大学総長
濱田 純一

今日ここに、晴れて学位記を受け取る皆さん、おめでとうございます。東京大学の教員・職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。また、この日まで、皆さん方を支えてきて下さったご家族の皆さまにも、感謝の思いとともにお祝いの気持ちをお伝えしたいと思います。

このたび大学院を修了する学生の数は合計で4,095名、そのうち留学生は445名、約1割強ということになります。この合計の内訳は、修士課程2,859名、博士課程861名、専門職学位課程375名です。

皆さんの中には、学位記を受け取って、これから社会に出て行こうとする人もいれば、引き続き大学の中で、さらに専門的な研究を行って行こうとする人もいます。これまで、皆さんは、大学院で研究を進める中で、学部での幅広い勉強や経験とはまた違った形で、より専門的な能力の習得に力を注いできたことと思います。それは、「研究を深める」という言葉に表れているように、考察の対象を絞り込ん

で深く掘り下げていく、研究としてきわめて自然な方法です。そのことによって、皆さんの中には、ある特定の分野においては、研究の仲間はもちろん、指導教員の知識さえも超える水準の成果を達成した人も少なくないはずです。

このように、ある特定のテーマに精力を集中することで自分の能力の大きな可能性を確認した皆さんに、今度は、「他者を意識する」ということを考えてもらう良いタイミングにさしかかったと思います。今日はこのことをお話しておこうと思います。

昨年度、この学位記授与式は、東日本大震災の直後の式典となり、小柴ホールで、各研究科修了生の代表の皆さんだけに出席してもらうという異例の形をとりました。今年は再び例年の形式に戻して、この安田講堂で式典を行っています。

ただ、東日本大震災によって被災した地域が元に戻っているというわけではないことは、皆さんもご存じの通りです。つい先日、私は、岩手県の大槌町へ、復興に向けた連携・協力協定を結ぶために行ってきましたが、現地では、やっと少し復興の兆しが見え始めてはいるものの、本格的な復興への動きはまだまだこれからです。いま東京大学の救援・復興支援室には、80あまりの関連プロジェクトが登録されて動いています。これらのプロジェクトの中には、健康・医療にかかわるもの、建物やまちづくり、経済生活・産業にかかわるもの、防災、放射線安全、あるいは資源・エネルギーにかかわるものなど、多様な活動が含まれており、大学院学生の皆さんもこれらのプロジェクトに参加してきています。こうした復興支援のための活動は、まだまだ継続していかなければなりません。

皆さんが大学院に在学している間、さまざまな経験をしたことでしょうか、そのうちでもっとも大きな経験の一つが、東日本大震災の発生であることは間違いないと思います。この震災の発生、大津波、そして原子力発電所の事故と相次ぐ危機の中で、皆さんの多くは、被災した方々のために自分が何を出来るのだろうか、と自らに問いかけたことと思います。皆さんがこれから研究を続ける時に、あるいは研究を社会に生かす時に、そのような思いを持ち続けていくということが何より、「他者を意識する」ということの一つの形です。このたびの大震災がもたらした惨禍を意識し続けることは、皆さんの研究や生き方に、直接的にせよ間接的にせよ、大きな影響を与えていくことになるはずで

「他者を意識する」ことの必要性は、震災に限らず、社会一般への関わり方において広く言えることです。大学での勉学を終えて社会に出ていく、企業などに就職していく皆さんは、仕事の上で当然に、これまで以上に「他者を意識する」ことになると思います。上司・同僚、あるいは取引先など、大学におけるのとはまた異なった多くの「他者」に出会うことになるはずで

「他者を意識する」ことを面倒だと感じるのではなく、むしろ楽しみとし、自分の成長の糧としていただければと願っています。

これは、私が、「国際化」というものが持つ意義についてさまざまな機会に話してきていることに通じるのですが、自分とは異なった考え方や価値観を持ち、異なった生き方をしている人たちとの出会いは、最初はとまどうことがあってもお互いの触れあいの中で、皆さんが持っている潜在的な力を引き出してくれるはずで

「他者を意識する」ためには、ふと立ち止まってみる気持ちの余裕、そして時間の余裕を作ることが必要です。自分だけの世界や自分のペースだけで行動しては、「他者を意識する」ことによって自分が成長するチャンスを失います。私は、皆さんがこれまで大学や大学院で学んできた知的な力というのは、そうした余裕をうまく活用するために必要なだけでなく、気持ちと時間の余裕を生み出すためにも使いうるものだと考えています。知的な力は、ただ物事を効率的・専門的にすすめるためだけではなく、「他者を意識する」ことを通じて自分の成長を促す、社会的なサイクルを動かすためにも必要なものです。これから社会に出て働く皆さんは、大学の中での勉学とはまた違ったさまざまな仕事に追われて慌ただしい日々を送ることになるでしょうが、この「他者を意

識する」という余裕をつねに持ち続けてほしいと思います。

大学でこれからさらに研究を続ける皆さんにも、「他者を意識する」ということを心がけてもらいたいと思います。

その場合に、一つには、「他者」ということで、皆さんの比較的身近にいるはずの他の分野の研究者、他の学問分野を意識するということを考えてみて下さい。つまり、自分がこれまで狭く深く研究してきた分野のことだけでなく、それと他の分野との関係にも目を向ける機会を、意識的に作ってもらいたいと思います。社会的な課題であれ学術的な課題であれ、現代において私たちが直面しているさまざまな難問の中には、一つの専門分野だけでなく、複数の分野が協力して解決に取り組むことを求めているものも少なくありません。皆さん自身もおそらく、自分の研究をすすめていくにあたって、関連する分野の研究の動向についても気になることがあったのではないかと思います。学位記を授与されるこの時期は、一つの区切りとしてしばし、「他者を意識する」余裕を持つタイミングであると思います。専門的な研究を行うとともに他の分野に視野を広げることは、皆さんが専門を深めていく力をさらに強靱なものとしてくれるはずで

もう一つ、「他者を意識する」という場合に、研究にあたって社会の人びとを意識する、ということを考えてもらいたいと思います。それは、硬い言葉で言えば、研究者の社会に対する説明責任ということであり、あるいは科学リテラシー、サイエンス・コミュニケーションといった言葉で語られることもあります。

研究が社会の人びとを意識するという事は、例えば、自分の専門知識を生かして製品が作られ、あるいは事業が生み出されていくという時には、分かりやすいかもしれません。他方で、基礎科学のように社会的な成果がすぐに見えにくい分野では、そうした視点を意識的に持ち続ける必要があるように思います。

研究において生み出される知識を社会が切実に求めていることは、このたびの大震災に際しても、地震、津波の予知や影響測定、あるいは原子力発電所の事故のコントロールや放射線の影響予測などの場面でも示されています。こうした緊急時には、専門的な知識をできるだけ分かりやすく人びとに伝えることが求められるわけですが、今回のような事態を経験すると、大学で研究に携わる者が日頃から、専門的な知識をもっと人びとに伝え、科学的な事柄に対する人びとの判断能力の基盤を育てておく責任があったように感じます。

大震災後においては、科学的にさまざまな見解がある場合には、専門家が特定の一つの答えを断定的に述べるのではなく、むしろ複数ある考え方を率直に示すことによって、人びとが判断を行う選択肢を提供することの重要性も指摘されま

した。こうした判断を人びとが適切になしうるためには、危機が生じる以前の日常的な場で、科学的な事象に対する理解を深め、また、科学がもたらす利益とリスクとのバランスを考える枠組みを身につけられるような環境が整えられている必要があります。いわゆるリスク・コミュニケーションということも、リスクが生じた時点におけるコミュニケーションの在り方だけでなく、普段からのコミュニケーションの蓄積を視野に入れて考えられるべきものです。こうした環境を作ることへの日常的な貢献は、研究に携わる者が「他者を意識する」という時に、当然想定されることであり、また、そこから逆に、研究への思いがけない視点や素材が得られることもあるはずだと思います。

このように、「他者を意識する」ということの大切さを皆さんに伝えようと思った時に、ふと思い出したのが、私がずっと昔、教養学部の学生だった頃、当時必読書と言われて読んだ、『菊と刀』という本です。これは、ルース・ベネディクトというアメリカの人類学者が、第二次世界大戦後の日本の占領統治に役立てようという目的で、日本の文化、日本人の行動様式を分析した本です。その分析について批判も少なからずありますが、日本文化と日本人の特質のいくつかを鋭く描き出していることは事実です。この本の中に、日本人の行動様式を枠づけるものとして、「恥を知る」ことに重きを置く文化があり、個人的要求よりは他者の期待、他者からの評価に応えることを重視して行動するという、よく知られた話が出てきます。

こうした行動様式は、私が今日、「他者を意識する」という言葉で話してきたものとは異なります。『菊と刀』の世界

は、自己犠牲を伴いつつ他者を意識するという構造ですが、そうではなく、自己の成長のプロセスの中に「他者を意識する」ということを位置づける、そういう話を私はしてきました。日本人の伝統的な行動様式では、このように積極的な形で「他者を意識する」ことは、あるいは苦手であるかもしれません。しかし、最近の若い人たちの行動を見ていると、こうした「他者を意識する」という感覚は、一方では伝統的な自己規律的な良さも残しながら、私が今日お話したような方向に確実に動いてきているように感じます。

今日、この場にも多く出席している留学生の皆さんは、日本人の学生と研究や生活を共にする時に、『菊と刀』の中でこのように描かれた「恥を知る」文化に思い当ることがあったり、あるいは、それとはまったく違う印象を受けたりと、日本社会の中でさまざまな経験をしてきたことと思います。留学生の皆さんは、自分が生まれ育った国とは異なる社会の中で、否応なく「他者を意識する」という経験にさらされ、苦勞をしながらもたくましく成長してきたことと思います。留学生の皆さんが、これから日本で生活をするのであれ、あるいは自分たちの国に帰るのであれ、勉学を通じて得られた力と同時に、この「他者を意識する」ことによって得た力を、大いに発揮していただきたいと思います。

最後に、ここにいる全ての皆さんの、これからのさらなるご活躍をお祈りして、告辞を終えることとします。

<平成二十四（2012）年三月二十二日>



第一部 答辞

修了生総代 薬学系研究科博士課程 石井 健一

本日は、濱田総長並びに諸先生方のご臨席を賜り、このような盛大な式典を催して頂き、修了生を代表致しまして心より御礼申し上げます。また、濱田総長からは温かい御告示と激励のお言葉を戴き、感謝申し上げます。

初めに、昨年の東日本大震災により被害に遭われた方々が一日も早く安心した生活を御送り頂けるよう、心からお祈り申し上げます。震災後、多くの実験施設において、大型機器の停止を初めとする節電への取り組みが進められており、科学研究と社会との関わりについて、これまで以上に強く意識するに至りました。私たちは、安定した社会基盤があって初めて研究生活を続けられることを謙虚な気持ちで心に留め、未曾有の災害を経ながらも本日の修了式を迎えられたことを大変有り難く存じます。

私たち理系大学院修了生は、深遠なる「自然科学」の世界に足を踏み入れ、一人の研究者として羽ばたこうとしております。自然との対話を通じてその奥深さの一端に触れ、初めて味わう新鮮な感動を胸に刻みながら、私たちがこの学位記授与式を迎えられたことは、諸先生方の情熱的な御指導の賜物と存じ、深く感謝申し上げます。私たちがここに拝受致します学位記には、Ph. D. すなわちDoctor of Philosophyとありますが、このPhilosophyは訳語である哲学という一学問分野に限定されるものではありません。元来、自然についての知の探求はnatural philosophyと呼ばれてきました。私たちは

断片的な知識の記述に充足するのではなく、論理性を以て体系的な自然観を追究するnatural philosophyを実践し、その方法論を学んで参りました。

現代科学においては、学問の多様化に伴う学際領域の融合が進められています。このような学際融合の潮流の中で、先ほど申し上げたnatural philosophyを如何に追究していくかは、次代を担う私たち若手研究者に課せられた重大なテーマです。私は、医歯薬学分野に身を置き、昆虫であるカイコをモデル生物として、新しい創薬基盤研究に挑戦しております。このような新分野の開拓を通じて私は、周囲に耳を傾け、論理的に対話することの重要性を強く認識するに至りました。現代の科学界に残された諸問題、並びに国際社会が直面する課題の大きさを鑑みて、これからは分野の壁を取払い、互いに連携して解決策を探る必要があると、決意を新たに精励する所存であります。

私たち修了生一同、大学院生活を通じて培った能力を存分に発揮し、近視眼的な流行に惑わされず、ものごとを大局的に俯瞰して国際社会を牽引するリーダーを目指し、精進して参りたいと存じます。最後になりますが、自然科学の魅力を伝えて下さり、今日まで御指導頂いた恩師の先生方に、重ねて感謝の意を表します。また、日々の研究活動を支えて下さった家族や友人に感謝致しまして、修了生答辞とさせていただきます。



第二部答辞

修了生総代 総合文化研究科博士課程 河井 博紀

本日は濱田総長をはじめ、諸先生方のご臨席を賜り、このように盛大な学位記授与式を挙げていただきましたこと、修了生一同、心より厚く御礼申し上げます。また、只今濱田総長より激励のお言葉を賜りましたこと、重ねて御礼申し上げます。

様々な経験を経た仲間達が、今日、この場に集いました。私達は皆、自分自身が価値あると信じる目的に取り組むためにこの東京大学大学院の門を叩き、自ら進んで学習し、研究し新たな知見の獲得と深化を目指してまいりました。私自身は自然界を支配する最も基礎的な物理原理に興味を抱き、その探求に多くの時間を費やしてまいりました。

その一方で、このような基礎的研究は、宇宙の起源に関する知的好奇心を満たすという点以外でも社会に還元されるのだろうか、と自問した事もありました。しかし、基礎的研究で得られた知識が応用的分野で利用されていたり、あるいはその逆もある事を知り、また、このような異分野間での交流はよく見られる事を知るにつれ、そのような疑問はなくなっていきました。様々な知識は全て、切り離されたものではなく、目には見えにくい構造でつながっていたのです。人は生まれながらにして、学ぶ事の喜びを感じることができる

ようつくられています。その喜びを原動力として、多彩な分野で多様な知の創造が行われ、それら全てを基盤として新たな社会の姿がもたらされるのだと、ここに集った誰もが実感していることと思います。

さて、世界はグローバル化の進展により益々複雑になっており、それに伴い、私達の人生は今後も、学びの機会に満ちたものとなるでしょう。事実、現在、我々人類の前には、環境問題、エネルギー問題、金融システムの諸問題等、複雑な課題が山積みされています。私達はこれから、本学で培った力を発揮して日本のリーダーとして活躍する事を目指すとともに、将来の仲間達と専門分野の垣根を超えて協力し、持てる知識の全てを基盤として、これらの問題の解決へ向けても果敢に挑戦していく覚悟であります。

最後に、今日まで私たちをご指導下さいました濱田総長をはじめとする諸先生方、職員の皆様方、共に多くの時間を共有し切磋琢磨した学友、先輩、後輩の皆さん、そしていつも私たちを温かく見守り支えて下さったご家族の皆様、修了生一同心より御礼申し上げます。終わりに、皆様のご健康と東京大学の更なるご発展を祈念致しまして、答辞とさせていただきます。



平成24年度学部入学式及び大学院入学式が4月12日(木)に、日本武道館において挙行された。午前の学部入学式には約3,100名の新生と、そのご家族など約5,500名、合わせて約8,600名が、午後の大学院入学式には、約2,700名の新生と、そのご家族など約3,100名、合わせて約5,800名が出席した。

9時47分、運動会応援部による演舞があり、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、濱田純一総長はじめ理事・副学長、理事、学部長、研究科長、研究所長並びに来賓の根岸英一パデュー大学特別教授が登壇し、10時46分開式となった。

式では、はじめに音楽部管弦楽団、音楽部男声合唱団コーラアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の演奏、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、長谷川壽一教養学部長が式辞を述べた。式辞の後、根岸英一パデュー大学特別教授から祝辞をいただいた。その後、入学生総代古田朋志さん(文科Ⅲ類)による宣誓が行われた。最後に運動会応援部のリードにより新生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の演奏、合唱をもって、11時56分に式を終えた。

大学院入学式においては、学部入学式と同様に、13時36分から運動会応援部による演舞、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、濱田純一総長はじめ理事・副学長、理事、研究科長、研究所長並びに来賓の三谷太一郎本学名誉教授が登壇し、14時30分開式となった。

式では、音楽部管弦楽団、音楽部男声合唱団コーラアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の演奏、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、須藤修学際情報学府長が式辞を述べた。式辞の後、三谷太一郎名誉教授から祝辞をいただいた。その後、入学生総代佐藤輝さん(農学生命科学研究科)による宣誓が行われた。最後に運動会応援部のリードにより新生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の演奏、合唱をもって、15時49分に式を終えた。

平成24年度東京大学入学式 総長 式辞



東京大学総長
濱田 純一

東京大学に入学なさった皆さん、おめでとうございます。東京大学の教職員を代表してお祝いを申し上げます。長い受験生活を終えて大学での新しい経験に目を輝かせている皆さんを見ると、私たちも心が躍り、改めて新鮮な気持ちになります。また、この日を心待ちになさっていたであろうご家族の皆さまにも、心よりお祝いを申し上げます。

今年の学部入学者は3,152名です。その内訳は、文科一類から三類までの入学者が1,309名、そして理科一類から三類までの入学者が1,843名となります。また、このうち留学生の数は、41名です。

つい1年前には東日本大震災、そしてそれに伴う巨大津波が発生して、東北地方太平洋沿岸を中心にすさまじい惨禍をもたらしました。また、関連して福島原子力発電所の深刻な事故も起きました。こうした事態を受けて、昨年度の入学式は、各学部新生の代表の皆さんだけが出席して学内で実施するという異例の形をとりました。今年は再び通常の形式に戻して、この武道館で入学式の式典を執り行っています。

ただ、このたびの大震災によって被災した地域が元に戻っているというわけではありません。被災地では、やっと復興の兆しが見え始めているところもあるものの、本格的な復興への動きはまだこれからです。東京大学では昨年4月に「東日本大震災に関する救援・復興支援室」を設置して、被災された方々への支援にあたっています。教職員のほか学生の皆さんもたくさん、ボランティアとして被災地に入って活動をしてきました。また、この救援・復興支援室には80あまりのプロジェクトが登録されて活動して

いますが、これらは、大学らしく、それぞれの専門分野を生かして被災地の復興支援にあたらうとしているものです。その中には、健康・医療にかかわるもの、建物やまちづくり、経済生活・産業にかかわるもの、防災、放射線安全、あるいは資源・エネルギーにかかわるものなど、多様な活動が含まれています。こうした復興支援のための活動は、東京大学として息長く継続していきたいと考えていますので、ぜひ皆さんも、自分であればどういうことが出来るだろうかと真剣に考え、あるいは行動しながら、学生生活を送っていただきたいと願っています。

さて、この東京大学ですが、在籍している学生の数はおよそ2万8千名で、学部学生の数と大学院学生の数が、ほぼ半々になります。とても大きな組織で、教員はおよそ4,000名近く、事務系・技術系の職員は約2,000名がいます。そして東京大学の主なキャンパスは、本郷と駒場、そして千葉県柏の3つですが、さまざまな実験施設や観測施設演習林などが、北海道から鹿児島まで、日本全国に存在しています。さらに海外にも、各国の大学や研究機関との協力によって、何十もの研究拠点が設けられています。

東京大学では、このように、たくさんの教職員や学生が日本だけでなく世界のさまざまな場所で、幅広く多様な研究に携わっており、その中で、これからの時代を担う人間を育てる教育が行われています。

この東京大学で、私は3年前から総長を務めているのですが、任期は6年ですから、ちょうどこの4月が折り返し点になります。この折り返し点という機会に初心に立ち戻って、総長に就任してから、入学式で私が新入生の皆さんに伝えてきたメッセージを、少し敷衍しながらもう一度お話ししておきたいと思います。

私が総長に就任してすぐ迎えた平成21年度の入学式で、新入生の皆さんに呼び掛けたのは、「タフな東大生」になってほしいということでした。そして、翌年の入学式の時には、「国境なき東大生」になってほしいということをお伝えしました。

この二つのメッセージ、端的に言えば、「よりタフに、よりグローバルに」ということになりますが、これは、これからの時代の激しい変化を見通しながら東京大学が皆さんを教育しようとする時に、つねに意識されるべき価値であると、私は考えています。この二つのメッセージについて、これからお話ししておきます。

まず、「タフ」であることです。新入生の皆さんが、これまでの厳しい受験勉強を通じて、豊かな知識やきちんと

した論理の力、分析の力を備えているはずだということは当然の前提です。その上で、そうした知的な能力を、学問の世界でさらにぎりぎりまで伸ばしていくと同時に、社会に出て確実に通用しうる力に鍛え上げてほしいという思いを、「タフ」という言葉に込めています。別の言い方をすれば、受験勉強的な意味で「頭がよい」というだけでは、これからの大学生活、さらにその後の社会生活を送っていくためには十分ではない、時代を先導するリーダーとなることを期待されている東京大学の学生、東京大学の卒業生としては、さらにプラスアルファの力を身につけてほしいという思いを、私が持っているということです。

私が3年前に、「タフ」であってほしいと述べた時に強調したのは、「社会的なコミュニケーションの場におけるたくましさ」ということでした。そして、「差異を越えて、知識を人に伝え、受取り、納得させ、互いに論じ合うことのできる力」が必要だと述べました。今日ここでさらに付け加えておきたいのは、「タフさと多様性との関わり」という視点です。多様性というのは、東京大学がさまざまな機会に強調している教育研究活動の重要な価値の一つなのですが、ここでポイントのは、一つは、タフさというのは多様なものであること、もう一つは、タフさというのは多様さの中で培われるということです。

まず、タフさの多様性ということ言えば、タフさというのは、人によって、また置かれている状況によって、異なった表れ方をします。自分が正しいと考える道を貫き通すタフさ、失敗にへこたれずに繰り返しチャレンジを続けていくタフさ、慣れない環境の中で生き抜いていくタフさ、こういったこともあれば、難しい本を粘り強く読み解いていくタフさ、あるいは手間のかかる実験や観測を辛抱強く繰り返し続けるタフさもありません。さらには、自分自身の内面で精神的な弱さを克服しようと一生懸命努力するというタフさもありません。このようにタフさのあらわれ方は多様であってよいのです。

いずれにしても、タフさというのは、自分の能力を精一杯に使って物事に正面から向き合い乗り越えていこうとする姿勢、そして、それを持続していく姿勢が、重要な本質であると私は考えています。

大学での勉学もそうですし、また社会に出ればいっそうそうですが、人生を送る上では、なまかな努力では実現できない事柄、計算や予測が不可能な事柄、また不合理で理不尽に見えるような事柄など、数え切れないほどの困難があります。そうした課題に臆せずに向き合って、新しい

道、新しい解決、新しい仕組み、新しい生き方、新しいものの見方を生み出すために、力の限りを尽くすことを厭わないということが、タフであるということだと考えています。

このようなタフさは、多様な経験の中で培われます。人間は、自分とは違った知識や価値、生き方に出会うことによって衝撃を受け、成長していきます。異なったものに刺激を受けてそれを受け入れることもあれば、反発することもあります。反発する時でさえ自分が何者なのかを改めて確認することになり、そこから成長の芽が育ちます。

こうした多様な経験の第一歩は、読書です。本の中には過去から現在に至る先人の多様な知恵や多様なものの見方が詰まっています。その意味で、皆さんの大学生活の間には、たくさんの本を幅広く読んでもらいたいと思います。そして、それとともに大学生活で大切なのは、本という頭だけの知識では無く、さまざまな社会的経験の中で自分とは異質なものにさらされる機会、場合によっては、とまどい、迷い、悩む機会を、できるだけ数多く持つということです。

そうした知識や経験を通じて、困難な課題に直面した時も、どう取組めばよいのか知恵や工夫をめぐらす柔軟性、そして、何とか出来るのではないかとという自信や前向きの姿勢が育ちます。それがタフさの源となります。

3年前の入学式でタフさについて述べた時は、ちょうど前年にリーマン・ショックが起こり、その後の世界的規模

での金融・経済の激しい動揺の状況が私の頭にありました。しかし、その後も、ギリシア危機をきっかけとしたヨーロッパ諸国の不安定な状況や国際社会における政治経済バランスの変化など、不透明さはさらに増す兆しをみせています。また、日本国内でも、財政再建や少子高齢化の進行、そして大震災からの復興や原子力発電所の事故への対応など、課題はより深刻になってきています。明確な処方箋が見えないこと、予測可能でないこと、計算通りにはなかなか進まないこと、が次々生じてきているのがいまの社会状況です。ただ、東京大学で学んだ人たちが、そうした事態を前にへこたれる、あるいは手をこまねいているようでは困ります。このような時代を生き抜いていく皆さんに「タフさ」を求めたい、そしてそのように育てたいという私の思いの背景は、こうしたところにあります。

さて、もう一つ、私が新入生の皆さんに語ってきたのは、「国境なき東大生」になってほしいということでした。

もちろん、専門知識と語学力を駆使して、世界を飛び回るような活躍をしている東京大学の卒業生はすでにたくさんいます。ただ、国際的な経験をすることの意味は、何より、自分がこれまで生きてきた世界とは異なった考え方や発想、異なった行動様式や価値観と触れあい、刺激を受けることで、自分を成長させていくところにあります。そうした成長を通じて、より大きな貢献が社会に、日本のみならず世界に対してできるように、という思いで、「国境なき東大生」であってほしいと、私は願っています。



そして、このようにして培われる力は、さまざまな異質なものを自分の中に取り込むことによって、時代や環境の新しい変化にも対応していくことが出来る力ともなります。この点は、さきほど触れた、多様性に満ちた環境がタフさを育む、という話に通じてきます。

今日あらゆる場面でグローバル化がすさまじいスピードで進んでいる世界では、国境という障壁がどんどん低くなってきています。こうした時代には、とりわけリーダーとしての役割を期待される人間には、たんに一つの国の枠の中だけではなく、国際的に通用する競争能力が求められます。皆さんの能力は、ただ日本人相互の間で競争し比較されるだけではなく、他の国の優秀な人々とも比較され評価されていくことになるわけです。実際、ここにいる数少ない留学生の皆さんは、そうした厳しい環境の中で頑張ろうとしています。すでに企業の国際展開や自然科学系を始めとする研究交流などの場面で起こっていることが、少なくとも東京大学を卒業していく皆さんの周りではごく日常的なものになっていくはずです。

言うまでもなく、そうした能力は競争のためだけではありません。競争と同時に国境を越えた新しい協調の仕組み新しい国際社会の秩序や文化、そこを生きる人たちの人生のスタイルや価値観も生まれていくはずです。東京大学で学んでいく人たちには、そうした新たな国際社会を作ることへの貢献も通じて、次の時代を担う役割を果たしてもらいたいと願っています。

最後になりましたが、今日この場にお越しいただいてい

る、ご家族の皆さまにも、一言申し上げておきたいと思えます。

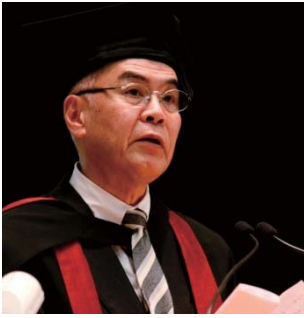
皆さまも、いまの時代が、皆さまの若い頃と比べて、非常に厳しく見通しにくい時代になっていると感じておられるだろうと思います。かつては、東大生、あるいは東大卒という肩書があれば、それなりの人生を送ることができました。しかし、私は、これからの時代、いまここにいる皆さまのお子さんが活躍する時代は、国際化の度合いも社会経済の姿もいまとは大きく異なる時代になるだろうと思います。当然のことですが、私たちが提供する教育も、いまの時代を前提にして行うのではなく、来るべき時代を想定しながら行っていかなければならないと考えています。このたび東京大学に入学されたお子さんには、さまざまに工夫された授業や多様な経験の機会を、これまでの受験勉強の時代と同じような緊張感と、さらにくわえて主体的な問題意識を持ちながら、活用してもらいたいと願っています。

東京大学の教育研究活動が拠って立つ柱である東京大学憲章は、「世界的な視野を持った市民的エリート」を育成することをうたっています。今日ここにいる新入生の皆さんが、「よりタフに、よりグローバルに」ということを意識しながら勉学をすすめていくことを通じて、まさにこの「世界的な視野を持った市民的エリート」として成長してくれることを心より期待しています。

<平成二十四（2012）年四月十二日>



教養学部長 式辞



東京大学教養学部長
長谷川 壽一

雨上がりの鮮やかな朝を迎えることができました。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。教養学部教職員を代表し、駒場キャンパスへの歓迎の意を表したいと思います。また、ご家族の皆様にも教養学部長として心よりお喜び申し上げます。

駒場キャンパスは、東京大学の学部生が最初の2年間の勉強とサークル活動等の学生生活を過ごす場です。高校までとはまったく異なる学びの世界との出会い、新しい友との交流、大半の地方出身の諸君にとっては初めての一人暮らし等々、刺激に満ちた新生活が始まります。他方、これまでとは激変する環境の中で皆さんは、とすれば不安や心配事を感じるかもしれません。それは当然なことでしょう。教養学部では、教職員ならびに上級生が、皆さんの学業や生活がスムーズに進むようサポートを惜しみません。

本日は、未来というキーワードで二つの話題を通して、皆さんへの祝辞を述べたいと思います。一つ目はどちらかという具体的な話で、東日本大震災と被災した子どもたちの未来についてのことです。そして二つ目は、一つ目よりも不確定な話ですが、皆さん方自身の未来についての話です。

昨年の入学式は、このように全員が晴れやかに集うものとは異なり、抽選で選ばれた33名の代表者のみが参列する慎ましいものでした。実際、原発事故が未だ収束せず、危機と直面しながらの緊張した入学式でした。第二次大戦以降、日本が最大の打撃を受けた昨年のこの時期は、絶望の縁からどうやって希望の糸をたぐり寄せることができるかを、大学でも社会でも誰もが暗中模索し続けていたことが思い出されます。

一年が経ち、マスメディアでは「復興」や「再生」という言葉が飛び交い、被災地では復興バブルという言葉さえ聞かれます。しかし、バブルは一部の表面的な現象に過ぎません。

2週間ほど前、春休みを利用して、私は宮城県北部から岩手県中部までの沿岸部の被災地を訪れました。被災地を結ぶ国道45号線沿いに北上し、国道から小さな港町に至る小枝のように伸びた地方道に入ると、どの沿岸部の町並みも例外なく廃虚と

化していました。瓦礫の撤去が進み、何もない広々とした土地は、一見すると、新興造成地のような錯覚に捕らわれますが、そこには人影はなく、流された家のコンクリート基礎だけが空しく残されていました。内陸の仮設住宅では、支援物資はたしかに豊富でしたが、やることのないお年寄りの多く（おもに男性ですが）は生活不活発病に悩まされているとのことでした。生活不活発病とは、生活が不活発であることが原因で、心身機能のすべてが低下する病気のことで、学術的には「廃用症候群」と呼ばれる疾患です。

駒場の大学院生がリーダーとなって学習支援を続ける現場（南三陸町の子どものための施設「子ども未来館」）では、卒業式を終えたばかりの中学生たちと二時間ほど話しました。お年寄りと違って、仲間同士の繋がりが強い彼らは、屈託ない笑顔で、高校生活への抱負やその先の将来のことについて前向きに語ってくれましたが、彼らが置かれる学習環境は大変に惨めなものでした。仮設住宅には個室もなく、教材を買う資金も十分でなく、人間関係も不安定です。教育学者の佐藤学先生によると、阪神淡路大震災が教育面で残した爪痕は今なお完全には癒えず、学力への影響は未だに残っているとのことですが、東日本大震災が子どもたちに与える影響はさらに大きく、長期化することでしょう。

私が新入生の皆さんに期待したいのが、今述べたような子どもたちに対する支援です。復興と再生の鍵は、被災地の子どもたちが握っているといってもよいでしょう。彼らが希望を持って成長する限り、復興と再生への道は開けますが、彼らが二次的、三次的な被害や不利益を被るならば、被災地には未来はありません。子どもがしっかりと、明るく成長していくことは、保護者にも心のゆとりをもたらします。そして、コミュニティ全体の活性化に繋がります。

駒場キャンパスでは、これまですでに、学生や大学院生諸君が、被災した子どもの学び、遊び、育ちの場でボランティアとして活躍していますが、皆さんにもぜひ、長期休暇などを利用して、被災した児童生徒の支援に参加して欲しいと願っています。皆さんはご自身の才能と努力に加えて、多くの方々に支えられて、こうして晴れて東京大学に入学したわけですが、被災した子どもにとっても学んで成長する機会をサポートして欲しいと願う次第です。損得とは無縁のボランティア活動に参加する、このこと自体、皆さん自身にとっても成長の糧を与えてくれるはずです。

さて、二番目の話題は、皆さん自身の将来についてのことです。私は皆さんの先輩にあたり、ちょうど40年前の1972年に東

京大学に入学しました。東大紛争の余韻が残る頃で入学式は挙行されず、入学早々、学生自治会の学費値上げ反対決議を受けて長期ストライキに突入しました。その頃の私が今の自分を、そして今の日本と世界を想像できたかという、はなはだ心許ない限りです。できれば研究者になりたいという夢だけは、何とか叶いましたが、グローバル化も地球温暖化も、まして大規模原発災害も、当時の私にはどれも思いも至らないことばかりでした。

1972年は、ローマクラブの第一報告書『成長の限界』が発表された年でした。その中では、このまま人口増加と環境破壊が続くと、約20年で石油資源が枯渇し、環境悪化によって100年以内に人類は成長の限界に達するという予測がなされました。この提言の影響は大きく、世界各地で原子力発電所の建設が加速されたこともその影響の一つです。

現実はどうであったかという。埋蔵エネルギー資源の枯渇についても、食料生産についても、『成長の限界』の予言ほどには、現代社会は深刻化しておらず、あと60年で人類が破滅の危機を迎えると思う人は今では少数派でしょう。しかし、環境問題については、地球温暖化が『成長の限界』が予言した方向でじわじわと進んでいます。エネルギー問題にしても、震災以降、電力不足がにわかに現実の問題として再浮上しました。果たして、我々は科学・技術と政治の力で、環境・エネルギー問題を乗り越えることができるかどうか、これからの大きな論点です。

このような状況の下、皆さんは自分自身の40年後、あるいは60年後をどこまで思い描けるのでしょうか。それは皆さんのお子さんやお孫さんの時代を予測することになります。

1年後すら確定的なことは何一つ言えないという皮相な見方もありますが、皆さんの希望や夢は、未来予測と連動しています。

進化人類学を専門とする者として、一つだけ強調しておきたいことは、人類を取り巻く環境が、進化の過程で古（いにしえ）から慣れ親しんだ、直感で理解できる環境から、世俗知や個人の経験知だけでは対応しきれない前人未踏の新環境へと激変しつつあるということです。管理や制御がきわめて困難な原子力エネルギーの利用、個人の脳では処理しきれない情報の氾濫、新興感染症によるパンデミック、もっと身近には共同体社会の崩壊とそれに付随する心理ストレスの激化など、これらは一例に過ぎません。『成長の限界』で問題となった、人口、食料、環境、政治といった少数の変数だけでは、もはや皆さんの未来は語りることができなくなっています。未来予測には、まさに知の総合力が要求されるということです。

ここで新入生の皆さんに望むことは、時間、空間を超えて世界を認識する知的解像度をできるだけ磨き上げ、自分自身のぶれない座標軸を築き上げて欲しいということです。一つの専門だけに固執しては、座標軸も世界を認識する地図も描けません。広い意味での教養教育は、皆さんの世界観の構築を後押しすることだと思っています。駒場での学びを通して、未来を語る力をぜひ身に付けてくださることを切に願っています。

<平成二十四（2012）年四月十二日>



祝辞



2010年ノーベル化学賞受賞者
パデュー大学H.C. ブラウン化学科
特別教授

根岸 英一

めでたく入学試験に合格されて、今日、東京大学に入学された皆さん、心からおめでとうございます。ここにおられる皆さんは、同年代の若者たちの中で、何百人あるいは何千人に一人というインテリジェンスを持っておられるといえるでしょう。

極めておおざっぱな話で恐縮ですが、ノーベル賞の歴史、約110年（1901–2012年）の間に約1000人（ 10^3 人）弱の人がノーベル賞を受賞し、その間におよそ100億人（ 10^{10} 人）がこの地球上に住んだそうですから、約1000万人（ 10^7 人）に一人の割合でノーベル賞受賞者が出たこととなります。非常に低い確率と思われるかもしれませんが、もし、一千人に一人の資質を持っていると考えられるあなたが、一万人に一人（ 10^4 分の1）と考えられる知的活動をノーベル賞の対象となっている分野で成し遂げたとすると、ノーベル賞もかなり身近なものになっているかもしれません。それでも、 10^7 分の1という夢物語のような話ですが、これを10人に一人というコンペティションの繰り返しで、7回、1位になるようなプロセスを想像してみるのも一案かもしれません。たとえどこかで失敗しても、敗者復活戦もあることを忘れてはならないでしょう。

私自身を振り返ってみると、神奈川県当時のエリート高校から東京大学に入学した時点では、 10^3 分の1くらいの資質を持った若者だったような気がしておりました。残念ながら入学後は非常に不勉強で、大学を卒業する頃にはかなり後退していたと思います。それでも幸いにして入社した帝人は、当時、急成長していた化学繊維会社のひとつで、著名な政治家でもあった大屋社長は「若者よ。英語、ドイツ語、フランス語などの外国語を習得して、海外に出て、研鑽を積むように」と入社式で激励をいただくくらい、留学を推奨していました。偶然ではありましたが、私は病気で留年した大学三年生ごろから、高校時代の同級生の何人かと英会話を学び始めていたことも幸いして、入社2年目の1960年に米国のFulbright-Smith-Mund All

Expense Scholarshipをいただき、1960年秋から1963年夏までの3年間、フィラデルフィアにあるペンシルベニア大学で勉強・研究の末、Ph. D. in Organic Chemistryの博士号をいただきました。

今、振り返ってみると、7つの階段というよりはむしろ、7段の崖登りの4段目をFulbrightの70~80人に一人というテストに合格したことと、博士号を取得したことで、克服した感が強いです。

また、ペンシルベニア大学で過ごした1960年から1963年の間に、20人は越える数のノーベル賞受賞者の諸先生や、この人は必ず受賞するであろうと思われる先生方（例えば、1965年にノーベル賞を受賞しましたハーバードのR. B. Woodward先生）が次々と講演にこられて、彼らも同じ人間なのだと思います。講演に聴き入っていたことも大きなインパクトを与えてくれた経験でした。特に私の研究キャリアを通じての恩師（メンター）となった、パデュー大学のH. C. Brown教授のヒドロボレーションに関する講演を1962年に聴いたことがきっかけで、「有機合成を目的とした有機金属化学」を自分の生涯の研究テーマとする気持ちが固まりました。

1966年から1968年のポストドクトラル研究員の後、Brown先生のすすめで、1968年から1972年の4年間、助手として研究する間に、遷移金属触媒の重要性を感知するに至りました。Brown教授からは、極めて手堅い研究手法や研究哲学を種々、教えていただきました。7段の崖登りの5段目と言えます。

世界の最高レベルにいる指導者から、マンツーマンのコーチングを受けることは、スポーツや芸術の分野でよく見られるものと同じで、7段の崖登りの4から6段目ぐらいで欠かせないものだと強く思っています。ここで重要なことは、最高レベルのコーチのいるところへ行くことで、それがパデュー大学だったから、私はパデュー大学に行ったわけです。それが中国であれ、イスラエルであれ、それは重要ではないはずです。むしろ現在、唯一の世界語ともいえる英語の重要性を見逃してはなりません。

私はシラキュース大学から助教授のオファーをいただいた1972年から、パデュー大学に教授として迎えられた1979年までの7年間に、のちにノーベル賞をいただくに至った「パラジウム触媒を用いたクロスカップリング」の発見と開発をテーマにして、約3年間（1976–1978年）で10報近くを報告したことで、6段目の崖を登った感があります。

1980年頃からは、パラジウム触媒を用いたクロスカップリン

グは順調に展開し、いずれ近い未来に、有機化学史上、もっとも広範囲に応用できる合成反応になるであろうと考え始めるに至りました。ペンシルベニア大学での2年目に思いついたレゴゲーム的な発想も、ここまで来ると、我々の研究室だけではなく、世界規模の研究に発展し、約35年後の今日に至っています。

ここでもうひとつ、忘れてはならないのは、どんなことも「無」から出てこないということです。まさに、“Nothing comes from nothing”という「サウンド・オブ・ミュージック」の歌のくだりです。パラジウム触媒を用いたクロスカップリングもCuやNiを用いた、パイオニアリングな研究なしには、発見も展開も遅れていただろうと思います。見方によっては、20~30人はいたと思われる候補者の中から私を含む3人が2010年に選ばれたのは周知のことですが、この世の運、不運のいたずらを感じないわけにはいきません。

それと同時に、2000年ごろから、時折、妻のすみれに「まあ、良くて10人に一人くらい。ただし、悪くても100人にひとりということはないと思う。ここまでやって来たのだから、いただけるものなら喜んでいただくが、いただけなくても、やるべき仕事はやってきたという自負心には変わりはない」と、あたかも自分に言い聞かせるように言っていました。

私は病気で留年した二十歳の頃、人生の究極の目的は、幸福をつかむことで、幸福をつかむためには第1に健康、第2に家庭、第3が好きで世間の役に、直接、間接に役に立つ仕事で、自分の収入よりできるだけ多くを世間に与えられること、そして第4がいくつかの自分が本当に好きなホビーを持ち続けることだと考えるに至りました。第3の要素は、ノーベル賞と密接に関係するものの、ノーベル賞を必要とはしません。それでも発表の2日後に、ハッと気がついたのは、10年くらい、頭のどこかに垂れ込めていた暗雲のようなものが去って、頭がすっきりと晴れていることでした。その後、暗雲は戻ってきていません。

最後に、ひと言、英語のメッセージを述べて、私からお祝いの言葉といたします。

Pursue your lofty dreams with eternal optimism!

<平成二十四（2012）年四月十二日>

*本原稿は、事前に執筆された草稿です。

当日の内容は近日中にHPに掲載される予定です。



平成24年度大学院入学式 総長式辞



東京大学総長
濱田 純一

このたび東京大学の大学院に入学なさった皆さん、おめでとうございます。これから皆さんが、さらに深い学問の世界に分け入って、充実した学生生活をお送りになることを願っています。ここにいる皆さんの中には、博士課程に進学する人もたくさんいますが、さらに研究の最先端を究めていってほしいと思います。

また、今日のこの場には、皆さんの大学院への入学を支えて下さった、ご家族の皆さまにも多数ご出席いただいています。心からお祝いを申し上げたいと思います。

今年の大学院の入学者は、4,502名です。学部の新入生は3,100名余りですので、その約1.5倍近い数ということになります。その内訳は、修士課程が2,927名、博士課程が1,221名、専門職学位課程が354名です。入学者の中で留学生の数は467名、つまり入学者の1割強を占めています。また、東京大学以外の大学から入学してきた皆さんも多く、学部時代とはまた違った、多様性に満ちた環境の中で、皆さんの力が切磋琢磨されていくことを願っています。

さて、昨年3月に起きた東日本大震災とそれに伴う巨大津波、そして福島原子力発電所の事故から1年余りが過ぎました。当時のそうした事態を受けて、昨年度の入学式は、各研究科新入生の代表の皆さんだけに出席してもらい、学内で実施するという異例の形をとりました。今年は再び例年の形式に戻して、この武道館で入学式の式典を執り行っています。

ただ、このたびの大震災によって被災した地域が元に戻っているというわけではありません。被災地では、少しずつ復興に向けて動きだしているものの、本格的な復興への取り組みはまだまだこれからです。東京大学では昨年4月に「東日本大震災に関する救援・復興支援室」を設置しましたが、さまざまな専門分野を生かした復興支援プロジェクトがこの支援室に登録されて、大学院学生の皆さんも参加して実施されています。また、教職員のほか学生の皆さんもたくさん、ボランティアとして被災地で活動してきました。こうした復興支援のための活動は、東京大学としても息長く継続していこうと考えていますので、

ぜひ皆さんも、大学院で過ごす間も、自分にどういうことが出来るだろうかと真剣に考え、あるいは行動をしていただければと思います。

今日は午前中に、この同じ場所で学部の入学式が行われました。そこで私は、新入生の皆さんに、「よりタフに、よりグローバルに」というメッセージを伝えました。こうしたメッセージは、私が3年前の総長就任以来、繰り返し学生の皆さんに伝えてきたことで、東京大学の学部から大学院に進学した皆さんは、ある程度目にし、あるいは耳にしてきたことと思います。この4月はちょうど私の総長任期の折り返し点になりますので、改めて初心に立ち返って、このメッセージを新入生の皆さんに伝えたのですが、この「よりタフに、よりグローバルに」という意識は、大学院学生の皆さんにも同じく期待をしたいことですので、まずこの点をかいつまんでお話ししておきたいと思います。

まず、「よりタフに」ということですが、このタフさというのは、人によって、あるいは置かれている状況によって、表れ方はさまざまです。いずれにしても、タフさというのは、「頭がよい」「知識がある」「弁が立つ」というだけではなくて、自分の能力を精一杯に使って物事に正面から向き合い乗り越えていこうとする姿勢、そして、それを持続していく姿勢が、重要な本質であるとは私は考えています。

大学での勉強もそうですし、また社会に出ればいっそうそうですが、人生を送る上では、なまかな努力では実現できない事柄、計算や予測が不可能な事柄、また不合理で理不尽に見えるような事柄など、数え切れないほどの困難があります。そうした課題に臆せずに向き合って、新しい道、新しい解決、新しい仕組み、新しい生き方、新しいものの見方を生み出すために、力の限りを尽くすことを厭わないということが、タフであるということだと考えています。

そして大切なことは、こうしたタフさというのは、さまざまな学問的、社会的、あるいは人間的な接触の中で育っていくものだということです。タフさは多様な経験の中で培われます。人間は、自分とは違った知識や価値や生き方に出会うことによって衝撃を受け、成長していきます。そうした経験を通じて、困難な課題に直面した時も、どう取組めばいいのか、知恵や工夫をめぐらす柔軟性、そして、何とか出来るのではないかとという自信や前向きな姿勢が育ち、タフさの源となります。皆さんには、大学院生活の間に、少しでも多くそうした経験を重ねてほしいと思います。

もう一つ、「よりグローバルに」ということですが、国際化

というのはたんに語学が出来る、言葉が通じるということだけではありません。むしろ国際化の価値は、世界の中に存在している多様性にさらされ、異質なものに触れて成長するきっかけになるということにあります。つまり、自分とは異なった考え方や発想、異なった行動様式や価値観と触れあい、それらの刺激にさらされる機会を持つということです。そうした刺激を自分の中で消化していくことによって、国際的な競争や協調の場面で活躍できる力と同時に、時代や環境の新しい変化にも対応していくことが出来る力がつくはずだと考えています。今日の学術研究が、さらには社会が、こうした力を求めていることは、言うまでもないことです。

皆さんにはぜひ、この「よりタフに、よりグローバルに」ということを強く意識しながら、充実した大学院生活を送ってもらいたいのですが、今日これからお話ししたいと思っているのは、皆さんにとって身近であるはずの、「表現」をするということについてです。

皆さんはこれから大学院で自分の専門研究を深めて行くわけですが、多くの場合、その研究の成果は、何らかの形で表現されることになるはずですが、皆さんが研究に携わるといことは、表現をするということとかなりの程度重なっています。そこで、表現を行うことの意味、さらに、表現に伴う責任について触れておきたいと思います。

表現をすることの意味は何なのかというと、まず思い浮かぶのは、人に伝えるということです。しかし、それ以前に、そもそも表現という行為には「自己実現」という意味合いがあります。私は表現の自由という分野の研究に長く携わってきたのですが、そこで、表現の自由の機能の一つとして、「自己実現」という言葉が出てきます。つまり、何か表現をするというのは、精神の作用を通じて人間としての可能性を実現していく、そしてそれによって自分の人格というものを形成していくきっかけになる、ということです。表現するという行為は、感情や思考を活発なものとする触媒ともなります。かりに、研究は自由にやって結構だ、けれども発表はしてはいけないと言われると、多くの場合、研究者の成長は止まるだろうと思います。

表現するということがこうした精神の特別な活動であることを、私たちは通常は意識しません。ただ、ある種の極限的な状況に置かれた時に、そうした表現行為の本質が見えてくることがあります。

昨年の大震災後、いくつかの言葉が繰り返し飛び交ったことを記憶している人も多いと思います。「頑張ろう」、

「寄り添う」、「絆」などといった言葉がその例です。それは、単なる流行語というよりは、個々人の内面から湧き出た言葉であり、かつその言葉を気持ちの中に留めることなく外部に発したい、そして共有したいという思いが込められたものであったような気がします。そこには、何か伝えるという以上に、自らの思いを表現したいという、一種の「自己実現」的な意味合いが伴っていたように感じます。

私自身も、大震災後の東京大学の復興支援の方針として、『生きる。ともに』というメッセージを出したのですが、これは、大学の運営責任者としてのスタンスを述べるものであったと同時に、個人としても自分の思いをそういう形で表現せずにはいられないという感覚を、その時に持ったことを記憶しています。大震災のすさまじい惨禍を前にして、おそらく皆さんの中でも、何か言葉にしたい、言葉を発せざるを得ない、といった衝動に駆られた人が少なくないのではないかと思います。それこそ、表現行為と自己の内面の一体性が表れた瞬間ではないかと思います。

このように、表現を行うということは、本来、自分の内面を絞り出すということです。そうした内面を絞り出すことによって自分の存在というものを確認するということがあり、表現は人格と深く結びついています。

表現という行為のこうした原初的な意味合いを理解することから、表現という行為の在り方について考える手掛かりも得られます。

まずは、表現が誠実なものでなければならないということです。皆さんが、研究論文のように何か表現をしようとする時には、他人の言葉を安易に借りるのではなく、自分の言葉や自分の文章をひねり出すために苦闘しなければならないということです。また、表現の確たる裏付けとなる資料やデータを、自分で必死に汗をかいて見つけ出さなければならないということです。無数の先人が蓄積してきた膨大な業績の上に、自分という人格が何を新たに付け加えることができるのか、それを皆さん自身の言葉と努力で探ってもらいたいと思います。

表現が人格と結びついているということは、表現の誠実さが人格の誠実さにもつながってくるということです。また、表現が自己実現であるというのは、表現行為に至るまでの苦闘の過程、すなわち、言葉を探し、文章を練り、資料やデータを集める苦闘の過程を通じてこそ、皆さんは成長するということです。

ところで、表現の自由の意義ということを議論するとき、こうした自己実現という個人的な機能と並んで、それ

が真理に近づくための手段であるということ、つまり、表現行為の社会的な機能もよく取り上げられます。これは、研究に携わっている人間には身近な感覚です。真理という大げさに聞こえるかもしれませんが、ここでは、自然科学的な意味での客観的な認識に限らず、知識の有効性や合理性の最善の水準といったところまで広げて解釈しておいてよいと思います。こうした真理、最善のものを認識するために血の滲むような努力をするのが、研究に携わる者の宿命です。

そうした努力を続ける過程においては、私たちが客観的な真理だと信じたものがしばしば暫定的なものであり、乗り越えられる可能性を持ったものだということを覚悟しておく必要があります。表現というのは、自己実現という個人的な行為であると同時に、一つの社会的な行為です。そうである以上、ある表現に対して議論や批判がありうることを当然と考えておかなければなりません。むしろ、こうした議論や批判のプロセスの中に自らを置くということこそ、研究の本質です。

こうした表現の持つ社会的機能の話を進めて言えば、皆さんに認識しておいてもらいたいのは、皆さんの表現はたんに個人の自己実現としての表現に留まらず、「専門家としての表現」になる場合もしばしばあるということです。特定のテーマに関する専門的な研究を踏まえた表現は、たとえそれが大学院学生の研究成果であれ、普通の人びとの表現より重みをもって社会に受け止められることは不思議ではありません。それだけに、皆さんが表現を行うに当たっては、真摯な検証を経た誠実な表現が、自己の人格に対する責任としてと同時に、社会に対する責任としても求められることとなります。

皆さんは、これから、さまざまな形で表現活動を行っていくことと思います。膨大な量の表現を生み出していくことだろうと思います。そうした時に、限られた時間の制約の中で多くの論文を書くことに追われて、つい表現の内容や言葉の使い方がいい加減になったり、あるいは実証をなおざりにしたりしてしまう危険性が、つねにあります。皆さんには、忙しい合間にも時々立ち止まって、「表現をする」という行為の原点、すなわち、個人にとっての重み、そして社会にとっての重みを思い起こしながら、研究に携わってもらいたいと思います。そのように表現するという行為に対する緊張感を持ち続けることによって、皆さんは立派な研究者として、あるいはしっかりとした研究を踏まえた専門家として、成熟していくはずで

最後になりましたが、今日大学院に入学する皆さんのご家族の皆さまにも一言ご挨拶を申し上げておきたいと思

います。これから大学院に入学する皆さんは、すでに学問研究というものに対する基本的な姿勢はしっかり持っているはずで、生活の面でも勉学の面でも、間違いなく一人立ちしてやっていけると期待出来る皆さんたちです。ただ、これは私自身の研究生生活の経験を踏まえて、いつも申し上げてお

話の冒頭で、学生の皆さんに「タフになってほしい」と言いましたが、特定の研究テーマに情熱を注ぎ込むことは、肉体的な負担はもとより、孤独で自分の骨身を削るような緊張を要する作業となることも少なくありません。そのことをご理解

いただき、ご家族の皆さまには、どうか、そうした厳しい学問の世界にいる皆さんに、折に触れ精神的なサポートをして差し上げていただければと願っています。

＜平成二十四（2012）年四月十二日＞



式辞



東京大学大学院学際情報学府長 須藤 修

この度、東京大学大学院へ入学ならびに進学された皆さん、誠におめでとうございます。皆さんのご入学、ご進学を教職員一同、心より歓迎申し上げます。

また、今日まで皆さんを育み、勉学を支えてくれましたご両親、ご家族の皆様をはじめ、多くの関係者の方々におかれまして、本日、このよき日をお迎えになったこと、心からお祝い申し上げます。

皆さんが、これから大いに学び、研究し、学問研究を深く追究し、世界的レベルで大いに活躍されることを祈念しています。

昨年3月11日に発生いたしました東日本大震災から1年と1カ月が経過しました。震災に遭われた方々のご苦労を拝見するたびに、涙を禁じ得ません。同時に東北の若者たちが、多くの困難に立ち向かい、郷土の復興を誓い、自らの将来を語る姿に深く感動いたしました。今年3月11日、私も福島県の会津大学で開催されました復興シンポジウムに参加させていただきましたが、講演のための資料作りの時は涙が止まらず、「これでは講演の時に話せなくなるのではないかと不安になりました。しかし、会津大学の講堂に集まった若者たちの復興に向けた気概、それを肌で感じる事ができ、涙を流さずに話すことができました。彼らならば、どんなに困難が待ち受けようと、きっと復興の中心になってくれるだろうと、頼もしささえ感じることができました。そして微力ながら私もできるかぎり彼らに協力し、復興に尽力してゆこうと心に誓いました。

現在、私は、総務省情報通信審議会情報通信政策部会長を拝命しておりますが、昨年7月に、平成23年度諮問第17号中間答申「知識情報社会の実現に向けた情報通信政策の在り方——東日本復興及び日本再生に向けたICT総合戦略」を取りまとめる作業に参画させて頂き、そこにおいて、以下のような認識を提示させて頂き、これまでとは異なった新たな戦略の方向付けを行いました。

すなわち、中間答申は、「これまでのICT総合戦略は、ICT基盤（インフラ）の構築、ICTを用いて情報化を促進するICT利活用の推進、ICT利活用環境の整備及び研究開発等の推進という政策領域を中心に展開されてきた。このうち、特にICT利活用については、行政、医療、教育などの個別分野ごとの情報化を促進することに力点が置かれてきた。しかしながら、今次震災で顕在化したのは情報の横の連携ができていないということであった。例えば、行政システムの住民データと医療データ等を連携させることができているならば、迅速できめの細かい被災者へのケアも可能であったと考えられる。行政と民間がそれぞれ保有する情報の連携が出来ていれば、より多角的な観点からデータを分析し、被害状況をきめ細かく把握することも可能であった」と反省の弁を述べています。

したがって、これまでの個別分野ごとの「縦軸」の情報化はもちろんですが、行政機関、医療機関、教育機関など社会的にみてきわめて重要なセクターを緊密に結ぶ、情報流通連携基盤の実現という「横軸」の取り組みをICT総合戦略として最重要の課題として位置づけなければなりません。中間答申は、「情報の流通・連携を通じて「人と人との絆」が深まり、耐災害性や効率性の高い社会経済システムが構築されることにより、東日本復興及び日本再生を支え、ひいては、そのプロセスの先にある知識情報社会を実現していくことが期待される」と述べています。

現在、この中間答申を踏まえ、また被災地の方々のご意見も踏まえ、被災地の方々を中心となった復興を前提として、ICTを活用した、まったく新しい街づくりの検討も熱気を帯びて着実に進展しています。今年、大臣に手交される最終答申に向けて多岐にわたる詳細な作業が進められているところです。その最終答申によって、今後のICT政策の基本的枠組みが示されることになるはずですが。

このICT総合戦略は、フューチャー・インターネット（これは、現在のインターネットのセキュリティ水準を大幅に引き上げるとともに、インテリジェンスを有するネットワークを意味します）、さらにクラウドコンピューティング、高速コンピュータを活用したBig Data分析、このような情報科学の最先端の成果を活用しなければなりません。同時にライフサイエンス、環境科学、エネルギー工学、都市工学など理工系の学問の最先端の成果と連動させなければなりません。また、さまざまな社会科学、人文学の優れた知見を最大限活用しなければなりません。情報通信審議会政策部会で検討されている新しい街づくりの構想は、まさに我が国の総合力、学問の水準も問われること

になるのです。

戦略、政策の遂行時には、気をつけなければならないことがたくさんあります。中でもアウトカムの明確な設定、プロセスの透明性確保は当事者が常に意識し、必要に応じて問い返さなければならないことです。

アメリカのオバマ政権は、オープンで効率的な行政運営のために、2009年に連邦情報統括官を設置しました。初代連邦情報統括官として活躍したのが、ヴィヴェク・クンドラ氏です。彼が就任した時の政府IT予算は、年間800億ドル（約6兆4000億円）でした。ちなみに日本政府の場合、人口規模を考慮に入れてもはるかに小さな予算規模です。年間800億ドルのうち240億ドルはインフラ整備に使われていたそうです。ある省では200のデータセンターを抱えていたそうです。彼は「透明性確保」を手がけ、クラウドコンピューティングを採用し、大幅な予算削減を実行しました。さらにクラウドを活用して政府保有データを公開し、イノベーションのエコシステムが形成されました。もちろん、プライバシーに配慮し、データは匿名化されていることは言うまでもありません。

現在では、サンフランシスコ市など多くのローカルガバメントでも行政保有データの民間活用によって新たなサービスが創出され、官民の新たな連携を促進し、地域社会のガバナンスのあり方が大きく変わろうとしています。

私も福田政権、麻生政権、鳩山政権の間、政府IT戦略本部に組織された電子政府評価委員会座長を拝命し、行政組

織革新に取り組んできました。各省庁の情報システムについて必要性、運用コスト、利便性などさまざまな指標をもとに精査し、防衛省、文部科学省などの数十のシステムについて運用停止の意見具申を行い、実際に運用が停止されました。同時にこれからあるべき行政サービスと組織の在り方も検討してまいりました。基本的には、関係書類など提出する必要のない、ワンストップサービスの実現を目指しました。また出生、就職、結婚、引越し、退職、死亡などのライフイベントに必要な手続きをまとめてワンストップでサービスを提供できる官民連携の体制とイノベーション戦略を構想しました。

しかしながら、テクノロジーとしては可能でも組織の分厚い縦割りの壁が立ちふさがっていました。それはいまでも変わりませんが、社会保障と税の一体改革の中で、政府は、私たちがかつて検討した改革案を一部実行すべく取り組まれています。いま行政サービスと組織の縦割りの問題について申し上げましたが、これは行政だけではなく、企業でも大学でも広く見受けられます。もし新たな社会システムを構想しようとするれば、理工系と文系の垣根を越えた、しかもかなりタフな分析と構想・計画、実行を必要とします。もし、震災からの復興・防災において先進的な社会システムを実現しようとするならば、理工系、文系の知見を連携させた高度な検討を必要としているのです。恐らく、その過程で諸学の相互作用も活性化することでしょう。

チューリング賞を受賞した、著名なコンピュータサイエ



ンティストであるジム・グレイの薫陶を受けた研究者たちが、2009年に“The Fourth Paradigm: Data-Intensive Scientific Discovery”をいう書物を刊行しました。彼らによれば、これまでの科学の歴史は、4つのパラダイムに区分できるというのです。第1のパラダイムですが、約1000年前には、科学は経験的なものでした。これが、実験的な科学の萌芽といってよいでしょう。第2のパラダイムは、数百年前に輪郭を整えたもので、理論的なブランチです。ケプラーの法則やマクスウェルの方程式などにみられるように、モデル化や普遍化に焦点が当てられてきました。第3のパラダイムは、数十年前に台頭したコンピュータショナルな科学、すなわち計算科学です。複雑な現象のシミュレーションがその典型的なものです。そして今日、第4のパラダイムとしてe-サイエンスが台頭していると彼らは言うわけです。理論、実験、そしてシミュレーションを統合するものであり、そこでは、科学者は、データマネジメントや統計学を用いてデータベースあるいはファイルを分析することになります。それはデータ・インテンシブな科学とすることができます。だからこそスーパーコンピュータや高速データベースが必要なのだといえるのです。第4のパラダイムの台頭は、従来のそれぞれの学問の方法論に変化をもたらし、学問を区分する境界線にも変動がもたらされるかもしれません。

私の指導する大学院生にこの本を紹介し、読んでもらいました。私のところには文系出身者も理系出身者もいます。彼らの反応は複雑でした。ワクワクする学生もいれば、不

安感を抱いた学生もいました。多くの学生の反応は、不安とワクワク感が同居したものでした。私は彼らに向かって言いました。「いまある研究アプローチが今後も存続可能かどうか分からない。そうであるとすれば、次世代の研究者である諸君は、積極的に打って出るべきではないか。できないと思う人は、自らの専門分野を究め、同時にほかの学問分野の人たちとの連携を重視すべきだ」と私は彼らを励ました。濱田総長のお言葉を借りるならば、「タフな東大生であれ」ということになります。

最後に、ご存じのとおり、我が国は、大震災からの復興と防災、少子高齢化、エネルギー問題、財政難をはじめ、多くの困難を抱え、新たなパラダイムが模索されています。「業詳しくして胆太し」という言葉があります。自ら討究する分野の徹底的な習得によって、そのパラダイムの限界も見えてきます。その限界を突破すべく、新たなフロンティアを切り拓いていただきたいと存じます。周到かつ大胆に学問を究めて頂きたいと思います。皆さんの研究が、さまざまな課題、そこに待ち構える困難に立ち向かい、新たな世界を創造する気魄のこもったものになることを期待しています。それはきっとワクワクするような、そして周りの人々を不安にさせると同時にワクワクさせ、希望の火を灯すようなものになるでしょう。そして将来は日本だけではなく、世界を舞台に大いに活躍されんことを切に願い、私からの式辞とさせていただきます。

<平成二十四（2012）年四月十二日>



祝辞



東京大学 名誉教授 三谷 太一郎

ちょうど17・18年前、私は、現職の法学部長・大学院法学政治学研究科長として他ならぬこの壇上に列した者の一人です。

当時は、学部入学式の他にこのような形での大学院の入学式はなかったのでありまして、それ以後の東京大学における大学院の比重の著しい増大が、こういう盛大な入学式の挙行にも現れていると感じるのであります。

本日から皆さんはそれぞれの専門に分かれて学問の道に進むわけではありますが、その出発に当たって、そもそも学問とは何かという問題について、私の考える所を述べたいと思います。今からちょうど140年前の1872年（明治5年）に当時としては画期的な学問論が刊行されました。現在では誰もが知っている、しかし誰もが読んでいるとは限らない福沢諭吉の『学問のすゝめ』初編であります。これに続いて、全17編が1876年（明治9年）にかけて刊行され、その初編の如きは小学校の教科書にも採用され、総じて当時の日本で広く読まれたことは皆さんもご承知の通りであります。それは学問論であります、同時に学問論の形をとった深い人生論であり、時代を超えて訴えかける普遍的意味をもっています。そこで『学問のすゝめ』を手掛かりとして、学問とは何か、さらに学問は人生にどういう意味があるかを考えてみたいと思います。

まず著者福沢諭吉の念頭にあった「学問」の内容にはいくつかの特色があります。第一は「学問」を「働」、とくに「精神の働」、場合によっては「心身の働」としてとらえていることです。学問とは活動である、精神の活動である、場合によっては精神および身体の活動であるという見方です。その意味は「学問」は決して既成の知識の体系ではない、少なくともそれが「学問」の本質ではない、「学問」の本質は出来上がった知識を単に学ぶことではなく、新しい知識を作り出して行く精神および身体の活動であるということでもあります。それは福沢諭吉が人生の半分を生きた江戸時代の支配的な「学問」観に

対する批判、つまり古代中国の聖人によって作られた知識の体系としての儒教の経典をひたすら学習することが学問の正道であるという「学問」観に対する批判として出てきた「学問」観であります。

このような「学問」観は、言うまでもなく、「学習」と「学問」とを区別します。「学習」は既に知られているもの、既知なるものへの問いから出発し、その答えを求める過程であります。「学習」においては唯一の正しい答えが存在するということが前提されております。これに対して、「学問」は未だ知られていないもの、未知なるものへの問いでありまして、その答えを求める過程が「学問」です。学問においては、唯一の正しい答えが存在するか否かが知られていないのです。

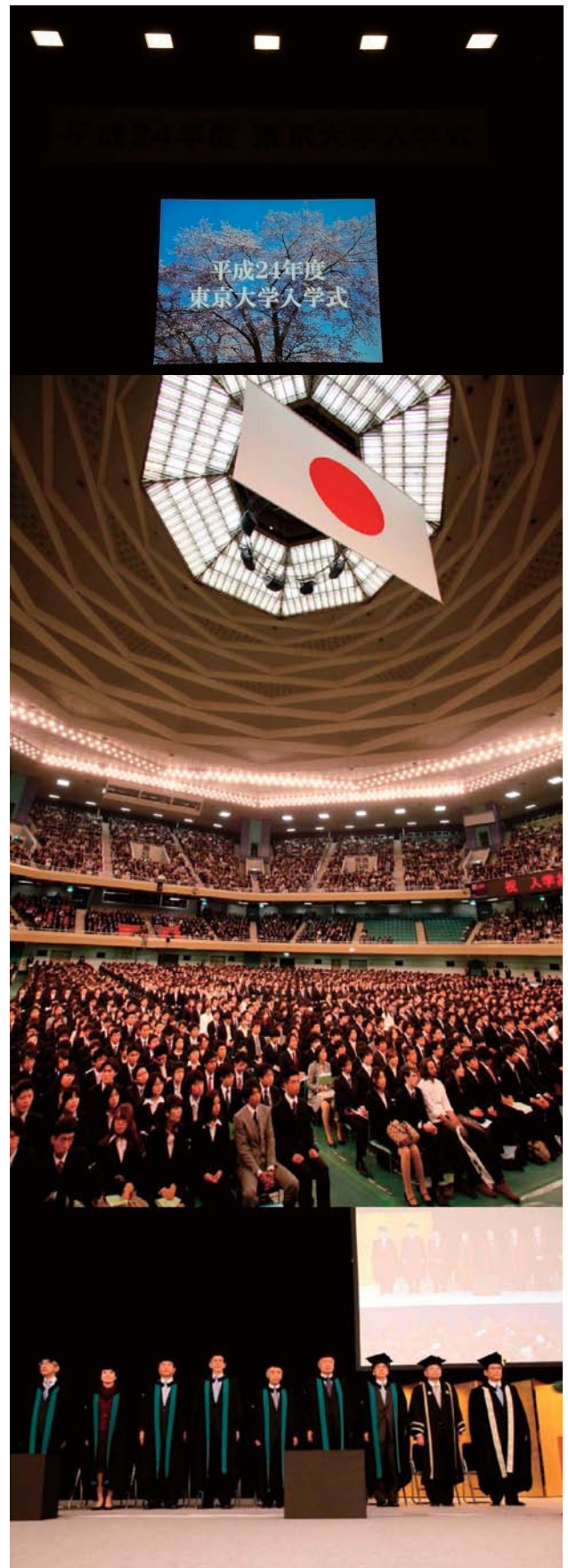
このような未知なるものへの問いとしての学問を進展させ、成果へと導いて行く方法は、どこでどのように習得し、体得して行くのかというのが次の問題であります。要するに学問の実技あるいは学問の実務をいかに習得するかという問題であります。私の考えを端的に言いますと、それは自ら実際に学問活動に携わる以外にはないと思います。つまり学問の実技・実務は学問それ自体を通じてしか習得・体得できないということです。したがってそのためには、どんな形にせよ、まず学問の最前線に直接に参加することが必要であると思います。大学院というのは、なによりも学問を実際に行う、その成果を追求する場所であり、学習の成果を積み立てて学歴を作る場所ではありません。

そのことを私に如実に感じさせたのは、今から40年以上前に読んだ、私自身とは全く専門の異なる、ある生化学者の具体的な研究についての回想録、『二重らせん』という題名の回想録であります。これはとくに理系の専門に進まれる方々の中には既にお読みになった方々が少なくないのではないかと思います。私は今から40年以上前、1960年代末に当時医学系大学院生であった若い研究者に薦められて読みました。これは遺伝の基本物質であるDNAの構造を解明した一人であるJames D. Watson教授が1950年代初頭に20歳代前半で成し遂げたDNAについての画期的な研究成果、要するに、DNAの構造は二重らせんの形をとるという研究成果に到達するまでの過程をふり返った回想録であります。実は、私はこの書物によってDNAということばを初めて知りました。今日の日本でDNAということばがこれほどまでに人口に膾炙することになろうとは、当時は全く予想していませんでした。それはともかく、私はこの書物によって改めて「学問」が福沢諭吉のいう「心身の働」であること、したがって「学問」の第一線における「心身の働」を通じてしか「学

問」は習得できないものであることを実感させられました。逆に20歳代前半の、当時のWatson教授のような無名の（そしてあえていえば教科書の知識も必ずしも十分ではない）若者でさえ、「学問」の第一線に身を投じ、一つの課題にすべての時間とエネルギーを集中すれば、他人はもちろん本人自身も思いも掛けなかったような偉大な成果を挙げることもありうることを納得しました。皆さんによって今後担われるであろう「青春期の学問」のいかに恐るべきかを痛感したわけであります。これが「後生畏るべし」という『論語』に出てくることばの意味であると私は理解しております。

なお序でに申しますと「学問」にはWatson教授の『二重らせん』に表現されているような「青春期の学問」もあれば、逆に、それとは対照的な「老年期の学問」もあります。「老年期の学問」はもちろん皆さんの当面の問題ではなく、私のような「後期高齢者」の問題であります。30年後、40年後に皆さんが必ず当面する問題であります。「学問論」が「人生論」でもあるということの意味はそこにも表われています。このことを今から念頭に置いてほしいと思います。

福沢諭吉が『学問のすゝめ』の中で説いている「学問」の内容のもう一つの特徴は、人間がそれぞれの社会的役割（「人たる者の職分」）を果たすための「術」、アートとして「学問」をとらえている点であります。したがって「学問」は職業的学者の「学問」に限定されません。福沢は「人間普通日用に近き実学」というものの重要性を強調します。そして「学問」は活用されなければならないと主張します。「活用なき学問は無学に等し」と書いています。つまり福沢にとって「学問」の主体は学者だけでなく、それぞれの社会的役割をもっている人民一般なのです。「学問」においてはプロフェッショナルと同等にアマチュアが重要であるというのが福沢の見解なのです。学問におけるプロフェッショナルの質を決定するのもアマチュアの質であります。ともすれば独善的になりやすいプロフェッショナルの偏りを正すのは多分に直感的なアマチュアの批判であります。プロフェッショナルはアマチュアとの不断の対話が必要なのです。この点で、学問と政治は同じであります。学問においてプロフェッショナルの質を高めるために、いかにしてアマチュアの質を高めるか、いかにすれば学問の国民的基盤をいかに強化するかという問題意識は、学問のプロフェッショナルにとって非常に重要だ



と考えます。

こうして福沢は「学問」を各人がそれぞれの社会的役割を果たすための「術」、アートとしてとらえる一方で、高い水準の「術」、アートはそれを支える高い「志」、思想（「心事」）、モラル（「徳義」）がなければならないことを強調しています。つまり高い水準の「学問」とは、「学問」を担う人間の内面と外面とが共に高い水準にあるものを意味するわけであります。そのような内面と外面とが釣り合った高い水準の「学問」を担う人間に「人望」が集まるということを福沢諭吉は述べています。そして「人望」がなければ人間は十分にそれぞれの社会的役割を果たすことはできない、つまりその「学問」は用をなさないということをいうのであります。「学問」の危機がしばしばそれを担う学者の「人望」の危機という形をとって現れることがあるのは、今日の日本の状況に鑑みても明らかであります。

続いて『学問のすゝめ』において提示されている「学問」の方法の特色について述べたいと思います。福沢がとくに強調したのは、「学問」における「談話」・「演説」の重要性です。「学問の道に於て談話演説の大切なるは既に明白にして今日これを実に行ふ者なきは何ぞや」と慨嘆しています。これは、福沢が学問においてもコミュニケーションの手段として「書きことば」だけでなく、「話しことば」が有用であることを認識していたからであります。

「談話」や「演説」は「話しことば」を学問の用具として洗練する機会でもあったわけです。また福沢には「学問」の発展は同等同位の他人との間の「人間交際」の発展に伴うべきものであるという確信があったからであり、それが「談話」や「演説」の学問的重要性に着目させたということができるのではないかと思います。「学問」においては先生はもちろん重要であります、それに劣らず友人が重要であります。江戸時代の最盛期を代表する学者である荻生徂徠は、当時、大名諸侯が立派な学者を先生としているにもかかわらず、学問が進歩しないのは友人に乏しいからだということを書いています。これは徂徠が福沢と同じく学問の活動の母胎が「人間交際」であることとらえる学問観を持っていたことを意味するのであり、それから出てきた洞察が見られるわけであります。

以上福沢諭吉の『学問のすゝめ』における学問観を手掛かりとして、「学問」とは何かについてお話をしました。最後に学問は個人個人の人生にどのように関わるのかという問題について、私の考えを述べ、結びといたします。いう

までもなく、個人個人の人生はどれ一つとして同じものはありません。それぞれが独自の価値を持つ、かけがえのないものであります。人間の尊厳はそのような個人個人の人生の絶対的価値に根ざしています。それが「人権（ヒューマン・ライツ）」という観念の実体を成していると思います。「学問」は、そのような絶対的価値を持つ個人個人の人生を内面的に結びつける媒介の役割を果たすべきものと考えます。個人個人の人生の絶対的価値を損なうことなく、それら相互の内面的交流を媒介することによって、つまり福沢のいう「人間交際」を促進することによって、「学問」は「人類」という観念を現実近づけることができるのではないかと思います。よく知られていますように、福沢諭吉が「学問」の目的としたのは、明治初年当時の日本国民一人一人の「独立」（福沢のいう「一身独立」）であり、とくにその精神的独立でありました。そしてそれが当時の日本の課題であった「一国独立」の前提条件であると考えました。「学問」によって根拠づけられた「一身独立」を、明治初年の日本の課題であった「一国独立」を超えて、今やそれ自体運命共同体と化しつつある人類の連帯にまでもたらすのが『学問のすゝめ』から140年後の今日の「学問」の使命であると考えます。

以上、蕪辞を連ねましたが、これをもって祝辞にかえさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

<平成二十四（2012）年四月十二日>





(特集写真撮影 : 尾関裕士)

特集

平成23年度第2回「東京大学総長賞」授与式の挙行及び「総長大賞」受賞者決定

平成23年度第2回学生表彰「東京大学総長賞」授与式は、3月22日（木）17:00より小柴ホール（本郷キャンパス）にて実施されました。第2回（春）は学業のみを対象として募集を行い、合計26件の推薦をいただき、学生表彰選考会議の厳正なる審議の結果、10名の方々が総長賞受賞者として選出されました。授与式では、選考結果報告のほか、総長から表彰状と記念品の贈呈後、各受賞者から今回の受賞内容に関する映像を交えたプレゼンテーションが行われました。



総長大賞を受賞した富安さん（左）、石井さん（右）の写真



本年度総長賞受賞者全員との写真

また、本年度で実施6回目となった「総長大賞」受賞者の選考がプレゼンテーション終了後別室にて行われた結果、本年度総長賞受賞者14件の中から、第1回（秋）受賞者の富安亮輔さん、第2回（春）受賞者の石井健一さんに「総長大賞」が授与されました。

授与式には受賞者関係者のほか、学部卒業生及び総代・大学院修士代表も多数参加し、祝福の場に華を添えました。

総長大賞 受賞者紹介



富安 亮輔
(工学系研究科博士課程)

富安氏は研究者としての立場から東日本大震災の被災地を支援するために、今年4月に本学高齢社会総合研究機構による「コミュニティケア型仮設住宅」の提案づくりの中心的メンバーを務めた。さらに、設計事務所に勤務していた経験をいかし、提案を受けていただいた釜石市と遠野市の仮設住宅の基本設計を監修し、遠野市に常駐して現場監理にも携わった。仮設住宅の竣工前には関連する自治体や行政との調整役を担い、被災者の受け入れ体制を築いた。これらの活動が認められ、7月から遠野市の都市計画課非常勤職員「住まいのコーディネーター」として委嘱され現地にとどまり、被災者の入居後もコミュニティ形成の支援活動を継続している。こうした富安氏の一連の支援活動は、本学における研究成果を直接的な社会貢献に結び付けた取り組みであり、本学の名誉を高めたとして評価された。



石井 健一
(薬学系研究科博士課程修了)

無脊椎動物では、抗体を介さない自然免疫による病原体排除が行われ、その分子機構には哺乳類と多くの共通点がある。石井氏はカイコをモデル生物として、解析例がほとんど無かった昆虫モイトカイン（情報伝達物質）を中心とする新規自然免疫経路を明らかにした。さらに、カイコ歯周病菌感染モデルを構築し、無脊椎動物が自然免疫の過剰活性化により障害を受ける現象を初めて捉えた。哺乳類より安価で倫理的規制が小さいというカイコの利点を活かし、動物個体を大量に用いて免疫賦活剤及び過剰免疫抑制剤を探索することにより、新しい創薬シーズの発見が期待される。第二回日本学術振興会育志賞を受賞するなどその研究内容の独創性が高く評価された。

総長賞 受賞者紹介



小林 弘明 (工学部卒業)

医・農薬や様々な化成品の合成原料として有用な第一級アミドは、これまでは有害な試薬を用いて、多量の廃棄物が副生するプロセスで合成されてきたため、環境的・経済的な観点から、新しいクリーンな合成プロセスの開発が切望されている。小林氏は、トンネル型構造を有するマンガン酸化物を触媒として用い、第一級アルコール、アンモニア水、空気(酸素)から様々な第一級アミドが合成できることを世界で初めて明らかにした。本反応では、入手容易で安価な原料を用いることができる。さらに触媒は活性を低下させることなく何度も再使用することができ、かつ副生成物も水のみである。今後実用プロセスへの応用展開も期待されるこれらの研究成果が高く評価された。

赤穂 吏映 (医学部卒業)

生体脳内における単一神経細胞レベルの形態的・機能的解析は脳神経科学及び臨床脳医学における重要課題である。この重要課題を抜本的に推進するために、赤穂氏は大脳皮質や海馬などの主要脳組織で使用可能な単一神経細胞レベルでの多重遺伝子発現法の開発に成功した(医学系研究科疾患生命工学センターとの共同研究)。本研究成果は同氏を筆頭著者とする英文論文として上梓され、国際英文雑誌の表紙を飾った。国内外より問い合わせが相次ぎ、現在 本法を用いた国際共同研究が推進されている。上記の点が高く評価され平成23年度の医学部長賞も授与されている。本研究成果は、脳神経疾患モデル動物を用いた病態解明など幅広い応用が期待される。



森田 陽介 (理学部卒業)

森田氏は代数・幾何・解析の全てにわたって知識を吸収しようと幅広く数学科の授業を履修した。4年生セミナーでは、主束と接続、パラメトリクスによる熱核の構成、ラプラシアンの特値とといったテキストの内容に加え、関連する話題としてシュワルツ超関数と核定理、クリフォード代数の周期性など、様々な分野の基礎を学んだ。同氏は本質的なアイデアを明確に説明するセミナーを目指し、毎回よりよい定式化・説明のため別書籍や論文を参照し、自分で証明を改良しようと努めた。優秀な成績とこれらの熱心な修学姿勢が高く評価された。

総長賞 受賞者紹介

武井 祥平 (学際情報学府修士課程修了)

武井氏は、技術・学術・芸術の各領域から4つの賞を受賞するなど、学際的な活躍をしてきた。東京大学制作展において担当した展示空間のデザインは、日本サインデザイン協会から表彰され、「年鑑日本の空間デザイン2012」に掲載された。技術面では、伸縮性に優れたリール式アクチュエータを考案し、東京大学学生発明コンテストで表彰された。同氏はこのアクチュエータの実装・評価を重ね、これまでにない空間のダイナミクスを生み出す仕組みとして学会発表し、電子情報通信学会から表彰された。この他にも照明デザインでの受賞があるなど、新たな技術の創出と優れたデザインの両立を学際的に探究してきた実績が高く評価された。



濱田 武志 (人文社会系研究科修士課程修了)

言語・方言の多様な中国大陸の中でも、湖南・広東・広西の三省境界地域は言語状況の最も複雑な地域の一つであるが、先行研究は今も十分でない。当該地域の言語史解明のため、濱田氏は粵語(漢語十大方言の一つ)の一種「梧州話」について湖南省江華瑶族自治县で言語調査を行い、単身で未報告の重要方言を発見した。同氏は得られた大量のデータに基づき、既存の方言分類が方言間の系統関係を反映していない事を示した他、梧州話が粵語の中で必ずしも周辺的存在でないにもかかわらず、漢語には稀な特徴を周辺非漢語と共有している事を証明した。一連の研究は方言研究に言語接触という視点を導入し、進展の可能性を開くものとして高く評価された。



東嶋 健太 (農学生命科学研究科修士課程修了)

行政文書などの重要な紙資料や古文書などの紙文化財が津波や洪水等で被災すると、その情報や価値がカビの繁殖によって喪失してしまう。東嶋氏は、その事態を未然に防ぐため水害被災した紙を塩水に漬けて緊急保存するという簡便な新技術を確認し、文化財保存分野に大きな貢献を果たした。東日本大震災で津波を被った紙文化財の処置法に関して、文化庁が進めた文化財レスキュー事業の研究会で依頼講演を行い、NHKニュースで報道された。同氏は修士課程の学生として極めて優秀な研究業績を収め、その独創的な研究が高く評価された。東日本大震災の津波やタイの洪水のような水害発生の際、この塩水保存法が被災地で大いに役立つことが期待される。



総長賞 受賞者紹介

権業 善範（数理科学研究科博士課程修了）

権業氏の専門は高次元代数多様体論で、高校生の時に習う二次関数、三次関数のグラフなどの高次元化である。高次元になるとこれらはとても複雑になり、まだ多くの未解決な問題が残っている。特に同氏の研究の最大の目標は、「極小モデルの存在」と「アバンダンス」とよばれる構造定理である。3次元までは肯定的に証明されているが、一般的には未解決である。同氏は、代数多様体に対する極小モデル理論、特にアバンダンス予想に対して、重要なステップである半対数的アバンダンス予想に対する決定的な結果を共同研究の中で得た。また、ファノ多様体についての研究も行うなど、未解決分野への挑戦、研究の発展へ尽力する姿勢が高く評価された。



玉城 絵美（学際情報学府博士課程修了）

情報技術により人間の能力を補助し強化する“augmented human”が新しい研究領域として注目されている。玉城氏は、その中で手指の動きの精密な制御に着目した。指の腱は上腕の複数の筋肉により駆動されているが、上腕部に多数の電極を装着し、強度を変えながら電気刺激を与えることで、それぞれの指を独立して駆動可能なことを解明した。この原理に基づき、Possessed Handと呼ぶコンピュータによる手指の制御装置を開発した。この装置は音楽練習などの各種の技能の習得支援やリハビリテーション支援などへの応用が期待できる。これらの研究成果はACM SIGCHI 2011やIEEE Computerなどのトップカンファレンス/ジャーナルで発表されたほか、ABC News、New Scientist、MIT Technology Review、Popular Scienceなどの国際的メディアでも多く取り上げられた。さらに米国TIME誌による、その年における世界の重要な発明を取り上げる“The 50 Best Inventions of 2011”に選出された。



岡田 随象（医学系研究科博士課程修了）

ゲノムワイド関連解析とは、遺伝情報の個人差と形質との因果関係をヒトゲノムの全領域にわたって網羅的に解析する遺伝統計解析の一手法である。岡田氏は、日本人集団数万人を対象にゲノムワイド関連解析を実施し、様々な疾患（関節リウマチ・大腸癌）へのかかりやすさや血液学的・生化学的検査値（貧血指標・肝機能・腎機能・脂質マーカー）、身体計測値（身長・肥満）の個人差に関連する新規遺伝子を75個同定することに成功した。これらの成果は高い評価を受け、国際学術誌に多数の著者論文として発表されている。また、国際コンソーシアムや海外研究施設との共同研究プロジェクトを研究責任者として積極的に推進した点も高く評価された。



本件問合せ先:本部学生支援課 土井(内線:22524)

東京大学の英文呼称

The University of Tokyo か *University of Tokyo* か、
はたまた *Tokyo University* か、それが問題だ。

グローバル時代が叫ばれて久しいですが、大学の国際競争も年々激しくなっています。東京大学の研究・教育の水準は世界のリーディング大学に引けを取るものではありませんが、世界の有力大学や、アジア等で力をつけてきている大学と競い合っていかなければいけない時代に突入したことは、皆さんもそれぞれの立場で感じていることではないでしょうか。

今回の特集では、東京大学の英語呼称について考えてみます。たかが名前、されど名前・・・国内ほどの認知がされていない海外で東京大学をどうやって呼ぶか、これは意外と重要な問題です。

Q. 東京大学の英語の名称ってどれが正式？

A. 「THE UNIVERSITY OF TOKYO」が東京大学の公式の英文呼称として認められています。

- | | |
|--------------------------|---|
| ①The University of Tokyo | ◎ |
| ②University of Tokyo | △ |
| ③Tokyo University | × |

英文呼称をめぐる歴史的経緯

過去に遡ること、南原繁総長の時代の昭和23年2月17日の評議会議事要旨には、「本学の名を公式には“University of TOKYO”とする旨記載されています。これは、東京帝国大学から東京大学に変更された際に、英語呼称について“Tokyo Imperial University”から“Tokyo University”とするか“(The)University of Tokyo”とするかについての議論があったため、このような記録が残されたものと思われま。ただし、その後、慣行的に定冠詞「The」をつけた“*The University of Tokyo*”が、大学から公式に出されていた英文カタログ等において使われていました。

定冠詞をつけるかつかないか、といった問題意識から、平成2年(有馬朗人総長)に再度この問題が評議会にて議論されています。その結果として、「国際交流委員会では、本学における慣行及び来歴並びに英語の語法上の規則等に関して調査を行った結果、慣行上の英文呼称である“*The University of Tokyo*”を、今後も継続して使用することに不都合はないとの結論に達した」との記載が平成2年2月20日評議会議事要旨に残っています。

平成16年の法人化を機に、新たな東京大学を象徴するマークが作られましたが、そこにも“THE UNIVERSITY OF TOKYO”と記されています。

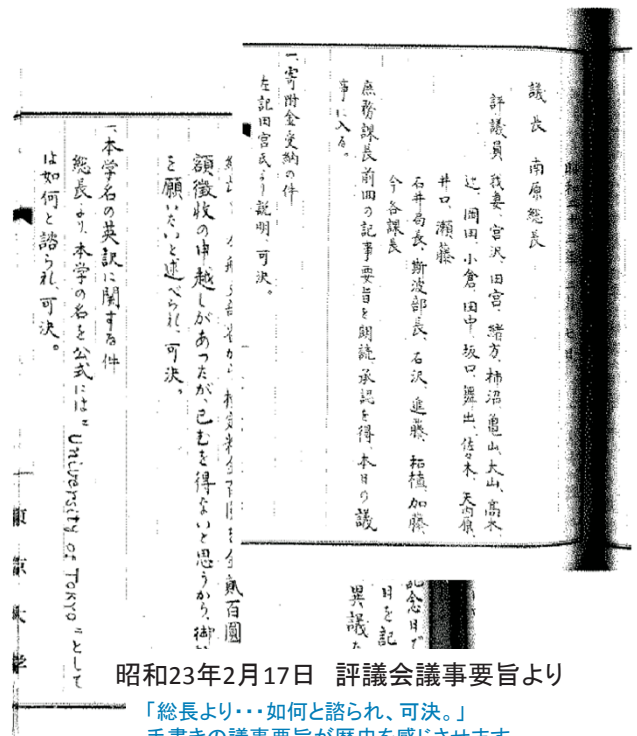
海外での認知度を高めるために

日本の中では「東京大学」は誰でも知っていますが、海外では必ずしもそうではありません。ですから、海外での東大の認知度を高めるためには、名前を統一してそれを使い続けることが重要です。しかし、実際には本学の教職員自身が、*University of Tokyo*と言ったり、*Tokyo University*と言ったりというケースが散見されます。最近では国際的な大学間競争が激化し、各大学の論文引用数がよく話題になりますが、検索サービスによっては、*The University of Tokyo*と*Tokyo University*が別の大学として数えられてしまうために、引用数が少なくなって不利になるという可能性も否定できません。

そこで、平成24年3月8日開催の役員懇談会で、「THE UNIVERSITY OF TOKYO」が東京大学の公式の英文呼称であり、論文投稿などの際にもこの名称を使う方針について改めて確認が取られました。



大学マークと合わせて
「THE UNIVERSITY OF TOKYO」の名前を世界へ広めよう！



昭和23年2月17日 評議会議事要旨より

「総長より・・・如何と諮られ、可決。」
手書きの議事要旨が歴史を感じさせます。

Q. では、英文略称はどうなっているの？

A. 一応「Todai (TODAI)」、でも…

「UT」「Todai」「U-Tokyo」…様々な英文略称が使われているのが実態です。公式な英文略称がないためかと思いきや、実は、英文略称として「Todai (TODAI)」を基本とすることが平成19年8月の役員懇談会で決定されています。

それまで、「UT」が主に使用されていましたが、国際的に見た場合、世界にはUniversity of TorontoやUniversity of Tennessee、University of Texas at Austinなどの大学が略称UTを使用していて、紛らわしいという問題がありました。英語圏の方などの意見も参考にした結果、国内で広く通用している「東大」を、そのユニークさを武器に国際的にも浸透させることをプラスにとらえて、「Todai」を略称の基本とすることが了承されました。それを機に、「UT Forum」を「Todai Forum」と名称変更したり、「TODAI TV」「Todai Research」「TODAI for Tomorrow」といった「Todai」を冠にした新しいプログラムなどができてきました。

一方で、平成19年の時点では、基本路線の了承にとどまり、全学的に徹底することには至りませんでした。平成16年にオープンしたコミュニケーションセンターではUTマークを使用し続けることにしており、「UTの使用をただちに止めるわけではなく、当面併用で、可能で適切なものからTodaiに変えていく」という方針が取られたため、現在に至っても統一されることなく、様々な略称が併用されている状況にあります。

「Todai」のユニークさに自信を持って推進するのを良しとする考えがある一方で、「Todai」では研究論文等の検索において問題があるといった指摘もあります。この問題については、もう少し議論が必要です。

《「TODAI」、「UT」が混在した状況》



コミュニケーションセンターのマークはUTをモチーフにしたものです。 →



「灯台もと暗し」とはまさにこのこと。この「学内広報」のタイトルも、ずっと「UT」を使っていました。先月号から「today」の表記に変更しました。



The depth and breadth of research at the University of Tokyo



The University of Tokyo and Todai

The University of Tokyo is commonly known as Todai in Japan. In Japanese, compound words are often abbreviated by using just the first character of each component. In Japanese we are called Tokyo Daigaku (東京大学), which means “Tokyo University.” Abbreviating the two words leaves Todai (東大), which is how most people refer to us in Japan.

☆東京大学英文リーフレット (Mini Brochure) より



◎この度、「東京大学の表象に関する懇談会」を設置し、英文略称やマークに関する課題について、改めて検討することにしました。大学の国際競争が激しくなる中で、東京大学のアイデンティティを明確にし、グローバルなブランド戦略を推進することの重要性が高まっています。「英文略称」やマーク等に関して、是非ご意見をお寄せ下さい。

「東京大学の表象に関する懇談会」窓口 (本部広報課)
kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

東京大学の表象に関する懇談会

H24.4.1

所属・職名	氏名	備考
法学政治学研究所・教授	山下 友信	座長
医学系研究所・教授	宮園 浩平	
生産技術研究所・教授	野城 智也	
史料編纂所・教授	榎原 雅治	
理事	江川 雅子	オブザーバー
総合文化研究所・教授	真船 文隆	オブザーバー

NEWS

一般ニュース

部局長の交代

平成 24 年 4 月 1 日付で、下記のとおり部局長の交代がありました。新部局長をご紹介しますとともに、退任された部局長のご挨拶を掲載します。

	新部局長	前部局長
大学院法学政治学研究科長・法学部長	山口 厚	山下友信
大学院工学系研究科長・工学部長	原田 昇	北森武彦
大学院理学系研究科長・理学部長	相原博昭	山形俊男
大学院薬学系研究科長・薬学部長	堅田利明	長野哲雄
大学院数理科学研究科長	坪井 俊	大島利雄
大学院情報理工学系研究科長	萩谷昌己	(再任)
大学院情報学環長・学際情報学府長	須藤 修	石田英敬
大学院公共政策学連携研究部長・教育部長	伊藤隆敏	田辺国昭
東洋文化研究所長	大木 康	羽田 正
社会科学研究所長	石田 浩	末廣 昭
生産技術研究所長	中埜良昭	野城智也
宇宙線研究所長	梶田隆章	(再任)

新部局長紹介

大学院法学政治学研究科長・法学部長

山口 厚 教授

(任期：平成 24 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日)



昭和51年 3月

本学法学部卒業

昭和51年 4月

本学法学部助手

昭和54年 7月

本学法学部助教授

平成 4 年 8月

本学大学院法学政治学研究科教授

所属：法学政治学研究科 法曹養成専攻

専門分野：刑法

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) 山口厚『刑法総論 [第2版]』有斐閣, 2007年.
- 2) 山口厚『刑法各論 [第2版]』有斐閣, 2011年.
- 3) 山口厚『刑法 [第2版]』有斐閣, 2011年.

大学院工学系研究科長・工学部長

原田 昇 教授

(任期：平成 24 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日)



昭和52年 3月

名古屋大学工学部卒業

昭和54年 3月

本学大学院工学系研究科

都市工学専攻修士課程修了

昭和58年 3月

本学大学院工学系研究科

都市工学専攻博士課程修了

平成11年 1月 本学大学院新領域創成科学研究科教授

平成17年 4月 本学大学院工学系研究科教授

所属：工学系研究科 都市工学専攻

専門分野：都市交通計画

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) 新谷洋二編著『都市交通計画 (第二版)』技報堂, 2003.4 (原田昇「第6章 都市交通の予測と計画」: 81-110)
- 2) 交通工学研究会・交通まちづくり研究会 (代表：原田昇) 編著『交通まちづくり：世界の都市と日本の都市に学ぶ』交通工学研究, 2006.05, 240頁.
- 3) T. Kidokoro, N. Harata (eds.), Sustainable City Regions: Space, Place and Governance (cSUR-UT: Library for SUR 7), Springer, 2008. 03, pp.334.

大学院理学系研究科長・理学部長

相原 博昭 教授

(任期：平成24年4月1日～平成26年3月31日)



昭和53年3月

本学理学部物理学科卒業

昭和55年3月

本学大学院理学系研究科
物理学専攻修士課程修了

昭和59年3月

本学大学院理学系研究科
物理学専攻博士課程修了

平成7年10月 本学大学院理学系研究科助教授

平成15年4月 本学大学院理学系研究科教授

所属：理学系研究科 物理学専攻

専門分野：高エネルギー素粒子物理学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) 相原博昭『素粒子の物理』東京大学出版会, 2006年.
- 2) 相原博昭 他(共著)『素粒子物理学ハンドブック』朝倉書店, 2010年.
- 3) K. Abe, N. Abgrall, Y. Ajima, H. Aihara et al. [T2K Collaboration]. "Indication of Electron Neutrino Appearance from an Accelerator-produced Off-axis Muon Neutrino Beam." *Physical Review Letters*, 107 (2011): 041801.

大学院薬学系研究科長・薬学部長

堅田 利明 教授

(任期：平成24年4月1日～平成26年3月31日)



昭和49年3月

北海道大学薬学部卒業

昭和49年4月

北海道大学薬学部教務職員

昭和54年9月

薬学博士(北海道大学)

昭和59年9月

北海道大学薬学部助手

昭和62年6月

東京工業大学理学部助教授

平成元年10月 東京工業大学理学部教授

平成2年6月 東京工業大学生命理工学部教授(配置換)

平成5年7月 本学薬学部教授(配置換)

平成9年4月 本学大学院薬学系研究科教授(配置換)

所属：薬学系研究科 薬科学専攻

専門分野：生理化学、生物化学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) Nakae I, Fujino T, Kobayashi T, Sasaki A, Kikko Y, Fukuyama M, Gengyo-Ando K, Mitani S, Kontani K, Katada T. "The Arf-like GTPase Arl8 mediates delivery of endocytosed macromolecules to lysosomes in *Caenorhabditis elegans*." *Mol. Biol. Cell* 21 (2010):

2434-2442.

2) Hoshino S, Imai M, Kobayashi T, Uchida N, Katada T. "The eukaryotic polypeptide chain releasing factor (eRF3/GSPT) carrying the translation termination signal to the 3'-poly (A) tail of mRNA: Direct association of eRF3/GSPT with polyadenylate-binding protein." *J. Biol. Chem.* 274 (1999): 16677-16680.

3) Katada T, Ui M. "Direct modification of the membrane adenylate cyclase system by islet-activating protein due to ADP-ribosylation of a membrane protein." *Proc. Natl. Acad. Sci. U.S.A.* 79 (1982): 3129-3133.

大学院数理科学研究科長

坪井 俊 教授

(任期：平成24年4月1日～平成26年3月31日)



昭和51年3月

本学理学部卒業

昭和53年3月

本学大学院理学系研究科

数学専門課程修士課程修了

昭和53年4月

本学理学部助手

昭和60年4月

本学教養学部助教授

昭和62年10月 本学理学部助教授

平成4年4月 本学大学院数理科学研究科助教授

平成5年10月 本学大学院数理科学研究科教授

所属：数理科学研究科 数理科学専攻

専門分野：位相幾何学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) Takashi Tsuboi. "On the foliated products of class C^1 ." *Annals of Mathematics*, 130 (1989): 227-271.
- 2) Takashi Tsuboi. "On the group of real analytic diffeomorphisms." *Annales Scientifiques de l'École Normale Supérieure*, 49 (2009): 601-651.
- 3) Takashi Tsuboi. "On the uniform perfectness of the groups of diffeomorphisms of even-dimensional manifolds." *Commentarii Mathematici Helvetici*, 87 (2012): 141-185.

大学院情報理工学系研究科長

萩谷 昌己 教授(再任)

(任期：平成24年4月1日～平成25年3月31日)

大学院情報学環長・学際情報学府長

須藤 修 教授

(任期：平成24年4月1日～平成27年3月31日)



昭和55年3月
静岡大学人文学部卒業
昭和60年3月
本学大学院経済学研究科
博士課程単位取得退学
平成元年3月
経済学博士（東京大学）
平成3年4月
本学新聞研究所助教授

平成4年5月 本学社会情報研究所助教授
平成7年5月 ストックホルム経済大学客員教授(併任)
平成7年8月
筑波大学先端学際領域研究センター客員研究員(併任)
平成8年4月 本学総長補佐
平成9年6月 参議院商工委員会客員調査員(併任)
平成11年4月 本学社会情報研究所教授
平成12年4月 本学大学院情報学環・学際情報学府教授
平成22年3月 国立情報学研究所客員教授(併任)

所属：大学院情報学環 社会情報学圏

専門分野：情報経済論、社会情報学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 1) 須藤修『複合的ネットワーク社会—情報テクノロジーと社会進化』有斐閣, 1995年.
- 2) Osamu Sudoh ed., Digital Economy and Social Design, Springer-Verlag, 2005.
- 3) Osamu Sudoh and Yumiko Kinoshita, Transformative and Innovative e-Government for the Next Generation, Marijn Janssen et al. eds., E-Government, E-Services and Global Processes, Springer-Verlag, 2010, 111-124.

大学院公共政策学連携研究部長・教育部長

伊藤 隆敏 教授

(任期：平成24年4月1日～平成26年3月31日)



昭和48年3月
一橋大学経済学部卒業
昭和50年3月
一橋大学大学院経済学研究科
修士課程終了(経済学修士)
昭和54年6月
ハーバード大学大学院経済学
博士課程修了 Ph.D. 取得

昭和54年9月 ミネソタ大学経済学部助教授
昭和61年7月 ミネソタ大学経済学部准教授
昭和63年9月 一橋大学経済研究所助教授
平成3年4月 一橋大学経済研究所教授

平成4年9月

ハーバード大学ケネディー行政大学院客員教授

平成6年8月 国際通貨基金(IMF) 調査局上級審議役

平成11年7月 大蔵省副財務官

平成13年7月 一橋大学経済研究所教授

平成14年4月 本学先端科学技術研究センター教授

平成16年4月

本学大学院経済学研究科教授兼公共政策大学院教授

所属：大学院公共政策学連携研究部・教育部

専門分野：マクロ経済学、金融政策、国際金融

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 1) 伊藤隆敏『不均衡の経済分析—理論と実証—』東洋経済新報社, 1985年.
- 2) Takatoshi Ito 『The Japanese Economy』 MIT Press, 1992年.
- 3) 伊藤隆敏(共著)『インフレ目標と金融政策』東洋経済新報社, 2006年.

東洋文化研究所長

大木 康 教授

(任期：平成24年4月1日～平成27年3月31日)



昭和56年3月

本学文学部卒業

昭和58年3月

本学大学院人文科学研究科
修士課程修了

昭和61年4月

本学東洋文化研究所助手

平成元年4月

広島大学文学部助教授

平成3年4月

本学文学部助教授

平成10年9月 文学博士(東京大学)

平成15年8月 本学東洋文化研究所教授

所属：東洋文化研究所 東アジア第二部門文学分野

専門分野：中国文学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

- 1) 大木康『冒襄と『影梅庵憶語』の研究』汲古書院, 2010年.
- 2) 大木康『馮夢龍『山歌』の研究：中国明代の通俗歌謡』勁草書房, 2003年.
- 3) 大木康『中国遊里空間：明清秦淮妓女の世界』青土社, 2001年.

社会科学研究所長

石田 浩 教授

(任期：平成 24 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日)



昭和54年 3 月

上智大学文学部卒業

昭和61年 11 月

ハーバード大学大学院社会学博士課程修了

平成 3 年 1 月

コロンビア大学社会学部準教授

平成11年 4 月

本学社会科学研究所教授

所属：社会科学研究所 比較現代社会部門

専門分野：比較社会階層論

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) Hiroshi Ishida. Social Mobility in Contemporary Japan. Stanford University Press, 1993.
- 2) Hiroshi Ishida and David Slater (eds.) Social Class in Contemporary Japan. Routledge, 2010.
- 3) 石田浩・近藤博之・中尾啓子（共編）『現代の階層社会 2 階層と移動の構造』東京大学出版会, 2011 年.

生産技術研究所長

中埜 良昭 教授

(任期：平成 24 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日)



昭和59年 3 月

本学工学部建築学科卒業

昭和61年 3 月

本学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了

平成元年 3 月

本学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了

平成17年 8 月

本学生産技術研究所教授

所属：生産技術研究所 基礎系部門

専門分野：耐震工学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) 中埜良昭（分担執筆／岡田恒男・土岐憲三編）『地震防災のはなし 都市直下地震に備える』朝倉書店, 2006 年.
- 2) Tatsuya ASAI, Yoshiaki NAKANO, Tomokazu TATENNO, Hiroshi FUKUYAMA, Koji, FUJIMA, Yuji HAGA, Tadashi SUGANO and Tsuneo OKADA “TSUNAMI LOAD EVALUATION BASED ON DAMAGE OBSERVATION AFTER THE 2011 GREAT EAST JAPAN EARTHQUAKE,” Proc. of the International Symposium on Engineering Lessons Learned from the 2011 Great East Japan Earthquake, (2012): 516-527.
- 3) 中埜良昭, 真田靖士『ニュージーランド・クライストチャーチ地震による建物被害』日本地震工学会誌／Bulletin of JAEE, No. 14 (2011): 63-66.

宇宙線研究所長

梶田 隆章 教授（再任）

(任期：平成 24 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日)

部局長退任の挨拶

退任のご挨拶

前大学院法学政治学研究科長・法学部長
山下 友信

2年の任期を満了し退任することになりました。この間には、東日本大震災の発生という大きな出来事があり、無我夢中でその後の対応を図っていききましたが、研究科・学部という組織においても危機管理のあり方という点では、いろいろと考えさせられたところです。研究科・学部内部では、研究者養成を目的とする総合法政専攻、法科大学院、法学部という3つの柱のいずれにおいても、国際化にどのように取り組むかが問われ続けた2年間でした。研究科・学部の歴史の中で築かれてきた法学・政治学の教育研究の伝統と国際化の要請とをどのようにマッチさせるかは、永遠の課題なのでしょうが、次期研究科長の下で、さらに検討が続いて行くことになるでしょう。

施設面では、正門近くの法学部3号館（法学部研究室）等の改修・増築工事が私の任期満了と同時に完了し、法学部図書室や法科大学院生自習室なども格段に改善されることになります。実現にこぎ着けることができたのは、様々な面での全学の皆様のご協力によるもので、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

感謝の二年間

前大学院工学系研究科長・工学部長
北森 武彦

セルカン事件に始まり震災を経た2年間は激務でした。寝床で寝たのは週に12時間足らずだった最終報告の取りまとめや、寸断された道路と燃料供給難の中、被災地東海村にある教育研究用原子炉弥生への非常電源用燃料と同研究棟での避難生活者約100名に食料飲料水の補給を続けた数週間、新学期の授業開始を五月とした苦渋の決断、さらに24時間体制で外部への対応と状況把握に努めたひと月あまりの日々、いずれもつい先日のような気がします。こうした困難の中、工学教育のマニフェストと評された教科書であり指導要領でもある「工学教程」の編纂開始とMITなど世界のトップ工学校6校の工学系Deanを招いたDeans Forumの開催など、将来を見据えた教育と国際戦略の重要プロジェクトを走らせることができました。困難を何とか乗り越え新しい施策を実現できたのは、ひとえに工学系研究科の教職員に学生諸君、そして関連部局に本部と学外の多くの方々のご理解とご尽力があればこそと、この二年間、常に感謝の

気持ちでおりました。万感の思いとともに任期を終えるにあたり、工学系研究科の皆さん一人一人を誇りに思い、改めて敬意を表させていただきます。ありがとうございました。

部局長を退任して

前大学院理学系研究科長・理学部長
山形 俊男

遅い春を待ち焦がれていたかのように咲き誇る桜花を眺めながら、部局長として3年の任期を満了し、併せて定年を迎えることができたことに安堵しています。世の常とはいえ、この間にも多くのことがありました。最たるものは東日本大震災とその後の対応です。千年に一度といわれる大地震と津波、そして福島第一原子力発電所の崩壊に伴って発生した放射性核種拡散という惨烈な事態に直面し、私たちは科学・技術と社会の連携の重要性を改めて認識させられることになりました。この未曾有の難局にあっても、理性を失うことなく、学生、教員、職員が協力して適切に対応し、また多くの教員が調査やアウトリーチ活動に積極的に動いてくださったのはとても有り難いことでした。

研究科内だけを見ても、小石川植物園の温室改築、理学部一号館三期工事、老朽化が進む理学部二号館問題などに加えて、理学研究と企業活動との適切な関係構築、新たなフロンティアを開拓する部局内連携と教育プログラムの導入、変動する社会にあって揺れる学生の心のケアなど、取り組む問題がたくさんあります。しかし、いつの世にも困難な問題はあり、拙速に解決を目指すのではなく、むしろ丁寧に理解し合い、協働する過程を積み重ねてゆくことが大切なのだと思います。これを実践されている、すばらしい部局長の方々、執行部の方々と親しくお付き合いいただく機会を得たことは、人生の第二幕に進む私の宝になりました。

東京大学にはこれからもノブレス・オブリージュの精神をもって、輝ける未来を開拓し続けていただきたいと思えます。

研究者と研究科長職

前大学院薬学系研究科長・薬学部長
長野 哲雄

研究者として、発想の独創性と本質の直截的表現を旨とするように訓練されてきた者にとって、研究科長職は戸惑うことの多い2年間であった。当初、研究科長職などの管理職と大学理系教員の研究者は発想法において対立するように思われた。危機管理に代表されるように、管理職の第一義は落ち度がないように、複数の提案をしても1つの失敗もないように安全運転を心掛ける。一方、研究者は原理において100のうち99が誤った仮説の提案であっても、正しいことが証明できた仮説が1つでもあれば一流の科学者と評価され、間違いの仮説について

の責任は問われない。

しかし、3.11の東日本大震災による原発事故はこの研究者としての発想法に根底から疑問を投げかけた。国民生活に根ざした視点からの科学の応用面の正否は、ある意味において管理職的発想である。今後、科学の進歩に伴い、その実用化に対して多面的な評価が求められる事例が多くなるであろう。

任期を終えて

前大学院数理科学研究科長
大島 利雄

小学校の同級生であった桂研究科長の後を継いで、3年間数理科学研究科長を務めました。多忙で苦しいこともありましたが、振り返ると多くの方との出会いがあって楽しい3年間でした。研究科内外の皆様は大変お世話になり感謝いたします。学内最小の研究科であり、研究の犠牲なしには研究科長を務まらないようでは今後なり手がなくなると考え、研究を続ける努力をしました。この3年間、特に2011年は私の今までの研究生生活で最も多量の論文を書きました。約200ページの最長論文もその一つです。1991年、理学部において数学が分離して共に大学院部局化の方向を決める超多忙な時期にも久城理学部長が自分の時間を確保して研究を続けていらしたのに感銘を受け、見習おうとしました。定年までの残り1年は、研究の方向をより広げると共に、滞っている著作を仕上げ、3年間放っておいたdivioutや数学のコンピュータ・プログラムのサポートも続けていきたいと考えています。

FLVCTVAT NEC MERGITVR(たゆたえど沈まず)

前大学院情報学環長・学際情報学府長
石田 英敬

大学院情報学環・学際情報学府は2000年に発足した新しい大学院である。他部局からの流動教員をほぼ半数の構成員とする独自の運営システムで成り立っていることから、私は、ギリシャ神話に出てくる「アルゴ船」に喩えてきた。知の金羊毛をもたらさんと二十一世紀のアカデミズムの海原に漕ぎ出したこの船も、私の在任中に創立十周年を祝うことができた。若き乗組員たちも育ち、修了生たちの社会での活躍も際だってきたこと心強いはかりである。

つねに好奇心を絶やさず、いつも冒険を続け、自ら変化し続けることをいとわない。これが私たちの「学環」の約束である。東京大学もまた今まさに大きなチャレンジへと向かいつつある。学環的な精神が全学的にも求められる時が来たと密かに自負している。新しい大学の世紀の波頭に立って、情報学環というまだ小さな船を操舵できたことは、私のささやかな喜びであり、すべての乗組員の献身的努力、すべての関係部局のご理解ご協力に厚く御礼申し上げる。

退任にあたって

前大学院公共政策学連携研究部長・公共政策学教育部長
田辺 国昭

平成 22 年から 2 年間、公共政策学連携研究部長・公共政策学教育部長を務めさせていただきました。この間、英語による教育を行う国際プログラムコースの発足と 3 月 11 日の大震災への対応が、大きな課題となりました。

3 月 11 日に東日本をおそった大震災は、海外からの学生に、日本の学生以上に大きな不安を感じさせることになったと思います。ほとんどの学生が一時日本を離れ、公共政策大学院としても、国際プログラムコースの始まりを 5 月へと引き延ばさざるを得ませんでした。しかし、日本に戻ってきた学生から、「今ほど日本で勉強するのによい時はない。なぜなら、今こそが日本の人々のみならず、内外の人々が一つとなって、復旧と復興のみならず、もっと印象深く、エキサイティングで、そして柔軟性に富んだ日本の再創造にむけて動き出す時なのだから」というメッセージをいただき、教育という現場で、このような日本を超えたつながりを感じることができたのは、大きな喜びです。

手つかずに終わった課題も多く残っておりますが、なんとか 2 年間を乗り切ることができたのも、執行部と事務組織、また、理事や本部組織のお力添えのお陰だと思います。多くの方々のご協力とご助言に感謝します。

研究所と大学の現代化

前東洋文化研究所長
羽田 正

70 年前に当時の世界観と学問体系に基づいて創設された東洋文化研究所が、どうすれば、東京大学や学術全般、さらには現代の日本と世界に貢献できるのかということを考え続けた 3 年間だった。70 年前と現在では、人間の人間に対する認識と人間の作り出す社会や世界のあり方が大きく変化している。東洋文化研究所の研究体制やミッションが永久不変であってよいはずがない。

幸い教職員の理解と協力を得て、研究組織を少しは「現代化」することができた。しかし、学術研究の広大な領域の中で、東洋文化研究所という一部局が関わる分野はごく限られている。東京大学が全体として現代世界に対応した知の拠点に衣替えしてはじめて、濱田総長の「森を動かす」という言葉が実現するのだと思う。所長としての職務は終わるが、一構成員として、東京大学のために、今後も自分なりの貢献ができるように努力を続けたい。皆さん、お世話になりました。ありがとうございました。

第二期釜石プロジェクトに向けて

前社会科学研究所長
末廣 昭

2009 年 4 月から 3 年間、社会科学研究所の所長を務めました。記憶に残ることと言えば、何と言っても所長職 3 年目に遭遇しました東日本大震災とその後の被災地の復興に対する支援活動です。社会科学研究所では所内の「希望学」チームが中心となって、2005 年度から岩手県釜石市で総合的な社会調査を実施し、市役所や市民の方々とも緊密な関係を作ってきました。『希望学シリーズ』全 4 巻（東京大学出版会、2009 年）の刊行によって、第一期釜石プロジェクトは完了しましたが、2 年後に大震災が生じ、釜石市も津波によって甚大な被害を受けました。それから 1 年間、20 名を超すスタッフが、さまざまな形で釜石市の復興（希望の再興）に関わってきました。募金活動、震災後の暮らしに関する意識調査、復興に向けての若手人材育成の支援などがそれです。2013 年度からは第二期釜石プロジェクトを開始する予定です。全学のみなさまのご協力をお願い申し上げます。

研究所長退任にあたって

前生産技術研究所長
野城 智也

生産技術研究所が創立 60 周年を迎えた 2009 年から 3 年間所長を務めさせていただきました。周年行事を通じて生研創立精神の今日的意味を再確認したその年に、最先端研究開発支援プログラムの中心研究者を本所から 3 人輩出できたことは光栄でありましたが、所長としては「実るほど頭を垂れる稲穂」たらんことに腐心しました。在任中、イノベーションの様態の大きな変化と、東日本大震災が突きつけた工学のパラダイム転換の刃に直面し、大学が果たすべき新たな役割を模索することになりました。附置研のもつ柔軟性・機動性を活かして、知の創造者としてだけでなく、課題解決のための知の連携を生む媒介的・中間組織としても貢献できることを模索し、産学連携・官学連携・学学連携の新たなあり方について布石を打たせていただきました。生研にとって還暦はまさに生まれ直しの時機となりましたが、これらの布石が今後花咲いていくことを祈りたいと思います。

皆様、大変お世話になり誠に有り難うございました。

地球観測データ統融合連携研究機構



一般 アフリカ河川流域における地球観測 および能力開発に関する国際ワーク ショップ

1月12日（木）から14日（土）の3日間、ケニア・ナイロビにある国連コンファレンスセンターにて、「アフリカ河川流域における統合的な水資源管理のための、地球観測と能力開発に関する GEO- ユネスコ共同ワークショップ」(GEO-UNESCO Joint Workshop on Earth Observations and Capacity Development for Integrated Water Resources Management at River Basins in Africa) が開催された。本国際ワークショップは、当初、昨年9月にナイジェリアの首都アブジャにて開催予定であったが、会議直前に会場としていたユネスコオフィスが爆弾テロのため被害を受け、開催を延期していたものを、今回、場所をナイロビに変更して実現したものである。

GEO とは、Group on Earth Observations の略称で、スイス・ジュネーブに本部事務局をおく「地球観測に関する政府間の枠組み」であり、GEO 事務局と、本学の当機構、ユネスコ（UNESCO 国際連合教育科学文化機関：United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization）のパリ本部水文学課、同ナイロビ現地事務所が合同で本国際ワークショップをバックアップした。日本からは、アフリカ水循環調整イニシアティブ代表の小池俊雄教授（当機構・工学系研究科）ほか、宇宙研究開発機構（JAXA）、水資源機構、国際協力機構（JICA）などが参加した。

また、アフリカからは、チャド湖、ニジェール川、ナイル川、マジエルダ川、セネガル川、ザンベジ川、オカバンゴ川の各流域委員会の専門家が参加し、それぞれの流域から、多様なニーズ、データ情報の共有、水資源管理の現状などが報告された。

アフリカ 17 カ国（ボツワナ、ブルキナファソ、チャド、コンゴ、ガボン、ケニア、モザンビーク、ニジェール、ナイジェリア、ルワンダ、セネガル、南アフリカ、スーダン、チュニジア、ウガンダ、ザンビア、ジンバブエ）を含む参加者総数は、73 名であった。

本件に関するお問い合わせ先：
地球観測データ統融合連携研究機構 事務局
editoria@editoria.u-tokyo.ac.jp



国連コンファレンスセンター前にて集合写真
ケニア・ナイロビ



救援・復興支援室

一般 岩手県陸前高田市「学びの部屋」学 習支援ボランティアの活動報告

救援・復興支援室ボランティア支援班では、年末年始に引き続き、「陸前高田市教育委員会」等が主催する被災生徒等を対象とする学習支援事業「学びの部屋」に協力し、2月～3月の期間には、陸前高田市の中学生の学習を支援する学生ボランティアを派遣した。

2月18日（土）～2月19日（日）はA班10名（学部学生4名、大学院学生6名）が、2月25日（土）～2月26日（日）はB班9名（学部学生5名、大学院学生4名）が、3月3日（土）～3月4日（日）はC班8名（学部学生2名、大学院学生6名）が、3月17日（土）～3月18日（日）はD班8名（学部学生4名、大学院学生4名）が陸前高田市内の3箇所の小・中学校の教室を利用しての「学びの部屋」において、個別学習や期末試験・高校入試の準備学習に取り組む中学生の学習サポート活動を行った。なお、3月18日には、濱田純一総長が激励に教室を訪れた。

この活動は、今後も引き続き実施していく予定である。



学習サポート活動の様子（左：A班、右：B班）



学習サポート活動の様子（左：C班、右：D班）



第3回アフリカ水循環国際シンポジウム

本年1月中旬に行われたナイロビでの国際ワークショップに続いて、2月27日(月)から29日(水)の3日間、第3回アフリカ水循環国際シンポジウムがガボンの首都リーブルビルにて開催された。現地ガボン宇宙庁がホストとなり、GEOと本学の当機構が共催した。平成21年に開催されたチュニジアでの第一回のアフリカ水循環国際シンポジウム、平成23年度のエチオピアでの第2回会合を経て、第3回目となる当シンポジウムでは、次の二点を開催趣旨として取り組んだ。(1)アジア水循環イニシアティブのための、実行計画案について議論する。また、特にアフリカ大陸に特長的である、国境をまたぐ越境河川流域のひとつをデモンストレーション流域として選定して、研究者、ステークホルダー、資金援助団体などが相互に連携するための枠組みを実現する場となるワークベンチの開発と、その成果目標、目的などを明確にする。(2)国連の持続可能な開発会議(Rio+20:本年6月にブラジル、リオ・デ・ジャネイロにて開催)の主要テーマとなる、グリーン経済(環境に配慮した経済成長)への貢献をテーマに、本会合の成果を、Rio+20に向けた提言として取りまとめることとする。この文書は、Libreville Statement(リーブルビル提言)として策定される予定である。

ブルキナファソ、ボツワナ、コンゴ、ガボン、ガーナ、ケニア、ニジェール、ナイジェリア、ウガンダ、セネガル、南アフリカ、ザンビア、ジンバブエのアフリカ諸国から河川流域の専門家および流域委員会の代表者らが招聘され、アフリカ水循環イニシアティブの代表である本学の小池俊雄教授、GEO事務局の水分野の科学者 Douglas Cripe氏、またGEO Water代表のRick Lawford氏が会議をリードし、白熱した議論が展開された。どのようなデータが必要なのか、GEOの枠組みが本研究に対してどんな支援ができるのか、現地の流域委員会と本学をはじめとする、高等教育機関がどのように連携することができるのか、など様々な質問に答えるかたちで議論が進められた。アフリカ14カ国および欧米、日本を含む、当シンポジウムへの参加者総数は81名となった。今後は、2012年秋にデモンストレーション実施計画策定のためワークショップの開催、また、2013年の1月に実行計画の推進にむけ第4回シンポジウムを開催し、共同実施計画案を採択し、実利用へ向けた開発を進める予定である。

本件に関するお問い合わせ先:
地球観測データ統合連携研究機構 事務局
editoria@editoria.u-tokyo.ac.jp



シンポジウム会場 Hotel Meridien 玄関前にて参加者集合写真
ガボン/リーブルビル



総括プロジェクト機構

太陽光を機軸とした持続可能グローバルエネルギーシステム総括寄付講座(Global Solar Initiative: GSI)がサウジアラビア、アブダラー国王原子力再生可能エネルギー都市(KACARE)とMOUを締結

2月1日(水)に東京プリンスホテルで開催された日本サウジアラビア産業協力フォーラムにおいて、「KACARE(アブダラー国王原子力再生可能エネルギー都市)-東京大学間の再生可能エネルギー技術協力に関するMOU(Memorandum of Understanding)」の調印式が行われた。当日は国会開催中にもかかわらず枝野幸男経済産業大臣が駆けつけ記念スピーチを行い、在サウジ日本大使館からは遠藤茂特命全権大使らが臨席した。



枝野大臣臨席での東大・KACARE調印式

MOUの内容は以下の通りである。

- ① KACAREと東京大学は再生可能エネルギーの分野における共同研究開発を実施する
- ② KACAREは
 - ・サウジアラビアでのプロジェクトの方向性、成果計画に関するリーダーシップをとる
 - ・MOUの目的達成に必要なサポートを行う
 - ・サウジアラビアでの再生可能エネルギープラントの商業化を推進する
- ③ 東京大学は
 - ・技術、リサーチスキルを提供する
 - ・サウジアラビアの研究者、技術者の教育機会を準備する
 - ・再生可能エネルギーに関する世界最先端の研究および教育を推進する
- ④ 対外的発表にあたっては相互に書面による了解をとる

2月2日(木)、前日のMOU調印を受け、KACARE

の戦略担当コンサルタントのイブラハム・バベリ氏が本郷キャンパスに來訪され、KACARE が策定するサウジアラビアのエネルギー戦略と、サウジアラビアに対する東京大学の今後の関わり方について、本学 GS+I 担当教員及びスポンサー企業代表者と意見交換を行った。

URL : <http://www.gsi.u-tokyo.ac.jp>

国際本部 日本語教育センター

東京大学日本語教育連絡協議会・講演会を開催



一般

3月8日(木)、日本語教育センターで、第12回東京大学日本語教育連絡協議会と第9回東京大学日本語教育講演会が行われた。

本学には、全学の留学生・外国人研究者等を対象に各種の日本語教育を提供している「日本語教育センター」のほか、研究科や専攻によっては、それぞれの所属留学生等のために日本語教室を設けているところがあり、全体で10余りの日本語教室があるため、年1回程度、本センターが呼びかけて、その連携をとるべく、これらの会を開催しているものである。今回も、学内から合計約30名の日本語教授者が参加して行われた。

第一部の「連絡協議会」は、各教室がそれぞれの活動の様子を示す説明資料(掲示物・展示物等)を持ち寄っての情報交換会として実施され、他の教室の活動をヒントに自分の教室の運営に活かそうと、参加者らによる熱心な質疑応答や意見交換が行われた。また、第二部「講演会」では、一橋大学国際教育センターの石黒圭准教授による講演「コーパスから予測文法を考える」が行われ、講演後には、その内容を教育に応用することを念頭に置いて活発なディスカッションが続けられた。

本学の留学生・外国人研究者の日本語能力の向上に寄与するという同じ目的をもった参加者たちが、その教育方法等についての考えを深め、また、親睦も深めることができる有意義な機会となった。

本部留学生・外国人研究者支援課

東京大学アサツー ディ・ケイ中国育英基金奨学生 大学院修士課程修了報告会



一般

3月13日(火)11時30分から、第二本部棟国際センター・日本語教育センター会議室において「東京大学アサツー ディ・ケイ中国育英基金奨学生大学院修士課程修了報告会」が開催された。

この報告会は、「東京大学アサツー ディ・ケイ中国育英基金」による奨学生が、平成24年3月に修士課程を修了する予定であることを機に、寄附者である株式会社アサツー ディ・ケイ 稲垣正夫相談役・創業者をお招きし、奨学生および本学関係者から修了の報告とこれまでの支援に対するお礼を述べる機会とし、関係者と懇

談を行うことを目的に開催されたものである。

会は、修了が間近である学生へのお祝いと、支援をいただいた株式会社アサツー ディ・ケイに対するお礼を述べる濱田純一総長の挨拶に始まり、次いで、稲垣相談役・創業者から奨学生に対して、「東京大学での経験を生かし、日中両国の懸け橋になっていただきたい」との激励の言葉が贈られた。

奨学生一人ひとりからの修了報告では、二年間の留学生生活の思い出や、今後の抱負、また、支援をいただいた株式会社アサツー ディ・ケイに対する感謝の意が述べられた。

昼食をとりながらの懇談は、稲垣相談役・創業者をはじめ ADK 関係者、濱田総長ほか本学関係者と奨学生との間で和やかに進み、会の終盤では、稲垣相談役・創業者から奨学生に対して記念品の贈呈があった。その後、江川雅子理事から閉会の挨拶があり、報告会は閉会となった。



記念品を授与された留学生と ADK 稲垣正夫相談役・創業者



一同揃っての記念撮影



バリアフリー支援室

「2011年度東京大学バリアフリーシンポジウム～大学の防災とバリアフリー～」開催される

バリアフリー支援室と環境安全本部は、3月18日(日)に経済学研究科棟第一教室において「2011年度東京大学バリアフリーシンポジウム～大学の防災とバリアフリー～」を開催した。

開会に先立ち武藤芳照理事・副学長より挨拶があり、大学として災害など有事の際のバリアフリー支援について検討し対処していくことの重要性や、本シンポジウムをきっかけに、バリアフリーを通して防災の新たな視点を見出すことへの期待が語られた。

シンポジウム第一部では、田中淳環境安全本部防火防災部長(大学院情報学環教授)から、災害時の要援護者の避難対策に関する国や都道府県の取組み及び本学の防災に関する取組みについて報告があり、大学として多様な構成員の命を守るのに加え、長期的に生活再建や教育・研究の早期再開をいかに円滑に進めるかが課題として提起された。松崎文官城教育大学准教授からは、3.11後の被災地における聴覚障害学生への支援活動について報告があり、全国的な大学間ネットワークが東北地区の聴覚障害学生への授業支援の早期再開に活かされたことが報告された。また、学生が積極的に情報にアクセスし判断する力を養う教育の重要性が指摘された。熊谷晋一郎先端科学技術研究センター特任講師からは、震災時の体験を踏まえつつ、「想定外」をいかに学習資源にしていけるか、また、支援の冗長性・頑強性・公平性を確保するために依存度をいかに分散させるかなど、震災後の社会を当事者研究の観点から問い直す問題提起があった。最後に、丹下健バリアフリー支援室本郷支所長(農学生命科学研究科教授)から、本学における災害時の障害のある構成員への対応に関する取組状況及び「個別(チーム)の緊急災害時マニュアル」の整備状況について報告があった。

次いで第二部は、池田信雄バリアフリー支援室長(総合文化研究科教授)が座長を務めるパネルディスカッションが行われた。第一部の話題提供、事例報告を受け、星加良司氏(教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター講師)から、①多様なネットワークを構築する上での大学としての関わり方、②震災により見出されたバリアフリーの多様なニーズへの対応、③支援の冗長性、公平性及び頑強性の構築・維持、④情報保障の整備等に関するコメントがあり、活発なディスカッションが行われた。

最後に、小島憲道副学長(環境安全本部長)から、全体総括があり、シンポジウムを締めくくった。



パネルディスカッションの様子(左から池田室長、松崎准教授、田中教授、丹下教授、熊谷特任講師)



シンポジウム会場の様子。
字幕作成をする学生サポートスタッフ(写真手前)



救援・復興支援室

遠野市「東日本大震災・後方支援の集い～『縁』が結ぶ復興への『絆』へ出席

3月18日(日)午後、濱田純一総長は遠野市主催「東日本大震災・後方支援の集い～『縁』が結ぶ復興への『絆』～」に出席し、市民・関係者で埋めつくされた遠野市市民センター大ホールにて、「人の絆、組織の絆-『絆』を明日へ」と題した基調講演を行った。また、支援団体の1つとして、本学の支援活動に対して遠野市から感謝の楯が贈呈された。

本学は、被災地における救援・復興に関する活動に携わる本学の教職員・学生に対する便宜を供与するため、「東京大学救援・復興支援室遠野分室」を遠野市役所西館に開設している。また遠野市は、大槌町などの湾岸被災地に対する後方支援の拠点となっている。

以下のURLに総長の基調講演(全文)を掲載している。
http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_20120321_j.html



濱田総長による講演の様子



遠野市から贈られた楯を持つ遠野分室の赤崎公一係長

救済・復興支援室、本部社会連携推進課
大槌町との連携協力に関する協定を締結



3月19日(月)、本学は岩手県大槌町との間に連携協力に関する協定を締結した。大槌町には大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターがあり、1973年に設立以来、岩手県を中心とした沿岸域における海洋科学研究等を通じて交流をしてきた。本協定は、東日本大震災を受け、本学と大槌町との関係をより一層強化し、持続的かつ効果的な活動を進めるため、震災復旧及び復興に向けて相互に連携・協力して取り組むことを目的として締結されたものである。

なお、本協定の調印式は、大槌町役場町長室において行われ、本学からは濱田純一総長、道田豊大気海洋研究所教授、中井祐工学系研究科教授が、大槌町からは碓川豊町長、阿部六平町議会議長、高橋浩進副町長が出席した。



濱田純一総長と碓川豊町長(左から三番目)

部局 ニュース



大学院工学系研究科・工学部



ラリー・モンテカルロ・ヒストリック完走

工学系研究科国際工学教育推進機構バイリンガルキャンパス推進センターでは工学系研究科共通科目「創造性工学プロジェクト」、工学部共通科目「創造的ものづくりプロジェクト」を提供している。その中のヒストリックモンテ参戦プロジェクト(担当;草加浩平特任教授、森村久美子准教授)では、1月30日(月)から2月4日(土)にかけて欧州で開催された第15回ラリー・モンテカルロ・ヒストリックに1975年式トヨタTA22セリカと1973年式トヨタTE27トレノの2台で出場した。

メンバーは事前に渡欧し、船で輸送した車両の引き取りや車両整備などの準備を行った。また、世界ラリー選手権のラリー・モンテカルロ観戦、イギリスでのフォース・インディアやメルセデスGPのF1チーム施設見学も行い、欧州と日本の車文化の違いを肌で感じる事ができた。

そして昨年5月から目指したヒストリックモンテ本番を迎え、30日(月)19時にイタリア・トリノをスタートした。競技中、学生はサポート隊として各地点で給油や車両点検などを行う。



コース脇で食料補給、給油、増し締め等のサポートを行う

初日にセリカがクラッシュし、一時はリタイヤも考えたが、応急修理の後にチーム一丸となって戦略を練り直し、再スタートを切る。

競技2日目以降は大きなトラブルなく進めることができた。そして全行程約 2500km を走りきり、目標であった「ヒストリックモンテ完走」を果たした。



モンテカルロにゴールしたセリカとチームメンバー

結果は出走 291 台（完走 214 台）中セリカが 213 位、トレノが 119 位であった。ラリーは何が起こるかわからない、その中で最終目標に向かって、最後まで諦めずに進むことの過酷さと面白さを学んだ大会であった。

大会後の表彰パーティには、国際化教育の一環として日本文化を発信するため、男性陣は袴、女性陣は着物で出席した。皆、半年かけて習った着付けの成果が出て、海外の方々から高い評価をいただき、日本の伝統を大切にせねばならないと身を持って感じる機会となった。



表彰パーティには和服で臨み、注目を浴びた

4 月末の報告会をもって 23 年度プロジェクトは終了するが、このプロジェクトで学んだものづくり・目標達成まで諦めない精神、日本伝統文化の大切さを、個々の今後の活動に活かしていくことを期待する。また、本プロジェクトにご協力いただいた多くの方々に、紙面を借りて謝意をお伝えしたい。

生産技術研究所



先進モビリティ研究センター (ITS センター) 「社会人のための ITS 専門講座」開催される

2011 年度「社会人のための ITS 専門講座」を先進モビリティ研究センター (ITS センター) 主催で 2 月 8 日 (水) に生産技術研究所コンベンションホール、2 月 9 日 (木) に千葉実験所の 2 日間で開催した。

この講座は、ITS センターのメンバーを中心とする研究成果の発表、研究室見学、研究者とのディスカッション等により ITS センターの日頃の活動をご理解いただくとともに、研究成果の社会還元と ITS の技術開発及び事業化と地域展開に必要な人材を育成することを社会貢献と考え、主に企業の技術者、地方自治体の担当者や政策立案者、大学の研究者などを対象に 2004 年より毎年開催してきた。

1 日目は、野城智也所長と須田義大センター長の開講挨拶のあと、当センターの専任メンバーから研究成果の報告があった。最新の研究テーマとして、滝口清昭特任准教授による準静電界の ITS への応用、東北大学から医工学研究科研究科長の松木英敏教授をお招きし、電気自動車の走行中給電システム、新領域創成科学研究科大和裕幸教授にオンデマンド交通システムの研究成果の各講演があり、参加者 156 名が熱心に聴講していた。昼時間を利用した当センター所属の 10 研究室の研究室見学も行われた。パネル説明のほか、体験型の研究室見学も多数あり、非常に有意義な研究室見学となった。

翌 2 日目は、初日とは別の当センターの専任メンバーによる講演が、新領域創成科学研究科居村岳広助教による最近の電気自動車へのワイヤレス充電の動向や技術的

課題の取り組みなどの紹介があった。さらに、東北大学未来科学技術共同研究センター副センター長である長谷川史彦教授による被災地域の知の拠点として震災復興へ地域とともに取り組む東北大学の活動の講演、大震災に関連し、生産技術研究所の岸利治教授によるコンクリートの自己治癒技術の講演が、海中工学国際研究センター長である浦環教授からは震災後の海底の実態調査の報告があり、熱心な質疑もあった。初日同様、千葉実験所の広大な敷地を活かした研究見学を実施し、講演で聞いたものをすぐ自分の目で見学できると72名の参加からご好評をいただいた。

(プログラム：

<http://www.its.iis.u-tokyo.ac.jp/shakaijin/shakaijin2011.pdf>)



1日目 見学会の様子



2日目 生産技術研究所千葉実験所会場の様子

部局
大学院農学生命科学研究科・農学部

部局
平成23年度 第4回農学生命科学研究科技術職員研修会開催される

3月1日(木)13時から2日(金)12時まで、大学院農学生命科学研究科フードサイエンス棟中島薫一郎記念ホールにおいて、農学生命科学研究科主催による第4回農学生命科学研究科技術職員研修会が開催された。

今回の研修会では、「教育支援」を共通テーマに、全附属施設の代表9名で構成された実行委員会が中心となって企画・運営を行った。

1日の研修内容は、特別講演として森林科学専攻の丹下健教授による「農学教育で期待される技術職員の役割」、生産・環境生物学専攻の根本圭介教授による「農場実習：最近における改革とその成果」が行われたあと口頭発表6題の発表があった。2日には共通テーマ6演題、自由テーマ11演題のポスター発表、退職記念講演として生態水文学研究所の後藤太成技術専門員による「森を育て、水を測って40年」、技術基盤センターの中谷操子技術専門員による「42年間の出会いに感謝」が行われた。

参加者は、農学生命科学研究科の技術職員50名のほか、理学系研究科・工学系研究科の技術職員合わせて10名、教員・研究員22名、事務職員5名、学生4名の合計91名であった。

今回はこれまで以上に各施設の業務・技術・教育支援内容が披露され、相互理解・情報交換が行われやすくなったと感じられる研修会となった。

ご協力いただいた長澤研究科長をはじめ、すべての教職員に御礼を申し上げます。



研修会参加者

部局
分子細胞生物学研究所・医科学研究所

部局
平成23年度分生研・医科研合同技術発表会を開催

3月1日(木)、インテリジェント・モデリング・ラボラトリー棟3階分生研大会議室において平成23年度「分子細胞生物学研究所・医科学研究所合同技術発表会」が行われた。本会は、両研究所に所属する技術職員の発表を通じて、研究所内外の情報、意見交換を図ることを目的として開催しており、5名の技術職員が代表として各自の職務、担当する研究課題、および技術職員研修について発表した。

当日は20名の教職員・学生の皆様に参加頂いた。技術発表のテーマは、有機合成による新規化合物の生理活性評価から、実験動物の系統維持管理、スーパーコンピュータを利用したゲノム研究など多岐にわたり、普段関わることのない分野であることがかえって活発な議論を呼んだように思う。また、研究データを出す上で不可

欠なデータの正しい取扱いに関する知識や、全学研修や実験機器メーカーによる実技講習の様子を聞くことができ、今後の実務、技術的スキルアップを考える上で大いに参考になった。

発表会終了後、ごく短時間ではあるが両研究所の技術職員で懇親会を開き、地理的にも普段は接点のない研究所の様子を知ることが出来る良い機会となった。

所内外からの参加者の皆様には、多数の貴重なご質問、ご意見を頂いた。技術職員一同それらを生かし、更なる技術力向上に努めたい。

開催にあたり多大なご協力を頂いた秋山徹分生研所長、多羽田哲也分生研副所長および加藤茂明分生研技術部長と、全ての参加者の皆様に深い感謝の意を述べると共に、今回の発表会の報告とする。



発表会の様子

低温センター

平成 23 年度低温センター「研究交流会・利用者懇談会」を開催

3月5日(月)、小柴ホールにおいて「第3回低温センター研究交流会」が開催され、93名の参加者があった。

工学、理学、農学にまたがる広い分野の若手研究者15名(うち大学院生8名)による口頭発表が行われ、普段はあまり聞くことのできない異分野の研究内容に触れることができ、大変活発な質疑応答がなされた。今回から設けられたポスターセッションでは、若手研究者を中心に計24名(うち大学院生18名)の発表があり、1時間半にわたって活発な議論が行われた。

専門的な研究を異分野の研究者に分かり易く説明する点で優れた発表を行った大学院生やポストドクなどの若手研究者に与えられるベストプレゼンテーション・アワード(口頭発表)とベストポスター・アワード(ポスター発表)は、大学院理学系研究科・化学専攻の生井 飛鳥さん(特任助教)と大学院工学系研究科・物理工学専攻の張 奕勁さん(修士1年)にそれぞれ授与された。

研究交流会終了後に「低温センター利用者懇談会」が小柴ホールホワイエで開催され、43名の参加者があっ

た。リラックスした雰囲気の中で、利用者間あるいは利用者とセンター教職員間の情報交換や親睦を深めることができた。席上、ベストプレゼンテーション・アワードとベストポスター・アワードの発表と賞状および副賞のクリスタル製盾の授与式が行われた。受賞されたお二人のますますのご活躍を期待する。



研究交流会の様子



左より、張 奕勁さん(ベストポスター・アワード)、
福山 寛低温センター長、
生井 飛鳥さん(ベストプレゼンテーション・アワード)



利用者懇談会の様子

3月13日（火）13時より、医科学研究所1号館講堂において、医科学研究所共同研究拠点事業平成23年度共同研究成果報告会が開催された。

今回の成果報告会は、「疾患システム共同研究領域」、「先端医療研究開発共同研究領域」、「感染症・免疫共同研究領域」にそれぞれテーマを定め、発表を行うもので、当日は、清野宏所長の開会挨拶に引き続き、各研究領域それぞれ4名の研究者から発表が行われた。また、特別講演として、本研究所先端医療研究センターの稲生靖先生による「がんのウイルス療法」についての講演があった。

所内外の研究者、学生等の多くの聴講者の参加があり、発表後は、聴講者と発表者の間で活発な質疑応答が行われ、本事業の今後の発展が強く期待されるものであった。

今回の発表は以下のとおり。

【発表課題】

疾患システム共同研究領域

テーマ：自己免疫疾患研究

①「転写制御因子IκBζによる骨代謝と免疫システムの制御」

発表者：岡本 一男 先生（東京医科歯科大学）

②「炎症性疾患における骨髄系 CBM 複合体関連自然免疫活性化経路の役割の解析」

発表者：原 博満 先生（佐賀大学）

③「遺伝性自己炎症疾患の細胞株を利用した炎症シグナル伝達の解析」

発表者：井田 弘明 先生（久留米大学）

④「Lrp4 抗体陽性重症筋無力症の神経筋接合部病理」

発表者：吉村 俊祐 先生（長崎大学）

先端医療研究開発共同研究領域

特別講演

「がんのウイルス療法」

発表者：稲生 靖 先生（医科学研究所）

テーマ：免疫学的アプローチによる先端医療開発

①「肝移植後における制御性 T 細胞・キメリズムと病態」

発表者：高木 章乃夫 先生（岡山大学）

②「原発性免疫不全症に対する臍帯血ミニ移植後の混合キメリズム解析と免疫学的再構築」

発表者：森尾 友宏 先生（東京医科歯科大学）

③「新規肺がんペプチドワクチン療法の臨床開発研究」

発表者：醍醐 弥太郎 先生（滋賀医科大学）

④「移植片対宿主病に対する新規分子標的療法の開発研究」

発表者：山田 健人 先生（慶應義塾大学）

感染症・免疫共同研究領域

テーマ：HIV および 感染実験動物としてのサル

①「HIV 抗原を提示する HLA/ ペプチド複合体特異的抗体の樹立」

発表者：立川 愛 先生（医科学研究所）

②「HIV-1 Nef のウイルスレセプター発現抑制作用と病態との関連」

発表者：上野 貴将 先生（熊本大学）

③「動物由来感染症のサル類を用いたヒトへの感染性評価」

発表者：柳井 徳磨 先生（岐阜大学）

④「ヨザル Aotus lemurimus の形態学的特性」

発表者：日下部 健 先生（山口大学）



開会挨拶をする清野宏所長



会場の様子

生産技術研究所

土木研究所と連携・協力協定を締結

部局

3月15日（木）に独立行政法人土木研究所と生産技術研究所の連携・協力協定の締結式が開催された。本協定は、両機関の研究開発能力と研究資産等を活かし、先進的・実用的な研究開発及び次世代を担う人材の交流・育成に関して連携・協力することによって、我が国の学術及び科学技術の振興と研究成果の社会還元に資することを目的とし、以下の3項目について連携・協力するものである。

1. 共同研究等の研究連携・協力
2. 人材交流・人材育成のための協力
3. その他目的を達成するために必要な連携・協力

この協定締結を記念して、土木研究所からお招きした講師（田村敬一 耐震総括研究監と小山内信智 土砂管理研究グループ長）による講演会を3月22日（木）に生研で開催した。また、3月27日（火）には生研から派遣した講師（目黒公郎教授と大原美保准教授）による講演会が土木研究所で開催された。

土木研究所では、以下の4項目に関する研究と技術開発が重点的・集中的に実施されている。茨城県つくば市内をはじめとする広大な敷地に各種の大規模実験装置を保有し、さらに、開発した技術を実際の事業で採用・展開する体制が整っている点が特徴的である。なお、魚本健人理事長は、生産技術研究所に長く在籍されて副所長も務められた本学の名誉教授である。

- ① 東日本大震災に代表される甚大な被害をもたらす地震、津波による災害、台風や豪雨による洪水や土砂災害、雪崩などの雪氷災害といった自然災害の防止、軽減、早急復旧に資する技術開発
- ② バイオマス等の再生可能なエネルギー活用やリサイクル資材等による低炭素・低環境負荷社会の実現に資するグリーンイノベーション技術開発
- ③ 老朽化していく道路や橋などの社会インフラの効率的な維持管理やその機能増進、長寿命化に資する技術開発
- ④ アジア等への技術普及など土木技術による国際貢献

生研にも、土木技術に関連の深い専門分野の教員が在籍し、また、先進モビリティ研究センターや都市基盤安全工学国際研究センターなどで、多様な社会基盤施設とこれらを運営・管理するシステムを対象とした研究が進められている。

今後は、両機関の連携・協力により、従来の土木技術の枠にとらわれない広範な分野での研究を推進し、より効果的で円滑な研究成果の社会還元を実現していくことが期待される。



協定書を掲げる魚本健人 土木研究所理事長（左）と野城智也 生産技術研究所長（右）



締結式に出席した土木研究所と生研関係者

情報基盤センター

教育用計算機システムの見学会を開催

部局

情報基盤センターでは、3月23日（金）に駒場キャンパスの教養学部情報教育棟において、2012年3月に更新した教育用計算機システム（以下、ECCS2012）の見学会を開催した。

ECCS2012は学生及び教職員が教育・研究のために利用するコンピュータやネットワークからなるシステムである。専用の教育研究用端末が本郷キャンパス情報基盤センター本館や駒場キャンパス教養学部情報教育棟をはじめとして、本郷・駒場・柏の各キャンパスの図書館や教室に配置されている。今回の更新では、教育研究用端末のデスクトップ環境へ学外からもアクセス可能とし、さらに教育・研究業界では初となるネットプリントサービス連携により、教育研究用端末からの印刷出力を学外でも行えるようにした。同時に、システム運用コストの抑制や省電力化、災害時のサービスの継続性向上等を実現した。

まず、柴山悦哉教授より情報基盤センターやシステムの概要説明があり、続いて丸山一貴助教よりECCS2012のプレゼンテーションが行われた。参加者からの質疑応答後、丸山助教の説明で実際に機器が設置されているサーバー室や、教育研究用端末が多数配置されている演

習室の見学を行った。

ECCS2012の詳細については、情報基盤センター情報メディア教育部門のウェブサイトに掲載している。

<http://www.ecc.u-tokyo.ac.jp/>



システムの概要説明を行う柴山悦哉教授



見学会で機器の説明を行う丸山一貴助教



情報教育棟演習室の教育研究用端末

大学院人文社会系研究科・文学部
第3回 PESETO 三大学人文学会議を開催

大学院人文社会系研究科・文学部では、3月24日(土)9時から本郷キャンパス法文2号館において第3回 PESETO 三大学人文学会議を開催した。

本会議は韓国のソウル国立大学の発案で、2007年から隔年で開催され、中国の北京大学 (Peking University)、韓国のソウル国立大学 (Seoul National University)、および本学 (The University of Tokyo) の三大学 (PESETO) により日中韓三カ国の人文の学術交流をめざしている。第1回はソウル国立大学、第2回は北京大学で開催され、両国の研究者16名を迎え、今回初めて本学で開催する運びとなった。

第3回となる本会議では、冒頭、各大学学部長・研究科長による三大学における過去2年の人文学領域の動向報告があり、その後、特別セッションとして本研究科基礎文化研究専攻の池澤優教授(宗教学)による「東アジアの文化と現代の死生観—岸本英夫と傅偉勳の事例に見る宗教学者の死」の報告が行われた。

総合テーマには「東アジア諸文化における翻訳:その歴史的・今日的意義」が掲げられ、6つの研究報告と各報告に対する他国研究者からのコメント、および各セッションにおいて参加者との質疑応答が行われた。

第一セッション「歴史の中の翻訳」では、アジア文化研究専攻の蓑輪顕量教授(インド哲学)が「仏典の翻訳に関連する三国の様相」と題し、第二セッション「翻訳の今日(そして明日)」では、欧米系文化研究専攻の柴田元幸副研究科長(現代文芸論)が『『仰ぎ見る』翻訳・『対等』な翻訳—外国小説の日本語訳、日本小説の外国語訳』と題して報告を行った。

本会議の特徴の一つとして、各国の言語を尊重し、会議中は英語等の共通言語は使用せず、逐次通訳を通して行うので、質疑応答では3ヶ国語にて議論が盛り上がった。

次回の会議は、2年後にソウル国立大学で開催される予定。



報告を行う中地義和研究科長



レセプションで挨拶する邊昌九教授（ソウル大学）（右）と逐次通訳のメモを取るアテンダント（左2名）

This month's **Todai Research**
<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/todai-research/>

東大の研究紹介サイト「Todai Research」の更新情報をお知らせします。
 興味のある記事はありましたか？ぜひ、サイトをご覧ください！

Todai Research で検索 🔍

Feature Story

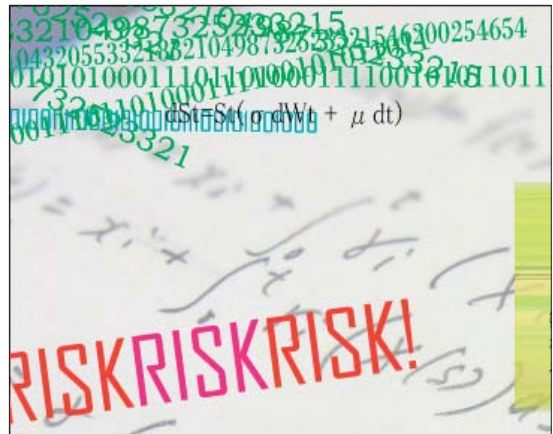
今月の特集記事

2012/03/23 数理科学研究科

リスクヘッジを解く

金融市場を一変させた確率微分方程式

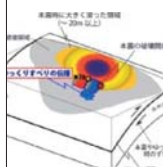
数学者伊藤清が世に送り出した確率微分方程式の応用の一つ、ブラック・ショールズの数理モデルは、金融商品のリスクヘッジを一変させ市場の姿を大きく変えました。そして今、数理科学研究所の楠岡成雄教授が挑むのは、高精度の近似を実現する最先端の数理ファイナンスです。



Research Highlights

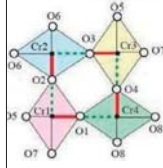
最新論文紹介

2012/04/06 地震研究所



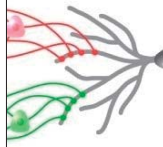
東北地方太平洋沖地震が起こるまで
 2度にわたる「ゆっくりすべり」の伝播

2012/03/22 物性研究所



強磁性を保ったまま金属から絶縁体に
 相転移するしくみを解明
 電子のスピンが関らないパイエルス転移

2012/03/07 薬学系研究科

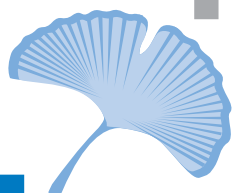


脳回路の驚くべき精密さが判明
 1ミクロンの精度で実現するクラスター入力

ご意見・お問い合わせはこちらまで

Mail: kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp Ext: 21045
 東大ポータル > 便利帳 > 総合企画部 > 広報課

<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/todai-research/>



平成24年度本学入学選抜の第2次学力試験(前期日程)の合格者3,008人の受験番号及び第2次学力試験(後期日程)の第1段階選抜合格者の大学入試センター試験試験場コード・受験番号が3月10日(土)12時30分頃、本郷構内で掲示により発表された。

また、併せて、合格者の科別成績(最高点・最低点・平均点)も発表された。

なお、各科別の合格者数等は次のとおりである。

平成24年度第2次学力試験（前期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	合格者科別成績		
						最高点	最低点	平均点
文科一類	401	1,592	1,220	1,218	401	499.4111	371.7000	401.1220
文科二類	353	1,078	1,059	1,054	353	460.4111	367.0667	389.0983
文科三類	469	1,439	1,407	1,407	479	454.7667	352.9444	374.1922
理科一類	1,108	3,126	2,770	2,767	1,128	461.4778	333.9111	362.1464
理科二類	532	2,252	1,871	1,863	547	468.6778	317.5111	343.6309
理科三類	100	504	400	393	100	492.6556	382.5000	411.0773
合 計	2,963	9,991	8,727	8,702	3,008			

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成24年度第2次学力試験（後期日程）第1段階選抜合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	倍率	第1段階選抜				合格者成績		
				合格者数	不合格者数			最高点	最低点	平均点
					本学前期日程合格による者	左記以外の者	計			
全科類 (理科三類を除く)	100	3,224	32.2	512	1,645	1,067	2,712	776	722	734.98
合 計	100	3,224	32.2	512	1,645	1,067	2,712			

本部入試課
キャンパス
第2次学力試験（後期日程）、外国
学校卒業学生特別選考の合格者発表

平成24年度本学入学者選抜の第2次学力試験（後期日程）の合格者100人及び外国学校卒業学生特別選考合格者第1種（外国人であって日本国の永住許可を得ていない者）の合格者20人、第2種（日本人及び第1種以外の外国人）の合格者17人は次のとおりである。

平成24年度第2次学力試験（後期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜 合格者数	受験者数	合格者数	合格者成績		
						最高点	最低点	平均点
全科類 (理科三類除く)	100	3,224	512	448	100	188	134	147.05
合 計	100	3,224	512	448	100			

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成24年度外国学校卒業学生特別選考志願者数・合格者数等

科 類	区分 種別	志願者数	第1次選考 合格者数	第2次選考 受験者数	第2次選考 合格者数
	第2種	25	14	11	6
文科二類	第1種	37	9	9	6
	第2種	22	13	11	5
文科三類	第1種	11	5	4	3
	第2種	19	9	7	2
理科一類	第1種	28	11	11	5
	第2種	23	5	5	3
理科二類	第1種	8	5	5	4
	第2種	4	4	4	1
理科三類	第1種	3	0	0	0
	第2種	8	5	4	0
合 計	第1種	93	32	31	20
	第2種	101	50	42	17

なお、過去3年間の入学志願者数及び合格者数の推移、高校卒業年別の合格比率、出身校所在地別合格者数及び比率は次のとおりである。

入学志願者数及び合格者数の推移

	平成24年度						平成23年度						平成22年度					
	志願者		合格者		計		志願者		合格者		計		志願者		合格者		計	
	前期	後期	前期	後期			前期	後期	前期	後期			前期	後期	前期	後期		
文科一類	1,592		1,592	401		401	1,557		1,557	401		401	1,265		1,265	401		401
文科二類	1,078		1,078	353		353	1,194		1,194	353		353	1,142		1,142	353		353
文科三類	1,439		1,439	479		479	1,478		1,478	479		479	1,529		1,529	479		479
理科一類	3,126		3,126	1,128		1,128	2,930		2,930	1,128		1,128	3,037		3,037	1,129		1,129
理科二類	2,252		2,252	547		547	2,055		2,055	548		548	1,963		1,963	547		547
理科三類	504		504	100		100	565		565	100		100	503		503	100		100
全科類		3,224	3,224		100	100		2,967	2,967		102	102		3,137	3,137		100	100
合計	9,991	3,224	13,215	3,008	100	3,108	9,779	2,967	12,746	3,009	102	3,111	9,439	3,137	12,576	3,009	100	3,109

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

高校卒業年別の合格比率

科 類	区 分	平成24年度			区 分	平成23年度			区 分	平成22年度		
		前期	後期	計		前期	後期	計		前期	後期	計
文科一類	平成23年度卒	68.8		%	平成22年度卒	65.1		%	平成21年度卒	64.3		%
	平成22年度卒	27.2			平成21年度卒	31.7			平成20年度卒	33.4		
	平成21年度卒	2.2			平成20年度卒	1.7			平成19年度卒	1.5		
	平成20年度以前等	1.8			平成19年度以前等	1.5			平成18年度以前等	0.8		
文科二類	平成23年度卒	63.2			平成22年度卒	54.7			平成21年度卒	58.9		
	平成22年度卒	33.7			平成21年度卒	42.8			平成20年度卒	39.7		
	平成21年度卒	2.5			平成20年度卒	2.0			平成19年度卒	1.1		
	平成20年度以前等	0.6			平成19年度以前等	0.5			平成18年度以前等	0.3		
文科三類	平成23年度卒	56.2			平成22年度卒	61.4			平成21年度卒	58.7		
	平成22年度卒	38.6			平成21年度卒	35.3			平成20年度卒	36.7		
	平成21年度卒	2.9			平成20年度卒	1.5			平成19年度卒	3.5		
	平成20年度以前等	2.3			平成19年度以前等	1.8			平成18年度以前等	1.1		
理科一類	平成23年度卒	67.6			平成22年度卒	68.9			平成21年度卒	71.6		
	平成22年度卒	30.3			平成21年度卒	29.3			平成20年度卒	25.7		
	平成21年度卒	1.3			平成20年度卒	1.3			平成19年度卒	1.8		
	平成20年度以前等	0.8			平成19年度以前等	0.5			平成18年度以前等	0.9		
理科二類	平成23年度卒	58.5			平成22年度卒	59.3			平成21年度卒	58.7		
	平成22年度卒	37.1			平成21年度卒	35.8			平成20年度卒	34.7		
	平成21年度卒	3.7			平成20年度卒	2.5			平成19年度卒	4.2		
	平成20年度以前等	0.7			平成19年度以前等	2.4			平成18年度以前等	2.4		
理科三類	平成23年度卒	76.0			平成22年度卒	67.0			平成21年度卒	72.0		
	平成22年度卒	13.0			平成21年度卒	22.0			平成20年度卒	16.0		
	平成21年度卒	3.0			平成20年度卒	2.0			平成19年度卒	5.0		
	平成20年度以前等	8.0			平成19年度以前等	9.0			平成18年度以前等	7.0		
全科類	平成23年度卒		67.0		平成22年度卒		77.4		平成21年度卒		70.0	
	平成22年度卒		30.0		平成21年度卒		19.6		平成20年度卒		22.0	
	平成21年度卒		1.0		平成20年度卒		1.0		平成19年度卒		3.0	
	平成20年度以前等		2.0		平成19年度以前等		2.0		平成18年度以前等		5.0	
合計	平成23年度卒	64.0	67.0	64.1	平成22年度卒	63.7	77.4	64.2	平成21年度卒	64.7	70.0	64.9
	平成22年度卒	32.3	30.0	32.2	平成21年度卒	33.1	19.6	32.7	平成20年度卒	31.4	22.0	31.1
	平成21年度卒	2.3	1.0	2.3	平成20年度卒	1.7	1.0	1.7	平成19年度卒	2.5	3.0	2.5
	平成20年度以前等	1.4	2.0	1.4	平成19年度以前等	1.5	2.0	1.4	平成18年度以前等	1.4	5.0	1.5

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

出身校所在地別合格者数及び比率

	平成24年度						平成23年度						平成22年度					
	前期		後期		計		前期		後期		計		前期		後期		計	
	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率
東 京	1,026	34.1	42	42.0	1,068	34.4	1,013	33.7	39	38.2	1,052	33.8	971	32.3	39	39.0	1,010	32.5
北 海 道	61	2.0	1	1.0	62	2.0	48	1.6	4	3.9	52	1.7	52	1.7	1	1.0	53	1.7
東 北	76	2.5	2	2.0	78	2.5	78	2.6	3	2.9	81	2.6	94	3.1	5	5.0	99	3.2
関 東 東京を除く	615	20.5	19	19.0	634	20.4	553	18.4	16	15.7	569	18.3	561	18.6	7	7.0	568	18.3
北 陸	103	3.4	0	0.0	103	3.3	106	3.5	3	2.9	109	3.5	114	3.8	5	5.0	119	3.8
中 部	289	9.6	7	7.0	296	9.5	288	9.6	3	2.9	291	9.3	331	11.0	12	12.0	343	11.0
近 畿	418	13.9	10	10.0	428	13.8	431	14.3	16	15.7	447	14.4	400	13.3	18	18.0	418	13.4
中 国	129	4.3	5	5.0	134	4.3	158	5.3	4	3.9	162	5.2	168	5.6	3	3.0	171	5.5
四 国	78	2.6	5	5.0	83	2.7	76	2.5	4	3.9	80	2.6	73	2.4	3	3.0	76	2.4
九 州 沖縄を含む	200	6.7	8	8.0	208	6.7	251	8.3	10	9.8	261	8.4	237	7.9	7	7.0	244	7.9
検 定 その他	13	0.4	1	1.0	14	0.4	7	0.2	0	0.0	7	0.2	8	0.3	0	0.0	8	0.3
合計	3,008	100.0	100	100.0	3,108	100.0	3,009	100.0	102	100.0	3,111	100.0	3,009	100.0	100	100.0	3,109	100.0

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

プロジェクトで復興を支援する 再生のアカデミズム 《実践編》 #02

東日本大震災、それに伴う原発事故という未曾有の大災害の発生以降、東京大学では様々な形で復興支援を行っています。また、総長メッセージ「生きる。ともに」に表されているように、先の長い復興に向けて、東大は被災地に寄り添って活動を行っていく覚悟でいます。この連載では、救援・復興支援室に登録されているプロジェクトの中から、復興に向けて持続的・精力的に展開している活動の様子を順次紹介していきます。

東日本大震災にかかわる映像や資料を収集し、デジタル保存、公開する「311まるごとアーカイブス」（正式名称：東日本大震災・公民協働災害復興まるごとデジタルアーカイブス）という取組みが進んでいます。被災した市民や自治体、研究機関、大学、NPO、ボランティア、民間企業などが協働で取組むプロジェクト。本プロジェクトの世話人になっている吉見教授（情報学環）にお話を伺いました。

プロジェクト名： 311まるごとアーカイブス

広報課 「311まるごとアーカイブス」とは？

吉見 大震災の経験を人類共通の資産として後世に伝えるプロジェクトです。震災直後、ある自治体職員から「津波被害の状況を把握したいが災害対応に追われてできない。被害状況の記録を手伝って欲しい」との相談があったことをきっかけに、スタートしました。

具体的には、現在の事態や将来に向けての対応をできるだけ正確に記録し、残すために以下3つの事を行っています。(1) 東日本大震災の被災地に関するあらゆる記録で、後世に残す必要があると思われるものをデジタルでアーカイブする。(2) アーカイブされた記録は、いつでも誰でも閲覧でき、利用できるような環境を整備する。(3) 収集された記録は人類共通の資産として、今後永久に保管し活用することを目指す。

このプロジェクトは様々な機関が連携・協働して取り組んでいます。学内でも生産技術研究所の岩井将行助教にフィールドミュージアムづくり(①)でNFC（近距離無線通信）やスマートフォンを活用して協力いただいていると聞いています。記録すること、記録を収集することに加えて、アーカイブの活動を通じて、地域の絆を再生し、復興を支援することも大事なミッションと考えています。

広報課 アーカイブスを構築することの意義は？

吉見 記録を残すことの価値は少なくとも3つあるでしょう。1つは、記録そのものの価値。将来の災害を予測するために非常に重要な科学的な価値があります。また、震災以前の祭りの風景の映像などは、文化的にも非常に重要です。2つめは、記録するという行為の価値です。プロジェクトによって、既存の地域や組織を超えた協働性がつくられていく、そうした関係の束そのものが非常に価値あることです。3つめは、活用して

生まれる価値です。教科書をつくるなど、アーカイブの活用によって生まれてくる価値があります。

従来アーカイブは静的なもので、専門家がつくるものと考えられていました。それが、専門家だけでなくいろいろな人が参加し、動的なものになってきています。ソーシャルメディアの普及とともに、扱うデータもネタ違いに膨大になり、つくる側と使う側の区別がなくなってきています。高度に情報化した日本で起きた災害を扱う「311まるごとアーカイブス」の取組みは、アーカイブの新しいプロトタイプになるでしょう。海を越えたハーバード大学のライシャワー日本研究所（所長：アンドリュー・ゴードン教授）で立ち上げた「2011東日本大震災デジタルアーカイブ」でのグローバルな視点からの記録収集・分析の取組みとも緊密な協力体制を整えています。3.11に関する記録の収集・保存は、全世界のために役立つため、日本に閉じた取組みではありません。収集する情報の幅を広げるためにも、プロジェクトの輪を広げ、国を超えての連携も必要になってきます。

広報課 研究者の役割は？

吉見 アーカイブすべきデータは多岐にわたり、材料はそれぞれの機関が持っています。それをまとめ上げ、被災地、研究者、海外等で有効に活用してもらうためのシステムの構築が必要です。そこでの研究者や大学の役割は大きいと思います。また、日本にはこうした災害アーカイブを体系的に推進する公的な制度や財源がないので、大学が政府との窓口になることも想定できるでしょう。このプロジェクトは、様々な組織が連携して行っているのですが、東大としての関与はごく一部になります。学術面での大学としての役割を果たすことが求められています。

311まるごとアーカイブス
<http://311archives.jp/>



JR大船渡駅ホームから盛方向を望む
震災前（写真上）と震災後（写真下）

震災前、震災後、復興の過程における写真や映像を収集。被災した方が自ら復興を記録していくことにも大きな意義がある。「311まるごとアーカイブス」では、そうした活動に携わる人材養成やしくみ作りの支援も行っている。

写真提供：神山康氏 311まるごとアーカイブス



大船渡市長にフィールド
ミュージアムの説明
をする岩井助教(①)



大学院情報学環 教授
吉見俊哉

ープロジェクトに関する問い合わせー
大学院情報学環
吉見俊哉 (yoshimi@iii.u-tokyo.ac.jp)
構成：本部広報課（内線：82032）

ひょうたん島通信

大槌発!

第4回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱（ほうらい）島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から毎月、沿岸センターと大槌町の復興の様子をお届けします。

震災から1年

福田 秀樹（大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター助教）



【上】2010年3月11日、震災の1年前の自宅前の様子。正面の建物はお隣さん。筆者が住んでいた建物も同タイプであった。【右上】2011年3月24日の時点での自宅跡。写真中央付近の板が自宅1階床（①）。【右下】2012年3月23日の時点での自宅跡地。基礎を残し、木材や砂が撤去され、新たな電柱が立っている（②）。

あれから1年がたちましたが、震災直後には泥と瓦礫が一面に広がっていた新港町も行政と町に来られた多くのボランティアの皆様のおかげで、見違えるように片付けました。その他にも町を訪れるたびに道路、街灯、商業施設などが確実に復旧しているのを感じますが、港のそばにうず高く積まれた瓦礫の山と、基礎だけが残った住宅街を見ていると、復興への道のりがまだまだ長く続くのだと改めて感じさせられます。

この大槌町の新たな町づくりですが、2012年3月16日付で大槌町役場のHPに土地利用計画の案が掲載されました。この案によると筆者が住んでいた新港町地区はすべて移転促進区域となり、今後は住宅地ではなく産業用地として活用される計画となっています。また掲載されている写真を撮影した際の立ち位置にあたる場所のすぐ背後には、高さ14.5 mの防潮堤が新たに建設されるとのことであり、この一帯の風景は以前とは大きく変わることになると思います。子どもたちが遊んでいたあの風景が失われることに寂しさを感じますが、亡くなられたご近所さんのことを思うと、新しい町はより安全なものになって欲しいと願わずにはいられません。

大槌の海辺に立つと目の前には震災前と変わらぬ美しく穏やかな青い海を見ることが出来ます。しかしながら破壊されたセンターのビルの屋上に立ち、大津波の時のことを思うと、筆者はときにこの穏やかさが何かしらの嘘のように感じられることがあります。今回の震災によりいろいろなものが失われましたが、大槌町にあった温かいつながりはいつまでも失われないでほしいと思います。

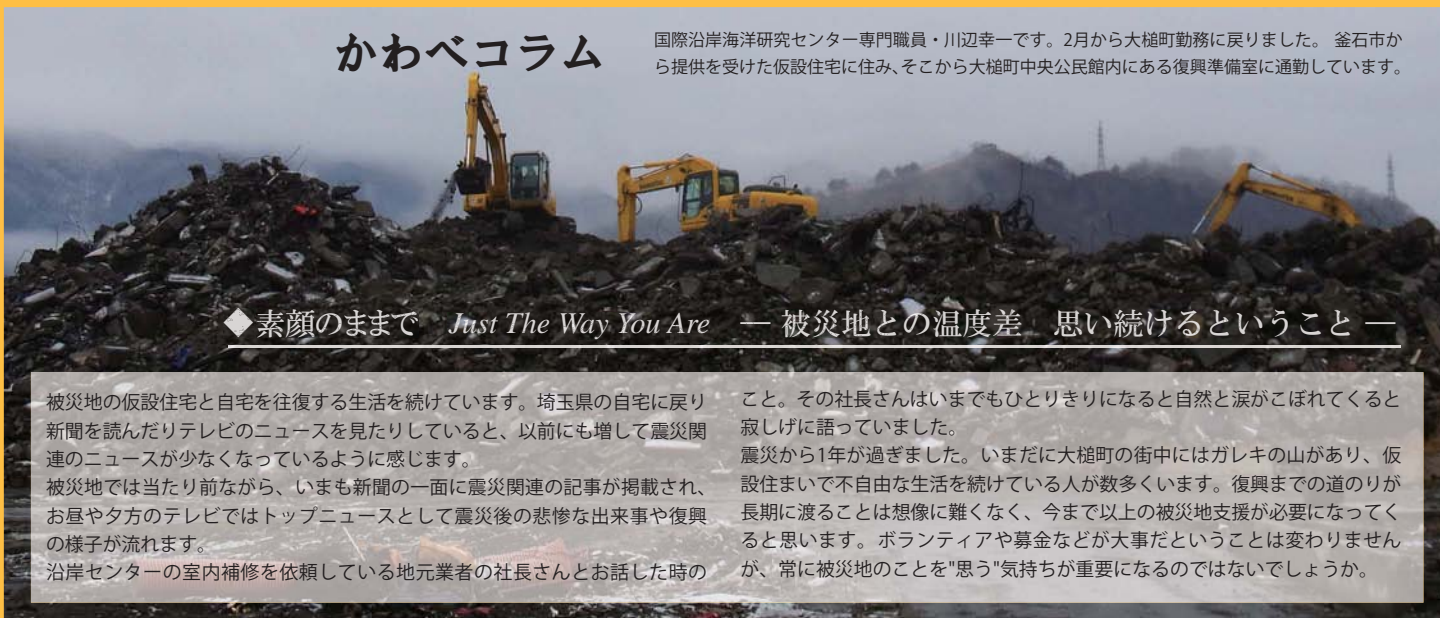
2011年3月11日の大津波の襲来以来、およそ1年の月日が流れました。筆者は2007年3月に同町赤浜の国際沿岸海洋研究センターに赴任して以来、同町新港町にあった賃貸住宅に入居していましたが、12 mを越える大津波により新港地区のほぼすべての住宅が流され、筆者の住んでいた住宅も床板を残すだけとなりました。3点の写真は筆者が震災まで住んでいた住居の前の風景を、震災をはさんだほぼ1年おきに撮ったものです。

震災前には住宅が立ち並び、近所の子どもたちが笑い声を上げながら駆け回る、どこにでもありそうな風景が見られる一方で、数百メートル先に並ぶ防潮堤を越えれば、リアス式海岸特有の入り組んだ海岸線と青い海が織

りなす美しい三陸の風景が広がる穏やかな場所でした。穏やかな風景だけでなく、町内の人々の間にも温かい空気があり、町外からやってきた筆者たちも心地よく過ごすことができました。鉄道が好きな子どもと線路わきで鉄道が通るのを待っていると、寒かろうと声をかけてくださっただけでなく、見ず知らずの筆者たちを自宅に上げてくれ、線路がよく見える部屋に招き入れてくださるようなこともありました。大津波が来たあの日も、状況がわからずとまどっていた筆者の妻にご近所さんが避難するよう声をかけてくださり、家族は無事に高台へと避難することができました（①②の中央部奥の山上に見える墓地に避難しました）。

かわベコラム

国際沿岸海洋研究センター専門職員・川辺幸一です。2月から大槌町勤務に戻りました。釜石市から提供を受けた仮設住宅に住み、そこから大槌町中央公民館内にある復興準備室に通っています。



◆素顔のままで *Just The Way You Are* — 被災地との温度差 思い続けるということ —

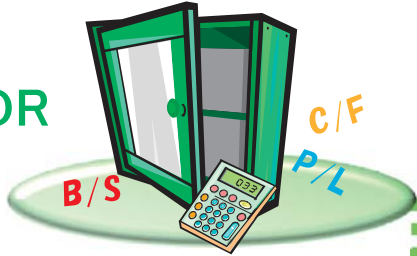
被災地の仮設住宅と自宅を往復する生活を続けています。埼玉県の自宅に戻り新聞を読んだりテレビのニュースを見たりしていると、以前にも増して震災関連のニュースが少なくなっているように感じます。被災地では当たり前ながら、いまま新聞の一面に震災関連の記事が掲載され、お昼や夕方テレビではトップニュースとして震災後の悲惨な出来事や復興の様子が流れます。沿岸センターの室内補修を依頼している地元業者の社長さんとお話した時の

こと。その社長さんはいまでもひとりきりになると自然と涙がこぼれてくると寂しげに語っていました。震災から1年が過ぎました。いまだに大槌町の街中にはガレキの山があり、仮設住まいで不自由な生活を続けている人が数多くいます。復興までの道のりが長期に渡ることは想像に難くなく、今まで以上の被災地支援が必要になってくると思います。ボランティアや募金などが大事だということは変わりませんが、常に被災地のことを"思う"気持ちが重要になるのではないのでしょうか。

決算のDOOR

～数字が語る
東京大学

第19回 預かっているだけ？



毎月待ち遠しい給料日。とはいえ、この不景気でベースアップも望めず、給与明細を見てはため息をつく方も多いのではないのでしょうか。そして「はあ、もうちょっと所得税が安ければなあ」なんて控除額を恨めし気に眺める御仁も。給与明細に控除額として記載される各種税金や社会保険料は、企業や法人が本人に代わって税務署やお役所に納めるお金。毎月お給料から天引きされた後、それぞれの期限にしかるべきところに支払われます。その間、会計では「一時的に会社で預かるだけで、いずれ支払うお金」として収入とはみなさずに「預り金」という負債勘定で管理しています。

国立大学法人の場合、この「預り金」には税金などの他、学生寮の私費光熱費や学会費なども含まれます。勿論預かったお金は大学の収入金にはなりません。ですから、

「おかあちゃん、東京のおじいちゃんからお年玉もらったで」「ほな、おかあちゃんに預けとき。貯金しといたるからな。あとで貯めて使おうな」「はい」・・・

「おかあちゃん、横浜のおばちゃんから小遣いもらったで」「ぎょうさんもらったな。ほな、貯金しよな」「はい」・・・

「おかあちゃん、欲しいものがあるんやけど、貯金いくらになった？」「・・・あかん！家計費と一緒にしといたさかい、いくらかわからなくなってもうた！」

とならないため、大学のお金とは別の帳簿で管理し、入出金の都度、日付と金額をしっかりと記録しておきます。

さてさて、我が東京大学の「預り金」は、附属学校生の修学旅行などの課外活動費や、留学生のための奨学金など目的も規模も実に様々、その数は50件以上にも及びます。中でも科学研究費補助金（以下「科研費」）はその代表格。え？科研費って大学の収入ではないの？はい、科研費は文科省や学術振興会から研究代表者個人に渡される補助金です。しかも、所属機関にお金の管理を委任するため、「預り金」としての資質は十分備わっているのです。

そんな科研費は、人文社会系、理工系などすべての学問分野にわたり、基礎から応用までありとあらゆる独創的で先駆的な研究をサポートする競争的資金です。と同時に、若手研究者にとっては幅広く研究費が得られる貴重な制度でもあります。運営費交付金とともに、基盤的資金として大学の教育研究活動をしっかりと支える屋台骨です。

年間およそ200億円の科研費（ぎょうさんに見えても1研究あたり平均400万円）は大学の収入金ではなく「預り金」であるがゆえ、その活躍ぶりを「決算書」の中で数値として目にすることはかきませんが、**科研費直接経費(単位：億円)** 研究者のみなさんにとって欠かせない影の立役者であることは誰の目にも明らかなのです。(青)

	21年度	22年度	23年度
件数	4,477	4,665	4,939
金額	204	198	203

本部財務部決算課 (内線22126)

E-mail: kessanka@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

◆このコラムは一見複雑な国立大学法人会計をわかりやすくご紹介することを目的とし、文章の読みやすさを重視しているため、ある程度恣意的な表現を取っている場合があります。あらかじめご了承ください。一ご意見、ご質問お待ちしております！

インタープリターズ・ バイブル

vol. 57



科学技術インタープリター養成プログラム

科学コミュニケーションの意味

石浦 章一

大学院総合文化研究科 教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

科学をやさしく大衆に解説するのが科学コミュニケーションの本質とよく言われるが、そのような「上から目線」の言い方は、最近の子どもたちの「感動を与えたい」という言い方と同じで、「そんなことお前に教えてもらわなくてもいいよ」という反発につながるのは必至である。また逆に、科学コミュニケーションは一般の人たちが専門家に無知な質問をぶついたり、いわんや感情的意見を主張するというたくい欲求のはけ口というものでもない。大衆の科学理解(Public Understanding of Science)というのも都合の良い言葉で、細かな専門用語を使った本質的理解を求めるのではなく、「専門家に都合のよい部分を一般に納得させる」というガス抜きの意味合いが強い。

なぜこういう話をするかという、例によって外国の物まねで、科学コミュニケーションを小中高に下ろす動きがあるからで、この子たちに何を科学コミュニケーションとして教えるかが問題になるからである。知的なコミュニケーションをとるためには、お互いの能力や興味が一致しなければならないが、自由研究を壁新聞で発表することが科学コミュニケーション、と教えられたのでは子どもたちもたまったものではない。

周りを見回しても疑似科学などが依然としてはびこっているようなので、私は、小学校から科学とは何か、そしてそれを学ぶ意義、をまず教えるのがいいと思う。何か面白い現象に着目し、なぜそれが起こるかを考える。仮説を立て、正しいかどうか何度も実験する。仮説が間違っていれば直し、再び検証する。最後に、その社会的意味を考える。

大学1年生でDNAを学ぶ理由の1つは、DNAの違いからヒトをはじめとする生物種間の多様性が生まれるだけでなく、時間とともにそれに変異が生じ、最終的に進化に結びつくことなのだが、学生は難しい遺伝子名や反応の順序を覚えることが大事、と考えているらしい。これも知的コミュニケーションのギャップによるもので、大学生がこのような考えるのは「DNAを勉強する本質」の理解、すなわち生命のふしぎについての疑問、が中高で語られていないからなのではなからうか。

もっと大切なのは、科学リテラシーとか大衆の科学理解など諸外国からの受け売りを叫ぶのではなく、我が国の科学教育の基盤を整備して独自の科学観を養うことである。教科書の内容についても、海外の有名教科書にのっているかいないかで取捨選択が決められるという噂を聞いて、この程度なのかと涙が出るほど恥ずかしく思ったことがある。日本人だれもが科学用語を理解し、当たり前のこととして環境問題を議論しながら人類の行く末を話し合うくらいのことはできないのだろうか。

(石浦章一 科学技術者かい？論)

★科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>



地方における産学連携の活性化を支援する人材育成プログラム「テクノロジー・リエゾン・フェロー(TLF)研修」の修了式を3月26日、産学連携プラザで行いました。今年で第12期目を迎えたTLF研修。この修了式の模様をご紹介します。



式辞の中で、保立産学連携本部長は、「みなさんの成果を発表する個別課題発表会では、オリジナリティに富んだ切り口で活動されていることがよくわかりました。1年間の活動の中で、本学の取り組みをじかに見ていただけたかと思えます。本学はみなさんの自治体との連携強化を強く望んでいます。地元に戻られた後、地域と大学との懸け橋としてのさらなる活躍を祈念しています」と祝辞を述べました。

続いて、年間約240時間にわたる講義と、OJTによる実習などのカリキュラムを終えた5名に、保立本部長から修了証が授与されました。

答辞として、修了生総代の比嘉賢一氏(沖縄県工業技術センター)から、「海外研修では先進的なアメリカの現状をうかがい知ることができたのをはじめ、国内中小企業の立場や、研究開発の考え方に触れることができたことなど、大変充実した内容でした。派遣元に戻り、これらの経験を産学連携活動に還元し、地域振興にまい進していきます」と、決意表明されました。

研修生は1年間にわたって、東京大学の技術シーズを発信するプロポーザル作成などのOJTをはじめ、講義、見学や、個別課題解決などのOFFJTを通して、東京大学の産学連携ノウハウをしっかりと身につけてきました。今後も引き続き、地元でのさらなる活躍が期待されています。



第12期 TLF修了式

テクノロジー・リエゾン・フェロー(TLF)研修制度

東京大学のテクノロジー・リエゾン・フェロー研修制度は、自治体等公的機関の職員を対象とした、産学官連携推進のための専門家育成プログラムです。豊富な実績を持つ東京大学の教員や各分野の第一線で活躍する外部講師による講義のほか、共同研究創出の実行や、教員への研究内容のインタビューを通じた連携提案テーマの発掘などのオン・ザ・ジョブ・トレーニングによる教育を行っています。研修を修了した専門家として派遣元に戻り、多くの方が産業振興の分野で活躍しています



アンビエント社会基盤研究会

ビックデータの活用が社会的に注目される中会場には産学官から136名の参加者が集まりました。本研究会の検討は、日本を代表する情報通信関連企業やサービス企業13社と、8部局38名の本学研究者で構成された学術的産学連携により実施されました。

冒頭、保立産学連携本部長は、「課題先進国といわれる日本において、産業界で蓄積されてきた経験と大学の知見を組み合わせる新しい知識を創り、新しい社会を創っていくことが重要。アンビエント社会基盤研究会の成果が役立つ

なければならない」と挨拶しました。WGの報告会では、ビジョンWGの田中秀幸教授(情報学環)が、「日本の未来社会に対し『成長』という量的拡大のみでなく、『発展』という質の改善も加味したビジョンが必要。これら2つの軸で活発なイノベーションを実現する、アンビエント社会基盤の構築が必要になる」と提言しました。

都市環境WGでは、(株)日立製作所 新谷洋一氏から、また、農林環境WGでは森川博之教授(先端研)から、それぞれ、「人間中心の都市環境の実現」と、「ビッグデータを活用した

「アンビエント社会基盤研究会」の成果報告会が3月12日、福武ホールで開催されました。本研究会は、当本部主催の「第18回科学技術交流フォーラム」がきっかけに発足したもので、2010年9月から2012年3月まで、5つのワーキンググループ(ビジョンWG、都市環境WG、農林環境WG、実世界ログWG、無線給電WG)が計82回の議論を重ねてきました。

農業の活性化」におけるアンビエント社会基盤の整備の重要性が提言されました。都市環境においては、都市デザイン、モビリティ、情報流の各分野における活用方策、農林環境においては、サプライチェーン(生産、流通、販売、消費)強化・充実への活用方策が報告されました。実世界ログWGでは、新日鉄ソリューションズ(株)桜井新氏から「総記録社会が起こす変革」の意義と具体化について報告されました。無線給電WGの高宮真准教授(大規模集積)は、「『どこでも給電』という新たな活用領域が広がる」と提起し、基盤作りに向けての方策案とその技術的課題について報告しました。

今後の展開にむけて

@成果報告会

アンビエント社会基盤研究会 主査 先端科学技術研究センター 森川 博之 教授



森川博之教授

それぞれの産業に情報通信技術が適用されてこそ、産業構造、経済構造、社会構造の大きな変革につながります。この変革には「データ」がカギを握ります。膨大なデータを集めるとともに、データの活用方法を各分野の方々と一緒に考える「場」を作ることが必要です。アンビエント社会基盤研究会は、異分野・異業種の方々や大学研究者と一緒に将来の社会像に想いを巡らし、データの活用を考える「場」と考えています。今回の「場」を生かし、各WGは更に今回の成果を醸成して日本の活性化に繋げてほしいと思います。

未来を予測することは難しいですが、未来を創ることはできます。技術は社会を変える力を有しているためです。広範なグローバル化と急激な技術革新がもたらす、歴史的パラダイムシフトに直面している転換期においてこそ、アンビエント社会基盤(知恵基盤)の確立を産学官で追及することは重要であり、人々が夢と誇りを持つ国づくりにつながるものと考えます。

連絡先：産学連携本部(本部産学連携課)
電話：内線22857(外線03-5841-2857)
WEBサイト：<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索



このページでは、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースをお届けします。

東日本大震災 1年を迎えて 日本は変わったのか 変わっていないのか

東日本大震災は、第二次世界大戦後の日本が直面した最も大きな危機であるといつてよいだろう。日本社会や個人は連帯し、



三浦瑠麗 特任研究員

互いに助け合い、困難に対して果敢に立ち向かっている。しかし政治の世界を見れば、東日本大震災に対する直後の対応は後手後手に回り、また長期的な復興戦略の策定さえ遅れている。

こうした 3.11 後の日本の特徴は、失われた 20 年と呼ばれたバブル崩壊後の長い停滞の果てに起きたこのような大惨事を経てなお、日本のシステムが変化していないことを意味する。

危機を経験しながら、政府は自国の抱える構造的な問題に真摯に取り組めていない。日本は多くの分野で国際競争力を失って久しく、国民は、じり貧の国内経済、政治的リーダーシップの欠如と次々と起きる政権交代を忍耐強く甘受している。ここでの問題は、日本が果たして変わるのか、少なくとも現在の日本に変化の兆候はあるのかということである。

日本は世界第 3 位の経済大国であり、高い言論の自由が保障された古くからの民主主義国であるが、あまりグローバル化されおらず、日本語ができない外国人にとっては情報も少なく、閉鎖性を指摘されている。外からは全くのブラックボックスといえるほどに奇妙な国として映っているとさえいえよう。確かに、日本は良くも悪くも特異な国かもしれない。少なくともそのような印象を持たれているといつてよい。だが、ひとたび日本の抱える表層的な印象の奥に潜む根源的な問題を概念化してみれば、何も日本に限った問題とはいえない。日本の長期的な停滞と政治の不決断、安定的な社会の裏で蓄積していく危機から目を背けさせる欺瞞の構造は、多くの先進工業国の将来を予期させるものかもしれないのである。

現在、東北各地には復興の槌音が響く一方、福島第一原発周辺の人々は子供の安全や今後の経済的な道筋についての不安におびえながら生活している。まだ復興は緒に就いたばかりだが、2011 年 3 月 11 日から一年を迎えた今、日本の長期的な復興について、客観的、国際的な視点に基づいたいったんの評価が求められているといつてよいだろう。筆者らは多くのキーマンの政治家、諸外国の外交官にインタビューを行い、また公開情報を分析し、日本を内外から観察した結果、次のように結論付けた。

まず、日本社会はそのような不幸に見舞われながらも、世界で稀にみる安定と「絆」

を示しており、それこそが日本の復興の原動力となるだろう。

次に、東日本大震災によって日本が持つ事実上の政策選択肢が大幅に狭められた結果、二大政党は経済成長重視と日米同盟重視の立場にほぼ収斂しつつある。だが、この「消極的なコンセンサス」ともいべき現象は具体的な政策合意に至っておらず、当面の危機が去った今、両党のなかに潜む改革抵抗勢力の巻き返しに直面している。そのため、残念ながら必要な改革のスピードはあまりに鈍い。

日本を襲った大災害が日本をいかに変え、また変えなかったのか、そして世界に対するインプリケーションはいかなるものかについて論じる。(本文は当センターウェブサイトでお読みいただけます)

▶当レポートの目次

日本を襲った悲劇

311 を振り返って / 原発事故のミスマネジメント
 救援活動とトモダチ作戦 / 被災地の今

欠けていた政治的リーダーシップと復興のビジョン
 政治的混乱 / 復興予算の遅れ / 蔓延する漸進主義とバラマキ / 野党自民党の停滞 / 変革の試み

日本は変わることができたのか？

日米同盟と外交安保政策 / 税と社会保障の一体改革 / 経済成長を目指すことができるか

世界との比較における日本

日本の現状と世界各国の比較 / 不満を持つ勢力からの突き上げ
 明るい未来を目指して

(政策ビジョン研究センター特任研究員 三浦瑠麗 / ジャーマン・マーシャル財団トランスアトランティック・フェロー ジョシュア・W・ウォーカー)

東日本大震災 1年を迎えて 見えない復興の道筋 消えない国民の不安

東日本大震災から 1 年あまりが経った。わが国の歴史上未曾有の災害は、わが国の社会に計り知れない大きな衝撃を与えた。震災直後、あまりに大きな変化に遭遇した被災者はいうまでもなく、日本社会全体がショックを受け、早急に以前の状態への復興を期待した。

しかし、現実はどうか。復興は遅々として進まず、原発事故もまだ安心できる状態にはほど遠い。

さらに、ヨーロッパの財政危機に端を発する円高は、日本の製造業、輸出関連産業を直撃し、それらの産業の海外脱出は、わが国の

経済的な活力を著しく低下させつつある。加えて、これからますます進む高齢化は、社会保障負担を激増させる。それに対して、財政的な備えは充分どころか、今議論されている消費税率の引き上げが行われたとしても、財政の立て直しにはまだまだ足りない。

わが国は、このように、今、かつては想像もできなかったようなさまざまな困難に直面している。なぜこうなったのか。どのようにしたら、この状態から脱出することができるのか。多くの国民は、脱出の道筋が見えないがゆえに、わが国の将来に不安を抱きつつある。こうした疑問について、筆者の専門とする政治学、行政学の観点から考察した。(本文は当センターウェブサイトでお読みいただけます)

(森田朗 政策ビジョン研究センター特任教授)

Energy Policy Roundtable 2012 vol.2

アジアのエネルギーをめぐる課題と展望

日時：2012 年 4 月 20 日 (金)

場所：伊藤謝恩ホール

主催：政策ビジョン研究センター

共催：公共政策大学院、

新エネルギー・産業技術総合開発機構

プログラム

講演「アジアのエネルギー事情と展望」

Prof. CHOU Siaw Kiang

シンガポール国立大学エネルギー研究所所長

パネリスト

田中 伸男 エネルギー経済研究所 特別顧問、
 前 IEA 事務局長

澤 昭裕 21 世紀政策研究所研究主幹

木村 福成 慶応大学経済学部教授、

ERIA チーフエコノミスト

東條 吉朗 新エネルギー・産業技術総合開発機構総務企画部長

城山 英明 政策ビジョン研究センター長

茂木 源人 大学院工学系研究科 准教授

司会 芳川恒志 政策ビジョン研究センター特任教授

Asian Diversity No. 18 by ASNET

「9.6%」

アジアの隣人を知る写真 (中国編)

中国では、中秋節の前、家族や先生、知人に月餅を送る習慣がある。この時期、各地のスーパーでは写真のような特設売り場ができる。私はクルミの入った月餅が好物であった。

中秋節に配られるこの月餅、問題も多い。それは、月餅自体は小さいが、非常に豪華な包装紙に入れられていることが多いからである。

ある日、本当に失礼と思いつつ、友人から頂いた月餅を実際に量ってみた。その結果、月餅4個の体積は約432立方センチで、包装箱の体積は約4,500立方センチだった。

月餅が包装箱に占める割合は9.6%であった。

こうした現状を受けて(かどうかわからないが)、政府は「月餅」規定を2005年(2008年改定)につくった。この規定では、月餅と箱の間は2.5センチ以内、包装は3重まで、箱の価格は月餅の価格の20%を超えないなど、たいへん細かいことまで定められている。

この規定ができてから、友人からもらう月餅は幾分シンプルなものが多くなったような気がした。それ以上に、包装より味で勝負しようという業者が増えたのか、以前よりおいしくなった気もした。

何ごとも中身が重要なのである。



写真 月餅の特設売り場

文・写真: 卯田宗平

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET機構)は、研究者や学生が分野を超えて繋がり、アジアに関係する教育や研究の新たな可能性を探るために設立された東京大学の機構です。

アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL:

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

ASNET機構

検索

Relay Column

ワタシのオシゴト / 第74回

Rings around the UT

本部学生支援課体育チーム検見川総合運動場
担当係長(現・本部学務課学生総務チーム)

安藤 昭浩さん

検見川総合運動場の「顔」

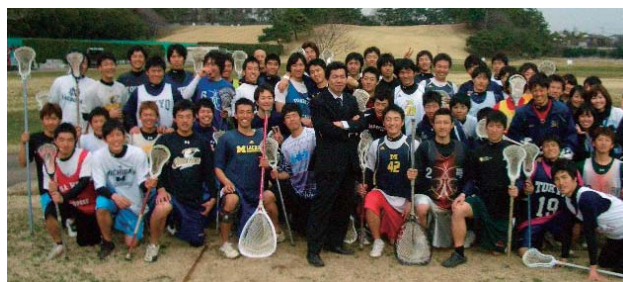


ようこそ! 検見グラへ

私の勤務地は千葉市の検見川総合運動場です。ワタシのオシゴトは、昭和13年に東京大学の先輩方が「我々のグラウンドは我々の手で!」をスローガンにツルハシを担いで造ったこの運動場を運営していくことです。運動場はサッカー場やテニスコートなど多くの競技場と約200名合宿可能なセミナーハウスがあり、私以下18名のメンバーで「良い思い出を持って帰れる運動場」を目標に利用サービスを行っています。

私の仕事での表情は様々です。元気な学生達を出迎える時の笑顔、雨天時に水田状態のグラウンドを見て悩む顔、食事の提供をした際の利用者の反応を期待する顔、調子に乗って部屋を汚した学生を叱る顔、周辺住民からの強烈な苦情に誠実に対応するマジ顔、そして、不法侵入ゴルファーに対して激怒する大魔神顔。このように毎日バラエティな表情で仕事をしています。

このような私ではありますが、是非、皆さんも検見グラにお越し下さい。「笑顔」でお迎えいたします。



合宿中の運動会ラクロス部のみなさんと

【編集部註】安藤昭浩さんは平成24年4月1日付で本部学務課に異動されました。この原稿は平成23年3月に執筆されたものです。

得意ワザ: 宴会芸

自分の性格: 穏やかそうに見えて激熱!

次回執筆者のご指名: 秋本真利さん

次回執筆者との関係: 若い頃からの朋友、または腐れ縁

次回執筆者の紹介: いつも明るく、異常に元気な人。

真冬でも半袖で・・・。

■イベント出店報告★

●4月12日(木) 入学式@日本武道館

みなさんこんにちは！温かくなってきましたが、いかがお過ごしでしょうか？

今回のコミュニケーションセンターだよりは4月12日(木)に日本武道館で行われた入学式の出店報告です！！

当日は晴天、気温21℃と、とても春らしく温かい入学式日和でした！桜もとてもきれいでした！！



桜が咲き誇る日本武道館

今年もUTCCは日本武道館3ヶ所にテント出店して参りました！今年のびっくりゲストはなんと、「こまっけろ」！！

言わずと知れた、駒場祭公式マスコット！「こまっけろ」がUTCCテントに遊びに来てくれました！



UTCC出店テントに来てくれた「こまっけろ」

人気のあった商品は、「東大オフィシャルネクタイ」!! (¥8,800税込) 特に、総長が当日着用して下さった「レジメンタル(ななめ縞)」の柄は完売の勢いでした！またシャーペン(¥500)などのステーションナリー、チャーム付きストラップ(¥1,470)などもお土産として人気がありました。



日本武道館内、出店の様子



研究成果商品も大人気でした！！

沢山の新生、ご家族にお越しいただき、本学の研究成果商品を皆様にご紹介できました！ぜひ、今度は本郷キャンパスにあるコミュニケーションセンターに遊びにいらしてください！！ありがとうございました！！

■次回イベント★

次回のイベントは五月祭です！ご期待ください！

担当：UTCC三浦



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：00～18：00
電話：03-5841-1039
http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

■救援・復興支援室の活動(3月～5月)

- 3月3日～18日・・・学習支援ボランティア ⇒詳細はP48頁を参照
場所：岩手県陸前高田市「学びの部屋」
C班：3月3・4日／D班：3月17・18日
- 3月18日・・・総長が岩手県遠野市主催「東日本大震災・後方支援の集い」で講演 ⇒詳細はP51頁を参照
- 3月19日・・・岩手県大槌町と震災復旧及び復興に向けた連携・協力に関する協定締結 ⇒詳細はP52頁を参照
- 3月21日・・・第11回救援・復興支援室会議
- 3月23～30日・・・福島県大熊町の避難生徒への学習支援ボランティア
場所：大熊中学校(会津若松市内)
- 4月28日～5月5日・・・ボランティア隊活動予定
第1班：4月28日～5月1日／第2班：5月2日～5日

- プロジェクト登録研究 85件 (2012年3月21日現在)
⇒新連載「再生へのアカデミズム【実践編】」が始まりました。P63参照
- 救援・復興支援室の活動の詳細はウェブサイトをご覧ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/index_j.html
- 救援・復興支援室
Email: kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
内線：21750

第2話 分室
遠野ものがたり

救援・復興支援室の遠野分室から、被災地の復興の様子や分室の活動を報告していきます。

零下18℃って、体験した事ありますか？
関東ではほとんど耳にしませんが、冬季の寒冷地では欠かすことが出来ない水のケア「水抜き」。蛇口で水を止めただけでは、管の中に水が残っているため(ストローを水につけ、上を指で押さながら引き上げた状態)、蛇口を開けて空気を入れることで管の中の水が抜けて凍結しにくくなります(指を離すとストローの中の水が抜けていく)。

外気温が零下4度以下になり、就寝時・長時間水道を使用しない場合や真冬日(1日中外気温が氷点下の日)が続くと、水道管が凍結してしまうため、うっかり「水抜き」を忘れてしまうと、一晩で管や蛇口・設備器具等が凍結し、放置すると膨張して破損させてしまいます。一般家庭では、複数箇所ある「水抜きハンドル」等を回して水抜き・給水をしますが、遠野市役所西側にある東京大学救援・復興支援室遠野センター(TTC)には「水抜栓操作盤」があり、ボタン一つで水抜き・給水が完了！そんな高性能水抜栓操作盤をフルに活用しても、零下18℃の世界では・・・凍結します。

水抜栓操作盤の電源を「OFF」にする日が待ち遠しい・・・

どんどはれ・・・

文：赤崎公一



(左)復興支援のための研究・作業を行うスペース、滞在に必要な設備や貸し出し用車両を備えるTTC
(下)水抜栓操作盤



執筆者紹介： 救援・復興支援室遠野分室勤務(総合企画部企画課係長)赤崎公一氏。東日本大震災にて実家(岩手県大槌町)が津波で全壊し、家屋・家財すべて流失。昨年7月より、妻と子(当時1歳)とマンションのローンを東京に残し、岩手県遠野市に移住。現在は、被災した母(65歳)と高校卒業以来の同居生活中。
連絡先: tohno-kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

INFORMATION

お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第546（4月4日）号の発行
—教員による、学生のための学内新聞—

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第546号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

濱田純一：新入生へ贈る言葉～「極限」を生きる

長谷川壽一：新入生へ贈る言葉

未来と世界を語る力を

藤垣裕子：三大災害（地震、津波、原子力発電所事故）

の科学技術社会論的分析

渡邊雄一郎：テーマ講義「放射線学」

新井宗仁：バイオエネルギーをつくる

品田悦一：ゴッホ、ヤスパーズ、斎藤茂吉

瀬地山角：占拠運動と選挙運動

井上健：曲尽きて已に情を忘る——駒場をあとに

鳥井寿夫：ポケットに偏光板を

倉田博史：「統計検定」受験案内

遠藤泰生：グローバル共生大学院プログラム

(Global Humanities Program, GHP)

石垣琢磨・松島公望：

駒場には「よろず相談所」があります

～その場所は、学生相談所です～

斎藤文修：進学先を考えるならば～進学情報センターの
活用の勧め

宮内由美子：双方向の留学生支援体制

遠藤泰生：アメリカ太平洋地域研究センター（CPAS）

山口和紀：情報教育棟

酒井哲哉：駒場図書館案内

三浦篤：駒場博物館案内

永田敬：21 K O M C E E～滞在型のアクティブラー
ニング空間

事務局：教育組織・事務部等

山崎憲：保健・健康推進本部駒場地区

永田敬：キャンパスライフを支援します～初年次活動
センター

酒井哲哉：〈本の棚〉鴨下重彦・池田信雄・川中子
義勝・木畑洋一編『矢内原忠雄』

石井洋二郎：〈本の棚〉長谷川まゆ帆『さしのべる
手～近代産科医の誕生とその時代』

「歴史」と「物語」の間

竹峰義和：〈時に沿って〉駒場という〈風景〉

〈辞典案内〉

武田将明：英語

森芳樹：ドイツ語

坂原茂：フランス語

安岡治子：ロシア語

西中村浩：ポーランド語

村松真理子：イタリア語

木村秀雄：スペイン語

木村秀雄：ポルトガル語

筒井賢治：古典語～ギリシア語・ラテン語

吉川雅之：現代中国語

品田悦一：国語

齋藤希史：漢和辞典

生越直樹：韓国朝鮮語

杉田英明：アラビア語

藤井毅：ヒンディー語

高知薫：インドネシア語

高松洋一：トルコ語

中井和夫：ウクライナ語

山崎信一：セルビア・クロアチア語

岩月純一：ベトナム語

上村静：ヘブライ語

永ノ尾信悟：古典語～サンスクリット語

前田君江：ペルシア語

浅見靖仁：タイ語

王 嵐：台湾語

木村理子：モンゴル語

吉川雅之：広東語

楊凱榮：上海語

高橋英海：シリア語～シリア・アラム語

進学情報センター：シンポジウム

駒場保健センター：ヘルスケアマッサージ

ピアノ委員会：選抜学生コンサートオーディション
 友の会：新入生歓迎特別講演会
 教養学部報委員会：コーナーストーン

お知らせ

低温センター

低温センター安全講習会（高圧ガス保安法に基づく保安教育）のお知らせ

液体窒素・液体ヘリウム利用者を対象とした講習会を開催します。主な対象者は、本郷キャンパスで新たに寒剤（液体窒素・液体ヘリウム）を利用する学生及び教職員（修士課程一年生など）です。各研究室の該当者は必ず出席するようにお願いいたします。

【内容】寒剤の性質、事故原因と事故防止／容器の取り扱い／高圧ガス保安法／本学での高圧ガス等の管理について 他

【申込方法】事前申し込み（web）が必要です
<http://kanzai.crc.u-tokyo.ac.jp/kosyu/>

【申込期間】4月9日（月）～5月8日（火）

【開催日】※第一回または第二回のどちらか1回を受講してください。

<第一回>

日時：5月10日（木）15：00～16：30

場所：理学部1号館 小柴ホール（定員170名）

<第二回>

日時：5月15日（火）15：00～16：30

場所：理学部1号館 小柴ホール（定員170名）

【問い合わせ先】低温センター 液化供給部門
 内線 22853

【補足】この講習会の参加者は、環境安全本部主催「化学物質・高圧ガス・UTCRIS 取り扱い講習会」のうち高圧ガスに関する講習を受講する必要はありません。

お知らせ

国際本部 日本語教育センター

「2週間初級日本語コース」および「スポット講座」開講のお知らせ

日本語教育センターでは、1学期間を通じて開講される通常の各種日本語コースのほか、下記のような短期間の授業も開講しています。対象は、本学の留学生および外国人研究者の方です。また、留学生の日本語学習を支援したい日本人学生のための講座も開講します。関心のある方の幅広い参加をお待ちしています。



■ 2週間初級日本語コース：「はじめて学ぶ日本語」

日程：6/11（月）～6/21（木）の月～木
 13：30～17：00

対象：本学の留学生、外国人研究者（定員14名）

内容：日本語を初めて学ぶ人のためのコンパクトなコースです。8日間（16コマ）で、日本語でのコミュニケーション「聞く・話す」のほか、日本語の基本文法や文字体系をひとつと学習します。

- ・あいさつ、買い物、自己紹介、いろいろな質問等の会話表現
- ・基本文法（名詞文、形容詞文、動詞文、疑問詞、助詞等）
- ・日本語の文字体系（ひらがな、かたかな、漢字入門）
- ・簡単な文の読み書き

受講要件：

- ・日本語の学習経験が（ほとんど）ないこと
- ・期間中、すべての授業に出席できること



■スポット講座「日本語メール ★ 印象アップ！」

日程：6/1（金）・6/8（金）、15：20～17：00（全2回）

対象：本学の留学生（定員40名）

内容：日本語でメールを書いているものの、書き方が自己流でいまひとつ自信がないという人のための講座です。メールは日常的なコミュニケーションの重要なツールです。日本語のメールの文体や書式のルールを学んで、自然で印象のよいメールを書いて、あなたのコミュニケーション力を磨いてみませんか。

日本語レベル：日本語能力試験 N2 程度

■スポット講座：「敬語に強くなろう」

日程：6/22（金）・6/29（金）、15：20～17：00（全2回）

対象：本学の留学生、外国人研究者（定員40名）

内容：日本語レベルが上級になっても「敬語」に苦手意識を持つ留学生は多いようです。難しく見える敬語のルールも、基本を押さえれば、それほど怖いものではありません。この講座では、敬語の仕組みを体系的に学び、場面に即した適切な使用のルールを豊富な練習を通して学びます。敬語の世界を知って、日本語のコミュニケーションに自信をもちましょう。

日本語レベル：日本語能力試験 N2 合格程度の日本語力があること

■スポット講座「入門！日本語学習サポーター」

日程：5/14（月）15：20～17：00

対象：日本語を母語とする本学の学生で、留学生に対する日本語学習支援に関心がある方（定員20名）

内容：世界各国から集まった留学生の日本語学習を手伝ってみませんか。本講座では、「教室で学んだ日本語を使って、もっと練習をしたい」と希望している留学生を効果的に支援するためのポイントを学びます。具体的には、相手の日本語レベルに応じてわかりやすく質問したり説明したりする方法や、会話の際の文化差への配慮の仕方などについてです。また、それらを踏まえて、留学生と実際に話してみる体験も行います。

なお、本講座の受講後、希望者には、本センターの「日本語学習サポーター」として活躍するチャンスが開かれています。外国人が見る日本の姿や、日本語を再発見する面白さにぜひ触れてみてください。

上記どれについても、次の点は共通です。

●受講料：無料

●会場：日本語教育センター

（本郷キャンパス・第2本部棟5階）

●申込方法：日本語教育センターのHPから、該当するコース・講座の申込書をダウンロードし、必要事項を記入して、留学生・外国人研究者支援課（本郷キャンパス・御殿下・「学生支援センター」2階）に持参。

●受付期間：5月1日（火）から。各コースとも先着順に受け付けます。締切は、コース・講座によって違うのでセンターのHPをごらんください。

●お問い合わせ：

申込方法等→日本語教育センター事務（留学生・外国人研究者支援課）内線：22564

授業内容等→日本語教育センター 内線：22563

<Homepage> <http://www.nkc.u-tokyo.ac.jp/>

<Twitter> <http://twitter.com/TodaiNihongoC/>

<Facebook> <http://www.facebook.com/TodaiNihongoC/>

< Short-term Introductory Japanese Course > offered by Center for Japanese Language Education [Nihongo Center]

The Center for Japanese Language Education will be offering a short-term Japanese course for beginning level students or researchers with limited experience with the Japanese language.

■ Two-week Introduction to Japanese Language Course

Term: From June 11(Mon.) to the 14(Thu.), and June 18(Mon.) to the 21(Thu.) 13:30-17:00

Contents: In 8 days, the basics of the Japanese language (basic grammar, character, etc.) as well as communication in Japanese through listening and speaking will be taught. (16 sessions)

-Greetings + Useful expressions

-Basic Grammar (Noun sentences, Adjective sentences, Verb sentences, Question words, Particles)

-System of Japanese characters including Kanji

-Reading and Writing of simple texts

Requirements for the course:

- students or researchers with little to no experience with Japanese language

- be able to attend every class

● **Eligibility:** The University of Tokyo International Students and Foreign Researchers

● **Tuition:** There is no tuition fee.

● **Location of Class:** Center for Japanese Language Education (Adm. Bureau # 2, 5th floor, Hongo)

● **How to Apply:** Download the application form from the Center's home page, and after filling in the form, bring it to the Center Office* by the deadline.

* International Students and Researchers Support Group (Student Center, 2nd floor, Gotenshita, Hongo)

Campus)

● **Application Period:** From May 1(Tue.)to 12:00 noon on June 8(Fri.)

Applications will be accepted on a first-come-first-served basis until the class becomes full. For more details on seating capacity and deadlines, please refer to the Center homepage.

<Homepage> <http://www.nkc.u-tokyo.ac.jp/>
<Twitter> <http://twitter.com/TodaiNihongoC/>
<Facebook> <http://www.facebook.com/TodaiNihongoC/>

お知らせ

情報基盤センター

「はじめての論文の探し方」・「RefWorks を使うには？」
“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

講習会に参加して、文献の探し方の基本をマスターしましょう！

情報基盤センター図書館電子化部門では、定期的に、“情報探索ガイダンス” 各種コースを実施しています。

実際にパソコンを操作しながら実習するので、わかりやすいと大変好評です。

5月は、文献検索初心者におすすめ「はじめての論文の探し方」、参考文献リストも自動作成できる文献管理ツールの使い方を学ぶ「RefWorks を使うには？」コース等を実施します。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

※学外からの利用方法はどのコースでも説明します。

情報基盤センター
自宅から検索するには?
5/14(月) 12:20~12:40
RefWorks を使うには?
5/17(木)15:00~16:00
5/30(水)15:00~16:00
はじめての論文の探し方
5/18(金)13:00~14:00
5/22(火)15:00~16:00

■ 5/14 (月) 12:20 ~ 12:40

【自宅から検索するには?】(20分ワンポイント講習)

自宅や帰省・出張先など、学外からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ知りたい。そんな方にお奨めなのがこのコース。

ECCS アカウント認証による SSL-VPN Gateway サービスを紹介します。

一般に公開されている電子ジャーナルやデータベースもご案内。

■ 5/17 (木) 15:00 ~ 16:00

■ 5/30 (水) 15:00 ~ 16:00

【RefWorks を使うには?】

(同内容 2 回)

これから RefWorks を使ってみようという方向けに、Web 版の文献管理ツール「RefWorks」の使い方を説明します。

東京大学 OPAC や、CiNii Articles (日本語論文)、Web of Science (英語論文) など代表的なデータベースからのデータの取り込み方と、参考文献リストの自動作成方法を実習します。

同内容で 2 回実施しますので、ご都合のつくほうにご参加ください。

■ 5/18 (金) 13:00 ~ 14:00

■ 5/22 (火) 15:00 ~ 16:00

【はじめての論文の探し方】

(同内容 2 回)

「文献検索は初めて」という初心者向けにゆっくりと、文献リストの読み取り方、図書、雑誌、日本語論文 (CiNii Articles)、英語論文 (Web of Science) の基本的な探し方を実習します。

同内容で 2 回実施しますので、ご都合のつくほうにご参加ください。

● **会場:** 本郷キャンパス総合図書館 1 階講習会コーナー (ECCS 無線 LAN 設定済みのノート PC 持込 OK) 定員 17 名

● **参加費:** 無料

● **予約不要** 各回先着 17 名。直接ご来場ください。

※上記の他に、韓国語による講習会も実施します。(参照: P74 記事「韓国語で講習します! 留学生のための“はじめての論文の探し方”ガイダンス」)

★**授業・ゼミ・学生グループなどを対象にオーダーメイドで講習します!**

論文の探し方の出張講習・オーダーメイド講習を随時受付中です(無料)。授業やゼミの内容に合わせて講習いたします。会場のことなど、ご相談に応じます。まず

はお気軽にお問い合わせください。どのキャンパスでも、学生だけのグループでも OK です。

過去の実施例は以下の URL でご覧いただけます。
(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

★ Litetopi メールマガジン発信中！

本学所属の方を対象に、データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。(無料)



●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)
literacy * lib.u-tokyo.ac.jp
(*は@に置き換えて送信してください。)
<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>
(ツイッター http://twitter.com/gacos_todai)



お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

クリオージョの仔馬の名前を募集

今年5月17日分娩予定のクリオージョの仔馬の名前を募集します。クリオージョはアルゼンチンのラ・プラタ大学との国際交流の証として平成6年に中央競馬会の協力のもと東大に分与された乗用馬です。サラブレッドに比べ小型で温厚な性格から身障者乗馬用として全国の施設で活躍しています。今回生まれる予定の仔馬の雌雄判別はしていませんので、オスとメスの名前を考えてください。これまで牧場では、アルゼンチンの公用語のスペイン語から名付けてきました。

*これまでつけた名前(性別:意味):サバド(♀:土曜日)ルネス(♂:月曜日)ノセット(♂:ラ・プラタ大学の教授の名前)クマ(♀:アルゼンチンのインディオ・アイマラ語で「クリーンでピュア」の意味)セルベッサ(♀:ビール)トロンテス(♀:アルゼンチン白ワイン固有品種名)

応募いただいた名前の中から選考し、日本馬事協会へ血統登録を申請します。採用された方には、血統登録書のコピー、仔馬の写真を贈呈いたします(記念品の贈呈時期は年末を予定しています)。

応募方法:メールの件名を「仔馬の名前」とし、オスとメスの仔馬の名前、応募者の氏名・連絡先・メールアドレスを記入のうえ附属牧場担当者(遠藤麻衣子: amaimai@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp)宛にメールにて送付願います。ぜひ、素敵な名前を考えてください。

応募メ切:6月末日



母馬 フェリス (左)、父馬 パトロンシート (右)

お知らせ

情報基盤センター

韓国語で講習します！ 留学生のための「はじめての論文の探し方」ガイダンス

情報基盤センター図書館電子化部門では、韓国人講師による「留学生のための「はじめての論文の探し方」ガイダンス」を開催します。

内容は、レポート・論文作成に役立つ、データベースを使った図書や雑誌論文の検索実習です。

入門的な内容ですので、新入学の留学生に限らず、初心者の方の参加も歓迎します。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。



●講習内容

- ・ 図書の探し方
- ・ 電子ジャーナルで雑誌論文を入手する方法
- ・ 日本語論文の探し方 (CiNii Articles)
- ・ 英語論文の探し方 (Web of Science)
- ・ 自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法

●会 場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー

●日 時：5/18 (金) 15：00～16：00

詳細は下記のサイトをご覧ください。(韓国語)
<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/k/training-k.html>

●参加費：無料

●予約不要

先着17名。直接ご来場ください。

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)
 literacy * lib.u-tokyo.ac.jp
 (*は@に置き換えて送信してください。)
<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>
 (ツイッター http://twitter.com/gacos_today)

お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

第三回放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告会開催について

大学院農学生命科学研究科・農学部では、以下の要領で研究報告会を開催します。多くの方のご来場をお待ち

しております。

『第三回放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告会』

- 東日本大震災に関する救援・復興に係る農学生命科学研究科の取組み -

プログラム：

開会の辞

長澤 寛道 大学院農学生命科学研究科長

農学生命科学研究科全体の取組について

中西 友子 教授 (附属放射性同位元素施設)

水稲における放射性セシウムの吸収解析と低減対策

佐藤 誠 稲作科長 (福島県農業総合センター作物園芸部)

被災農地の農業再生のデザイン－資源作物の栽培とエネルギー化

森田 茂紀 教授 (附属生態調和農学機構)

福島水田におけるイネのセシウム吸収の品種間差

藤原 徹 教授 (応用生命化学専攻)

自然凍結融解を利用した農地除染の試み

溝口 勝 教授 (農学国際専攻)

警戒区域内で原発事故後150日間飼養された原種ブタの生殖機能について (中間報告)

眞鍋 昇 教授 (附属牧場)

李 俊佑 助教 (附属牧場)

海水魚のエラからセシウムが排出される

金子 豊二 教授 (水圏生物科学専攻)

事故当年にモモ樹体内に移行した放射性核種(の本年度)の動態

高田 大輔 助教 (附属生態調和農学機構)

放射性物質と食の安全を市民はどう捉えたか

細野 ひろみ 准教授 (附属生態調和農学機構)

閉会の辞

長澤 寛道 大学院農学生命科学研究科長

日 時：5月26日(土) 13：00～17：00

場 所：安田講堂

対 象：一般 (どなたでも参加できます)

定 員：600名 (当日先着順、事前登録不要)

※定員を超えた場合、入場をお断りすることがあります。

参加費：無料

主催：大学院農学生命科学研究科・農学部

後援：東京大学救援・復興支援室

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
24.3.31	吉田 邦夫	定 年	総合研究博物館教授
24.3.31	山根 久和	定 年	生物生産工学研究センター教授
24.3.31	馬場 康雄	定 年	大学院法学政治学研究科教授
24.3.31	岡山 博人	定 年	大学院医学系研究科教授
24.3.31	武谷 雄二	定 年	大学院医学系研究科教授
24.3.31	谷口 維紹	定 年（生産技術研究所特任教授）	大学院医学系研究科教授
24.3.31	藤田 敏郎	定 年（先端科学技術研究センター特任教授）	大学院医学系研究科教授
24.3.31	三品 昌美	定 年	大学院医学系研究科教授
24.3.31	新井 民夫	定 年	大学院工学系研究科教授
24.3.31	大久保 誠介	定 年	大学院工学系研究科教授
24.3.31	笠木 伸英	定 年（科学技術振興機構上席フェロー）	大学院工学系研究科教授
24.3.31	河内 啓二	定 年	大学院工学系研究科教授
24.3.31	久保 哲夫	定 年	大学院工学系研究科教授
24.3.31	小林 郁太郎	定 年	大学院工学系研究科教授
24.3.31	鈴木 俊夫	定 年	大学院工学系研究科教授
24.3.31	土井 正男	定 年	大学院工学系研究科教授
24.3.31	前田 康二	定 年	大学院工学系研究科教授
24.3.31	宮田 秀明	定 年	大学院工学系研究科教授
24.3.31	天野 正幸	定 年	大学院人文社会系研究科教授
24.3.31	尾上 圭介	定 年	大学院人文社会系研究科教授
24.3.31	片山 英男	定 年	大学院人文社会系研究科教授
24.3.31	近藤 和彦	定 年	大学院人文社会系研究科教授
24.3.31	盛山 和夫	定 年	大学院人文社会系研究科教授
24.3.31	土田 龍太郎	定 年	大学院人文社会系研究科教授
24.3.31	西村 清和	定 年	大学院人文社会系研究科教授
24.3.31	吉田 伸之	定 年	大学院人文社会系研究科教授
24.3.31	青木 健一	定 年	大学院理学系研究科教授
24.3.31	岡村 定矩	定 年	大学院理学系研究科教授
24.3.31	神谷 律	定 年	大学院理学系研究科教授
24.3.31	久保野 茂	定 年	大学院理学系研究科附属原子核科学研究センター教授
24.3.31	坂野 仁	定 年	大学院理学系研究科教授
24.3.31	棚部 一成	定 年	大学院理学系研究科教授
24.3.31	瀧口 宏夫	定 年	大学院理学系研究科教授
24.3.31	松本 良	定 年	大学院理学系研究科教授
24.3.31	山形 俊男	定 年	大学院理学系研究科教授
24.3.31	青木 一郎	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
24.3.31	明石 博臣	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
24.3.31	伊藤 喜久治	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
24.3.31	太田 明德	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
24.3.31	佐々木 伸雄	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
24.3.31	谷口 信和	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
24.3.31	樋口 廣芳	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
24.3.31	貫月 岱造	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
24.3.31	宮崎 毅	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
24.3.31	若木 高善	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
24.3.31	渡部 終五	定 年	大学院農学生命科学研究科教授
24.3.31	山下 修一	定 年	大学院農学生命科学研究科准教授
24.3.31	奥田 央	定 年	大学院経済学研究科教授
24.3.31	三輪 芳朗	定 年	大学院経済学研究科教授

24.3.31	森 建資	定 年	大学院経済学研究科教授
24.3.31	安達 裕之	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	池田 信雄	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	久保田 俊一郎	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	黒田 玲子	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	小宮山 進	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	玉井 哲雄	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	中澤 英雄	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	林 文代	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	氷上 忍	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	船曳 建夫	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	古矢 旬	定 年	大学院総合文化研究科附属グローバル地域研究機構教授
24.3.31	三角 洋一	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	本村 凌二	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	山内 昌之	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	湯浅 博雄	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	ROSSITER PAUL	定 年	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	奥野 誠	定 年	大学院総合文化研究科准教授
24.3.31	杉山 雄一	定 年 (理化学研究所)	大学院薬学系研究科教授
24.3.31	北田 均	定 年	大学院数理科学研究科准教授
24.3.31	岩田 修一	定 年	大学院新領域創成科学研究科教授
24.3.31	神田 順	定 年	大学院新領域創成科学研究科教授
24.3.31	國島 正彦	定 年	大学院新領域創成科学研究科教授
24.3.31	島田 莊平	定 年	大学院新領域創成科学研究科准教授
24.3.31	土肥 健純	定 年	大学院情報理工学系研究科教授
24.3.31	今井 浩三	定 年 (医科学研究所附属病院長、医科学研究所特任教授)	医科学研究所附属先端医療研究センター教授
24.3.31	岩倉 洋一郎	定 年	医科学研究所附属システム疾患モデル研究センター教授
24.3.31	笹川 千尋	定 年	医科学研究所教授
24.3.31	中村 義一	定 年	医科学研究所教授
24.3.31	森本 幾夫	定 年	医科学研究所附属先端医療研究センター教授
24.3.31	山本 雅	定 年	医科学研究所教授
24.3.31	都司 嘉宣	定 年	地震研究所准教授
24.3.31	尾崎 文昭	定 年	東洋文化研究所教授
24.3.31	加納 啓良	定 年	東洋文化研究所教授
24.3.31	鈴木 董	定 年	東洋文化研究所教授
24.3.31	田中 信行	定 年	社会科学研究所教授
24.3.31	岡野 達雄	定 年	生産技術研究所教授
24.3.31	黒田 和男	定 年 (宇都宮大学特任教授)	生産技術研究所教授
24.3.31	渡辺 正	定 年	生産技術研究所教授
24.3.31	福来 正孝	定 年 (国際高等研究所力ブリ数物連携宇宙研究機構特任教授)	宇宙線研究所教授
24.3.31	柿崎 明人	定 年	物性研究所附属軌道放射物性研究施設教授
24.3.31	八木 健彦	定 年	物性研究所教授
24.3.31	久保田 実	定 年	物性研究所准教授
24.3.31	小宮山 眞	定 年 (筑波大学医学医療系教授)	先端科学技術研究センター教授
24.3.31	宮野 健次郎	定 年	先端科学技術研究センター教授
24.3.31	徳山 英一	定 年	大気海洋研究所教授
24.3.31	西田 睦	定 年	大気海洋研究所教授
24.3.31	北岡 伸一	辞 職 (政策研究大学院大学教授)	大学院法学政治学研究科教授
24.3.31	森田 朗	辞 職	大学院法学政治学研究科教授
24.3.31	五十嵐 隆	辞 職 (国立成育医療研究センター総長 (理事長))	大学院医学系研究科教授
24.3.31	永井 良三	辞 職	大学院医学系研究科教授
24.3.31	宇於崎 宏	辞 職	大学院医学系研究科准教授
24.3.31	長崎 晋也	辞 職	大学院工学系研究科教授

24.3.31	赤石 美奈	辞 職	大学院工学系研究科准教授
24.3.31	坂本 雄三	辞 職 (建築研究所理事)	大学院工学系研究科教授
24.3.31	竹内 健	辞 職	大学院工学系研究科准教授
24.3.31	小松 久男	辞 職 (東京外国語大学特任教授)	大学院人文社会系研究科教授
24.3.31	初田 哲男	辞 職 (理化学研究所主任研究員)	大学院理学系研究科教授
24.3.31	林 正彦	辞 職 (自然科学研究機構国立天文台長)	大学院理学系研究科教授
24.3.31	江前 敏晴	辞 職 (筑波大学生命環境系教授)	大学院農学生命科学研究科准教授
24.3.31	中元 朋実	辞 職 (京都工芸繊維大学生物資源フィールド科学教育研究センター教授)	大学院農学生命科学研究科准教授
24.3.31	Wilson Bernard Francis	辞 職	教養学部附属教養教育高度化機構准教授
24.3.31	井上 健	辞 職	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	丹治 愛	辞 職	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	松浦 寿輝	辞 職	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	山影 進	辞 職	大学院総合文化研究科教授
24.3.31	武田 弘資	辞 職 (長崎大学薬学部准教授)	大学院薬学系研究科准教授
24.3.31	横島 聡	辞 職 (名古屋大学大学院創薬科学研究科准教授)	大学院薬学系研究科准教授
24.3.31	Liu Chun	辞 職	大学院数理科学研究科教授
24.3.31	Kikvidze Zaal	辞 職	大学院新領域創成科学研究科准教授
24.3.31	三原 健治	辞 職 (特許庁審査官)	大学院新領域創成科学研究科准教授
24.3.31	百生 敦	辞 職 (東北大学多元物質科学研究所教授)	大学院新領域創成科学研究科准教授
24.3.31	田中 久美子	辞 職 (九州大学大学院システム情報科学研究院教授)	大学院情報理工学系研究科准教授
24.3.31	中村 祐輔	辞 職	医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター教授
24.3.31	長崎 正朗	辞 職 (東北大学東北メディカル・メガバンク機構ゲノム解析部門教授)	医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター准教授
24.3.31	丘山 新	辞 職	東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター教授
24.3.31	田中 明彦	辞 職 (国際協力機構理事長)	東洋文化研究所教授
24.3.31	Blackwood Thomas Stephen	辞 職	社会科学研究所准教授
24.3.31	加藤 茂明	辞 職	分子細胞生物学研究所教授
24.3.31	佐藤 卓	辞 職 (東北大学多元物質科学研究所教授)	物性研究所附属中性子科学研究施設准教授
24.3.31	御厨 貴	辞 職 (放送大学教授)	先端科学技術研究センター教授
24.3.31	千田 恵介	任期満了 (法務省検事)	大学院法学政治学研究科教授
24.3.31	甲斐 一郎	任期満了	大学院医学系研究科教授
24.3.31	菅田 勝也	任期満了	大学院医学系研究科教授
24.3.31	村嶋 幸代	任期満了	大学院医学系研究科教授
24.3.31	郭 伸	任期満了	大学院医学系研究科准教授
24.3.31	岸田 省吾	任期満了	大学院工学系研究科教授
24.3.31	局 博一	任期満了 (農学生命科学研究科特任教授)	大学院農学生命科学研究科教授
24.3.31	GRANADOS QUIROZ ULIS	任期満了	教養学部附属教養教育高度化機構准教授
24.3.31	佐藤 学	任期満了	大学院教育学研究科教授
24.3.31	濱野 保樹	任期満了	大学院新領域創成科学研究科教授
24.3.31	小野 太一	任期満了 (厚生労働省)	大学院公共政策学連携研究部教授
24.3.31	廣田 輝直	任期満了	東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター准教授
24.3.31	一木 正聡	出向期間満了 (産業技術総合研究所集積マイクロシステム研究センター)	大学院工学系研究科准教授
(採 用)			
24.3.16	高橋 尚人	医学部准教授	
24.4.1	谷口 武俊	政策ビジョン研究センター教授	
24.4.1	三國谷 勝範	政策ビジョン研究センター教授	
24.4.1	石山 宏樹	大学院法学政治学研究科教授	東京地方検察庁特別捜査部検事
24.4.1	山崎 力	医学部教授	大学院医学系研究科特任教授
24.4.1	山本 則子	大学院医学系研究科教授	東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科教授
24.4.1	渡邊 聡明	大学院医学系研究科教授	

24.4.1	近藤 尚己	大学院医学系研究科准教授	山梨大学大学院医学工学総合研究部講師
24.4.1	糸井 達哉	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科特任助教
24.4.1	瀬田 史彦	大学院工学系研究科准教授	
24.4.1	鳥海 不二夫	大学院工学系研究科准教授	名古屋大学大学院情報科学研究科助教
24.4.1	梶原 三恵子	大学院人文社会系研究科准教授	京都大学人文科学研究所助教
24.4.1	勝田 俊輔	大学院人文社会系研究科准教授	岐阜大学教育学部准教授
24.4.1	島田 竜登	大学院人文社会系研究科准教授	
24.4.1	祐成 保志	大学院人文社会系研究科准教授	信州大学人文学部准教授
24.4.1	高岸 輝	大学院人文社会系研究科准教授	東京工業大学大学院社会理工学研究科准教授
24.4.1	塩見 美喜子	大学院理学系研究科教授	
24.4.1	吉田 直紀	大学院理学系研究科教授	国際高等研究所数物連携宇宙研究機構特任准教授
24.4.1	立川 裕二	大学院理学系研究科准教授	国際高等研究所数物連携宇宙研究機構特任助教
24.4.1	三浦 裕亮	大学院理学系研究科准教授	大気海洋研究所特任助教
24.4.1	柴田 道夫	大学院農学生命科学研究科教授	農業・食品産業技術総合研究機構花き研究所長
24.4.1	杉浦 勝明	大学院農学生命科学研究科教授	
24.4.1	山田 章雄	大学院農学生命科学研究科教授	国立感染症研究所獣医科学部長
24.4.1	海津 裕	大学院農学生命科学研究科准教授	北海道大学大学院農学研究院准教授
24.4.1	下津 克己	大学院経済学研究科教授	一橋大学大学院経済学研究科教授
24.4.1	杉原 薫	大学院経済学研究科教授	京都大学東南アジア研究所教授
24.4.1	米山 正樹	大学院経済学研究科教授	
24.4.1	GARCIA TESORO ANA ISABEL	教養学部附属教養教育高度化機構准教授	
24.4.1	SLADE TOBY ALEXANDER	教養学部附属教養教育高度化機構准教授	教養学部附属教養教育高度化機構特任講師
24.4.1	RAPPE GUIDO	教養学部附属教養教育高度化機構准教授	
24.4.1	ROBINSON PETER	教養学部附属教養教育高度化機構准教授	
24.4.1	西崎 文子	大学院総合文化研究科附属グローバル地域研究機構教授	
24.4.1	石原 あえか	大学院総合文化研究科准教授	
24.4.1	大石 和欣	大学院総合文化研究科准教授	名古屋大学院文学研究科准教授
24.4.1	Grenon Izabelle	大学院総合文化研究科准教授	
24.4.1	津田 浩司	大学院総合文化研究科准教授	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教
24.4.1	寺田 新	大学院総合文化研究科准教授	
24.4.1	黛 秋津	大学院総合文化研究科准教授	
24.4.1	村上 祐介	大学院教育学研究科准教授	
24.4.1	逆井 卓也	大学院数理科学研究科准教授	東京工業大学大学院理工学研究科助教
24.4.1	福田 正宏	大学院新領域創成科学研究科准教授	
24.4.1	安川 聡	大学院新領域創成科学研究科准教授	特許庁特許審査第三部審査官
24.4.1	小林 直樹	大学院情報理工学系研究科教授	東北大学大学院情報科学研究科教授
24.4.1	千葉 滋	大学院情報理工学系研究科教授	東京工業大学大学院情報理工学研究科教授
24.4.1	岡本 剛和	大学院情報学環准教授	総務省情報流通行政局郵政行政部企画課課長補佐
24.4.1	関 啓一郎	大学院公共政策学連携研究部教授	総務省四国総合通信局長
24.4.1	武川 睦寛	医科学研究所教授	名古屋大学環境医学研究所教授
24.4.1	中江 進	医科学研究所附属システム疾患モデル研究センター准教授	医科学研究所特任准教授
24.4.1	HEISSIG BEATE	医科学研究所附属幹細胞治療研究センター准教授	医科学研究所特任准教授
24.4.1	波多野 恭弘	地震研究所准教授	地震研究所特任助教
24.4.1	李 賢鮮	東洋文化研究所准教授	東北大学大学院文学研究科助教
24.4.1	藤谷 武史	社会科学研究所准教授	北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター准教授
24.4.1	田中 稔	分子細胞生物学研究所附属エピゲノム疾患研究センター准教授	分子細胞生物学研究所特任准教授
24.4.1	片山 伸彦	国際高等研究所力ブリ数物連携宇宙研究機構教授	高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所教授
(昇 任)			
24.3.16	岩田 忠久	大学院農学生命科学研究科教授	大学院農学生命科学研究科准教授

24.3.16	松浦 宏行	大学院新領域創成科学研究科准教授	大学院新領域創成科学研究科講師
24.4.1	大西 晶子	国際本部准教授	国際本部講師
24.4.1	米田 穰	総合研究博物館教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
24.4.1	後藤 順	大学院医学系研究科准教授	医学部講師
24.4.1	柴原 純二	大学院医学系研究科准教授	大学院医学系研究科講師
24.4.1	竹下 克志	大学院医学系研究科准教授	大学院医学系研究科講師
24.4.1	春名 めぐみ	大学院医学系研究科准教授	大学院医学系研究科講師
24.4.1	加藤 泰浩	大学院工学系研究科附属工ネルギー・資源フロンティアセンター教授	大学院工学系研究科准教授
24.4.1	峯松 信明	大学院工学系研究科教授	大学院情報理工学研究科准教授
24.4.1	種村 拓夫	大学院工学系研究科准教授	先端科学技術研究センター講師
24.4.1	井島 正博	大学院人文社会系研究科教授	大学院人文社会系研究科准教授
24.4.1	小島 毅	大学院人文社会系研究科教授	大学院人文社会系研究科准教授
24.4.1	西村 義樹	大学院人文社会系研究科教授	大学院人文社会系研究科准教授
24.4.1	野崎 歆	大学院人文社会系研究科教授	大学院人文社会系研究科准教授
24.4.1	高橋 典幸	大学院人文社会系研究科准教授	史料編纂所助教
24.4.1	中嶋 康博	大学院農学生命科学研究科教授	大学院農学生命科学研究科准教授
24.4.1	松木 直章	大学院農学生命科学研究科教授	大学院農学生命科学研究科准教授
24.4.1	飯田 俊彰	大学院農学生命科学研究科准教授	大学院農学生命科学研究科講師
24.4.1	大橋 弘	大学院経済学研究科教授	大学院経済学研究科准教授
24.4.1	網野 徹哉	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.4.1	アルヴィ なほ子	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.4.1	大堀 壽夫	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.4.1	菊川 芳夫	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.4.1	木村 忠正	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.4.1	齋藤 希史	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.4.1	酒井 邦嘉	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.4.1	長谷川 博子	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.4.1	藤井 聖子	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.4.1	星埜 守之	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.4.1	松村 剛	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.4.1	森 芳樹	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.4.1	森山 工	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.4.1	小野瀬 佳文	大学院総合文化研究科准教授	大学院工学系研究科講師
24.4.1	金子 知適	大学院総合文化研究科准教授	大学院総合文化研究科助教
24.4.1	野口 徹	大学院総合文化研究科准教授	大学院総合文化研究科助教
24.4.1	能智 正博	大学院教育学研究科教授	大学院教育学研究科准教授
24.4.1	高山 茂晴	大学院数理科学研究科教授	大学院数理科学研究科准教授
24.4.1	吉田 好邦	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
24.4.1	鈴木 牧	大学院新領域創成科学研究科准教授	大学院農学生命科学研究科附属演習林講師
24.4.1	有田 伸	社会科学研究所教授	社会科学研究所准教授
24.4.1	腰原 幹雄	生産技術研究所教授	生産技術研究所附属都市基盤安全工学国際研究センター准教授
24.4.1	松澤 克行	史料編纂所准教授	史料編纂所助教
(配置換)			
24.3.31	田中 明彦	東洋文化研究所教授	大学院情報学環教授
24.4.1	武内 和彦	サステイナビリティ学連携研究機構教授	大学院農学生命科学研究科教授
24.4.1	交告 尚史	大学院法学政治学研究科教授	大学院公共政策学連携研究部教授
24.4.1	佐久間 一郎	大学院工学系研究科附属医療福祉工学開発評価研究センター教授	大学院工学系研究科教授
24.4.1	GILMORE ALEXANDER	大学院工学系研究科准教授	教養学部附属教養教育高度化機構准教授
24.4.1	小佐野 重利	大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センター教授	大学院人文社会系研究科教授
24.4.1	田野井 慶太郎	大学院農学生命科学研究科附属放射性同位元素施設	大学院農学生命科学研究科准教授
24.4.1	奥田 洋司	大学院新領域創成科学研究科教授	人工物工学研究センター教授

24.4.1	山田 一郎	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院工学系研究科教授
24.4.1	割澤 伸一	大学院新領域創成科学研究科准教授	大学院工学系研究科准教授
24.4.1	眞溪 歩	大学院情報理工学系研究科准教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
24.4.1	松田 康博	大学院情報学環教授	東洋文化研究所教授
24.4.1	中村 周吾	大学院情報学環准教授	大学院農学生命科学研究科准教授
24.4.1	森 肇志	大学院公共政策学連携研究部教授	大学院法学政治学研究科教授
24.4.1	田中 廣壽	医科学研究所附属病院准教授	医科学研究所附属先端医療研究センター准教授
24.4.1	加藤 照之	地震研究所教授	地震研究所附属地震火山情報センター教授
24.4.1	堀 宗朗	地震研究所附属巨大地震津波災害予測研究センター教授	地震研究所教授
24.4.1	市村 強	地震研究所附属巨大地震津波災害予測研究センター准教授	地震研究所准教授
24.4.1	岡本 晃充	先端科学技術研究センター教授	大学院工学系研究科教授
24.4.1	中村 泰信	先端科学技術研究センター教授	大学院工学系研究科教授
(兼務命)			
24.4.1	清水 孝雄	国際高等研究所長	理事
24.4.1	古田 元夫	附属図書館長	大学院総合文化研究科教授
24.4.1	須藤 修	大学院情報学環長・大学院学際情報学府長	大学院情報学環教授
24.4.1	大木 康	東洋文化研究所長	東洋文化研究所教授
24.4.1	石田 浩	社会科学研究所長	社会科学研究所教授
24.4.1	中埜 良昭	生産技術研究所長	生産技術研究所教授
24.4.1	西野 嘉章	総合研究博物館長	総合研究博物館教授
24.4.1	浅見 泰司	空間情報科学研究センター長	空間情報科学研究センター教授
24.4.1	浅田 邦博	大規模集積システム設計教育研究センター長	大規模集積システム設計教育研究センター教授
24.4.1	山口 厚	大学院法学政治学研究科長・法学部長	大学院法学政治学研究科教授
24.4.1	原田 昇	大学院工学系研究科長・工学部長	大学院工学系研究科教授
24.4.1	藤田 豊久	人工物工学研究センター長	大学院工学系研究科教授
24.4.1	駒宮 幸男	素粒子物理国際研究センター長	大学院理学系研究科教授
24.4.1	相原 博昭	大学院理学系研究科長・理学部長	大学院理学系研究科教授
24.4.1	大桃 敏行	教育学部附属中等教育学校長	大学院教育学研究科教授
24.4.1	堅田 利明	大学院薬学系研究科長・薬学部長	大学院薬学系研究科教授
24.4.1	坪井 俊	大学院数理科学研究科長	大学院数理科学研究科教授
24.4.1	石川 裕	情報基盤センター長	大学院情報理工学系研究科教授
24.4.1	吉見 俊哉	大学総合教育研究センター長	大学院情報学環教授
24.4.1	伊藤 隆敏	大学院公共政策学連携研究部長・大学院公共政策学教育部長	大学院公共政策学連携研究部教授
24.4.1	今井 浩三	医科学研究所附属病院長	医科学研究所附属病院特任教授
24.4.1	梶田 隆章	宇宙線研究所長	宇宙線研究所附属宇宙ニュートリノ観測情報融合センター教授
24.4.1	中野 義昭	駒場オープンラボラトリー長	先端科学技術研究センター教授
24.4.1	五十嵐 泰夫	生物生産工学研究センター長	大学院農学生命科学研究科教授
24.4.1	萩谷 昌己	大学院情報理工学系研究科長	大学院情報理工学系研究科教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

全国に東大の同窓会を 作りましょう！

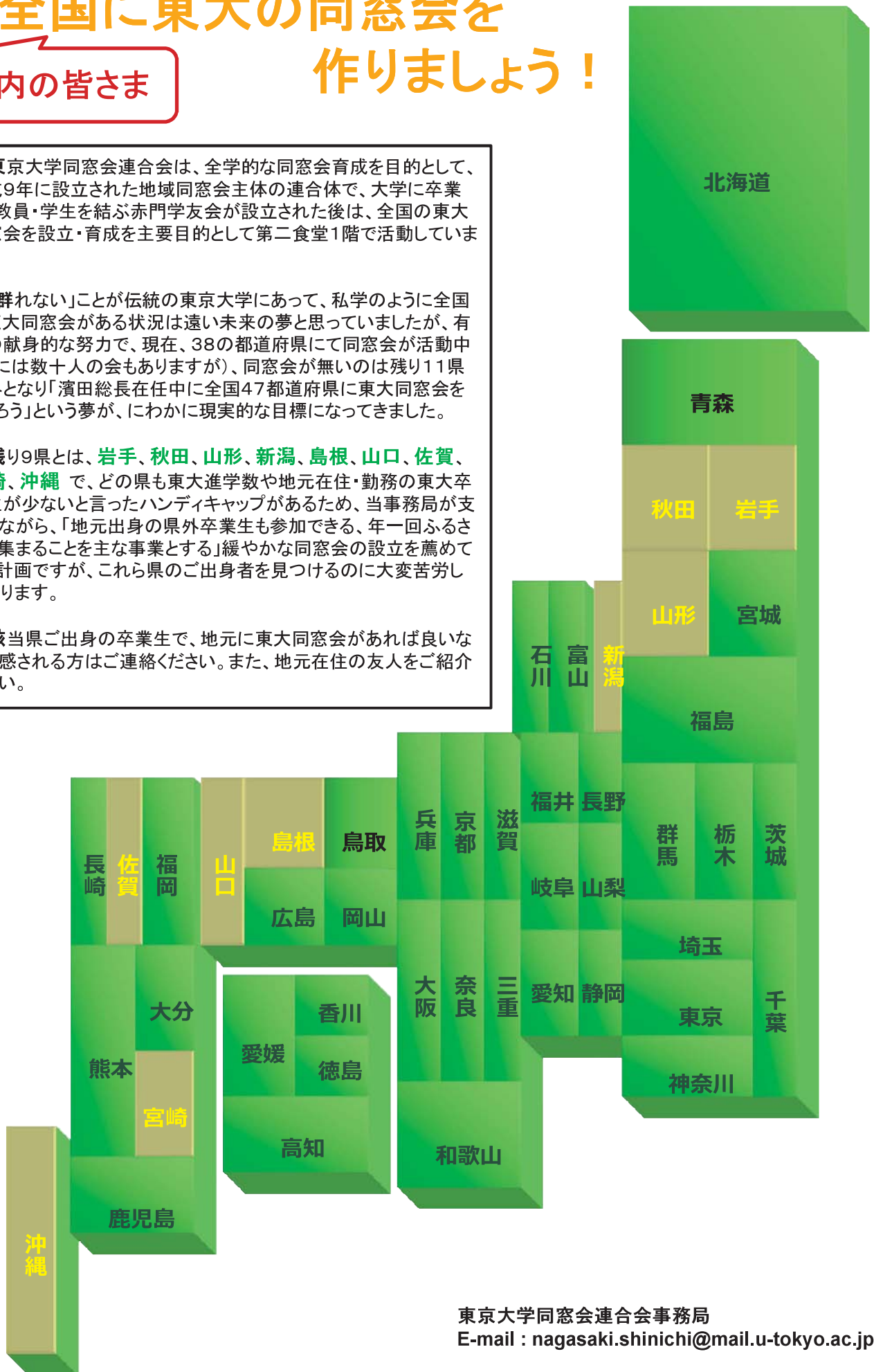
学内の皆さま

東京大学同窓会連合会は、全学的な同窓会育成を目的として、平成9年に設立された地域同窓会主体の連合体で、大学に卒業生・教員・学生を結ぶ赤門学友会が設立された後は、全国の東大同窓会を設立・育成を主要目的として第二食堂1階で活動しています。

「群れない」ことが伝統の東京大学にあって、私学のように全国に東大同窓会がある状況は遠い未来の夢と思っていました。有志の献身的な努力で、現在、38の都道府県にて同窓会が活動中（中には数十人の会もありますが）、同窓会が無いのは残り11県のみとなり「濱田総長在任中に全国47都道府県に東大同窓会をつくらう」という夢が、にわかに現実的な目標になってきました。

残り9県とは、**岩手、秋田、山形、新潟、島根、山口、佐賀、宮崎、沖縄**で、どの県も東大進学数や地元在住・勤務の東大卒業生が少ないと言ったハンディキャップがあるため、当事務局が支援しながら、「地元出身の県外卒業生も参加できる、年一回ふるさとで集まることを主な事業とする」緩やかな同窓会の設立を薦めて行く計画ですが、これら県のご出身者を見つけるのに大変苦労しております。

該当県ご出身の卒業生で、地元で東大同窓会があれば良いなと同感される方はご連絡ください。また、地元在住の友人をご紹介下さい。



東京大学同窓会連合会事務局
E-mail : nagasaki.shinichi@mail.u-tokyo.ac.jp

Contents

特集

- 02 平成24年度役員等の紹介
- 08 平成23年度卒業式・学位記授与式
- 18 平成24年度入学式・大学院入学式
- 36 平成23年度第2回「東京大学総長賞」授与式の挙
行及び「総長大賞」受賞者決定
- 40 東京大学の英文呼称

NEWS

一般ニュース

- 42 部局長の交代
- 48 地球観測データ統融合連携研究機構
アフリカ河川流域における地球観測および能力
開発に関する国際ワークショップ
- 48 救援・復興支援室
岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボラ
ンティアの活動報告
- 49 地球観測データ統融合連携研究機構
第3回アフリカ水循環国際シンポジウム
- 49 総括プロジェクト機構
太陽光を機軸とした持続可能グローバルエネ
ルギーシステム総括寄付講座（Global Solar+
Initiative: GS+I）がサウジアラビア、アブダラー
国王原子力再生可能エネルギー都市（KACARE）
と MOU を締結
- 50 国際本部 日本語教育センター
東京大学日本語教育連絡協議会・講演会を開催
- 50 本部留学生・外国人研究者支援課
東京大学アサツォー ディ・ケイ中国育英基金奨学
生 大学院修士課程修了報告会
- 51 バリアフリー支援室
「2011 年度東京大学バリアフリーシンポジウム
～大学の防災とバリアフリー～」開催される
- 51 救援・復興支援室
遠野市「東日本大震災・後方支援の集い～『縁』
が結ぶ復興への『絆』～」へ出席
- 52 救援・復興支援室、本部社会連携推進課
大槌町との連携協力に関する協定を締結

部局ニュース

- 52 大学院工学系研究科・工学部
ラリー・モンテカルロ・ヒストリック完走
- 53 生産技術研究所
先進モビリティ研究センター（ITS センター）「社
会人のための ITS 専門講座」開催される
- 54 大学院農学生命科学研究科・農学部
平成 23 年度 第 4 回農学生命科学研究科技術
職員研修会開催される
- 54 分子細胞生物学研究所・医科学研究所
平成 23 年度分生研・医科研合同技術発表会を
開催
- 55 低温センター
平成 23 年度低温センター「研究交流会・利用
者懇談会」を開催
- 56 医科学研究所
「医科学研究所共同研究拠点事業 平成 23 年度
共同研究成果報告会」が開催される
- 57 生産技術研究所
土木研究所と連携・協力協定を締結

- 57 情報基盤センター
教育用計算機システムの見学会を開催
- 58 大学院人文社会系研究科・文学部
第 3 回 PESETO 三大学人文学会議を開催

キャンパスニュース

- 60 本部入試課
第 2 次学力試験（前期日程）の合格者、同（後
期日程）第 1 段階選抜結果の発表
- 61 本部入試課
第 2 次学力試験（後期日程）、外国学校卒業学生
特別選考の合格者発表

コラム

- 63 再生のアカデミズム＜実践編＞ #02
- 64 ひょうたん島通信 第 4 回
- 65 決算の DOOR ～数字が語る東京大学 第 19 回
- 65 インタープリターズバイブル vol.57
- 66 Crossroad 産学連携本部だより vol.77
- 67 Policy + alt vol.31
- 68 ASIAN DIVERSITY No.18
- 68 Relay Column 「ワタシのオシゴト」 第 74 回
- 69 コミュニケーションセンターだより No.87
- 69 救援・復興支援室より No.11

INFORMATION

お知らせ

- 70 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第 5 4 6 (4 月 4 日) 号の発行
—教員による、学生のための学内新聞—
- 71 低温センター
低温センター安全講習会（高圧ガス保安法に基
づく保安教育）のお知らせ
- 71 国際本部 日本語教育センター
「2 週間初級日本語コース」および「スポット講
座」開講のお知らせ
- 73 情報基盤センター
「はじめての論文の探し方」・「RefWorks を使う
には？」“情報探索ガイダンス”各種コース実
施のお知らせ
- 74 大学院農学生命科学研究科・農学部
クリオージョの仔馬の名前を募集
- 74 情報基盤センター
韓国語で講習します！留学生のための“はじ
めての論文の探し方”ガイダンス
- 75 大学院農学生命科学研究科・農学部
第三回放射能の農畜水産物等への影響について
の研究報告会開催について

事務連絡

- 76 人事異動（教員）

巻末特集

- 82 全国に東大の同窓会を作りましょう！

淡青評論

- 84 社会システムの機能低下という複合災害

◆表紙写真◆

大学院入学式（18～35ページに関連記事）



七徳堂鬼瓦

社会システムの機能低下という複合災害

東日本大震災の発生から1年が経過し、復興へと徐々に向かいつつある。しかし、復興への途は平坦ではない。地域によって、その歩みに差も見られる。

復興を難しくしているのは、i) 被災エリアが広く、被害が激しかったこと、ii) 原子力発電所事故処理の先行きが見えないこと、iii) 高所移転に関する合意形成や水産加工業等基幹産業の再生に、個々人の意志決定が依存していることなど多くの要因がある。

このうち量的な面で言えば、発生が指摘されている首都直下地震や東南海・南海地震では、東日本大震災を遙かに上回る被害が予想される。災害への対応の困難さは、量によって次元が変わってしまうことを考えると、また日本の財政制約を考えると、首都直下地震など懸念される災害から復興することができるかどうかを疑っておく必要もある。

復興を可能とするには、住宅の耐震化や防火性能を上げることで、被害の絶対量を減らすことが求められる。それとともに、社会システムへの波及を抑えることが重要だと個人的には考えている。鉄道が止まり、多くの帰宅困難者が発生し、電力システムの機能低下で計画停電や節電に伴う産業・生活支障が生じたことは記憶に新しい。我々の日常生活は、これ以外にも、金融システムや物流システム、廃棄物処理システムなど多様な社会システムに依存している。それがひとたび停止したり、機能を低下させたりすれば、その影響は計り知れない。経済被害を含む被害の全体像は、社会システムの機能程度に依存する。しかし、これまで社会システムが複合的に、広域的にしかも長期にわたって機能を停止したことはない。

この領域について、波及過程を明らかにし、想定外の事象が起らないように対策を進めておかなければならない。そのために、できるだけ多くの可能性を収集し、分析していく必要がある。様々な分野で活躍されているお読みいただいている皆様から、その可能性をご指導いただければ幸甚です。

田中 淳 (大学院情報学環・学際情報学府)

(淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1424 2012年4月23日
東京大学広報室

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報課
TEL: 03-3811-3393
e-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp/>